FUTABASHA FANTASY NOVEL SERIES

# [小説]ファイアーエムブレム

# FIRE EMBLEM

## 【暗黒龍と光の剣】

Previously, cruel invaders took over his mother country and the Prince fled across the sea. He bided his time in exile, but was always anxious to liberate his mother-land. Time went by and the boy grew stronger mentally as well as physically. Thus, the spreading war draws him into the battlefield again and the high spirited youth cannot help but throw himself into the war. He recruits those who share the same aspiration as his own and embarks upon a trip to his homeland, driving off his enemies on the way. As he battles on, he gradually gets to know his enemies and realizes what the war means to him. He awakens to his position as heir to the throne. When the "FIRE EMBLEM" is bestowed upon him, which constitutes recognition of valor and gallantry on the part of the bestowed, he becomes a full-fledged adult and warrior.

AUTHOR・HIROSHI YAMAGUCHI
山口 宏



FUTABASHA FANTASY NOVEL SERIES

# FIRE EMBLEM

Previously, cruel invaders took over his mother country and the Prince fled across the sea.
He bided his time in exile, but was always anxious to liberate his mother-land.
Time went by and the boy grew stronger mentally as well as physically.
Thus, the spreading war draws him into the battlefield again and
the high spirited youth cannot help but throw himself into the war.
He recruits those who share the same aspiration as his own and
embarks upon a trip to his homeland, driving off his enemies on the way.
As he battles on, he gradually gets to know his enemies and realizes what the war means to him.
He awakens to his position as heir to the throne.
When the "FIRE EMBLEM" is bestowed upon him, which constitutes recognition of valor and
gallantry on the part of the bestowed, he becomes a full-fledged adult and warrior.

**STORY**

アカネイア大陸。平和なこの地に暗黒龍メディウスが目覚めた。100年前の遺恨を晴らすため、大陸制覇の野望を成就させるために……。

アリティア王国の第一王子マルスは祖国を追われ、小国タリスへと逃げのびていた。いつしか蹂躙された母国を解放することを夢見て。だが膨れあがった戦いはマルスを早々に戦場に引き込む。メディウスの建設した大ドルーア帝国の侵略軍が、タリス王国にも魔の手をのばしてきたのだ。はやる血気を抑えきれず、戦いに身を投じるマルス。待ち受ける数多くの試練に耐え、再び王国に平和をもたらすその日まで、彼の戦いは続く……!

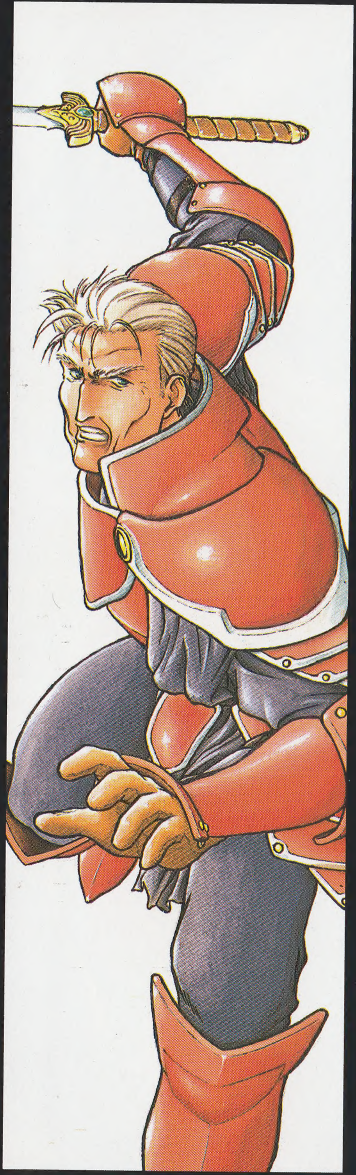
カバー・イラスト▶奥田ひとし
カバー・デザイン▶広井一夫[WIDE]



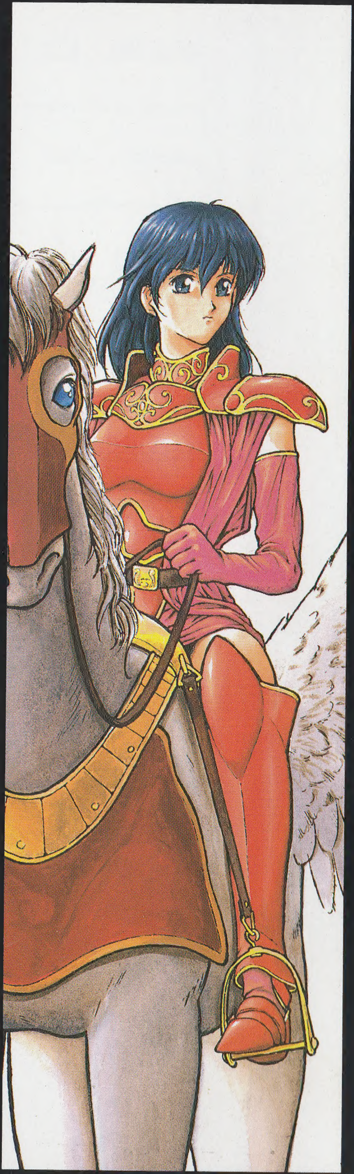
MARTH

# FIRE EMBLEM

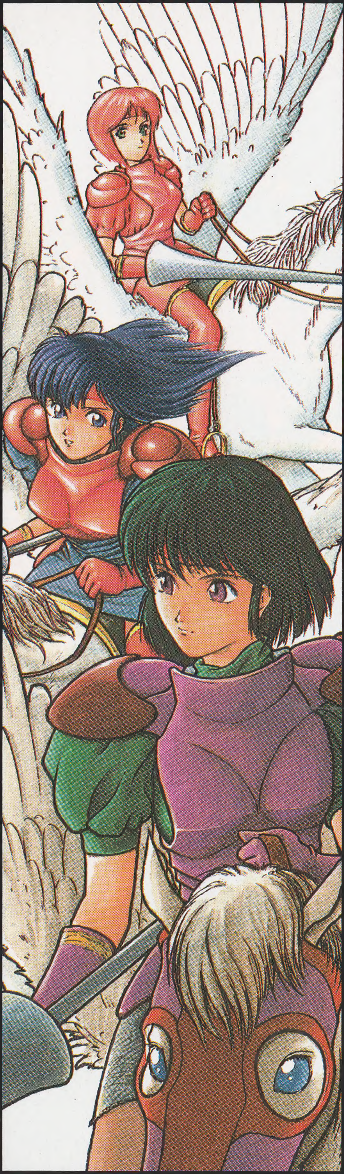
The Dark Dragon has come to life again, in order to seek revenge for the last hundred years, and to fulfil its ambition to conquer the Continent.
A war has spread all over the Continent and an age of darkness has taken over as a result. Now, the Prince returns, and partakes in a battle trip to recover his lost country and to bring peace back to the Continent. Previously, cruel invaders took over his mother country and the Prince fled across the sea.
He bided his time in exile, but was always anxious to liberate his mother-land. Time went by and the boy grew stronger mentally as well as physically.
Thus, the spreading war draws him into the battlefield again and the high spirited youth cannot help but throw himself into the war.
He recruits those who share the same aspiration as his own and embarks upon a trip to his homeland, driving off his enemies on the way.
As he battles on, he gradually gets to know his enemies and realizes what the war means to him. He awakens to his position as heir to the throne.
When the "FIRE EMBLEM" is bestowed upon him, which constitutes recognition of valor and gallantry on the part of the bestowed, he becomes a full-fledged adult and warrior.



JEIGAN



SHEEDA



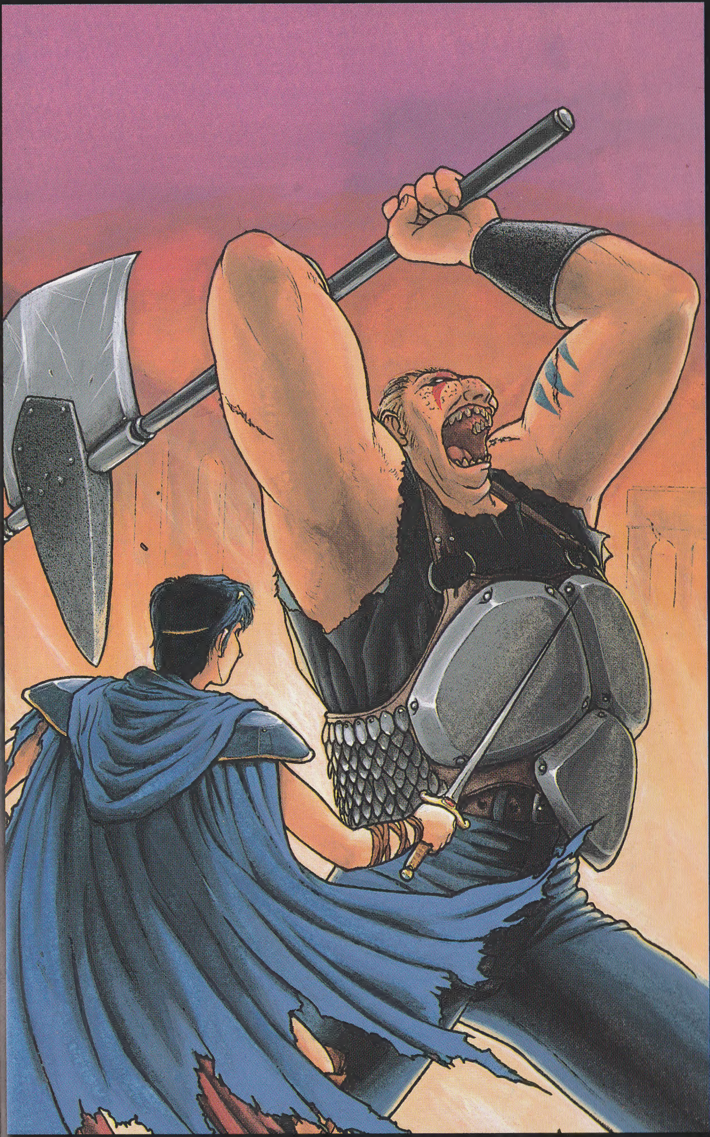
PAORA, KATUA, & EST



NABARL



JE

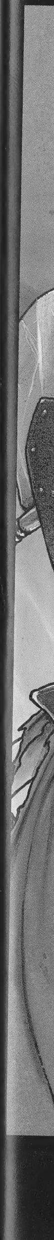


いやらしい笑い声と共に、カザックの手にした戦斧が閃いた。速い。60貫はあろうかという巨大な戦斧を、まるで棒切れかなにかのように操る。マルスは後ろに跳ね、渾身の一撃をかわした。

# ファイアーエムブレム

## 暗黒龍と光の剣

山口　宏



## 目次

カバーイラスト／奥田ひとし
口絵・本文挿画／武田俊也
口絵着彩／中村淳一
装丁／広井一夫［WIDE］
本文デザイン／松岡裕典［NEXT］
編集・制作／スタジオ・ハード

登場人物■紹介

マルス■英雄アンリの血を引くアリティア王国王子。帝国に滅ぼされた祖国の再建を目指す。
シーダ■タリス王国の王女。落ち延びたマルスを慕い、反ドルーア帝国の戦いに参加。
ジェイガン■元アリティア宮廷騎士団右翼隊長。マルスの守役、剣技の師でもある槍の名手。
剣皇ナバール■伝説の剣皇と呼ばれた達人。盗賊の用心棒にまで身をやつしていたが……。
レナ■僧侶。盗賊に追われ命を落としかけたところをマルスたちに救われる。
ジュリアン■デビルマウンテンの盗賊の一味だったが、仲間を裏切りレナとともに逃走する。
マリク■マルスの幼なじみの魔導士。必殺の魔法エクスカリバーを修得。
ガーネフ■皇帝メディウスと手を結んだ大司祭。暗黒魔法マフーを操る。
将軍カミユ■ガーネフと並ぶメディウスの片腕。グルニア黒騎士団にあって智将と称される。
皇帝メディウス■暗黒龍の異名を持つ帝国軍の総帥。アカネイア大陸を戦乱のるつぼに陥れた……。

加賀昭三氏をはじめ、素晴しい作品を創造されたゲーム制作スタッフ各位に、本作品を捧げます。

# 序章

アカネイア大陸。

遥（はる）か昔のことである。この地は一つの強大な国家、アカネイア王国によって統治（とうち）され、人々は、穏（おだ）やかで安息（あんそく）に満ちた日々を送っていた。

その大陸の南西部には広大な未開の森林が広がり、いつの頃からか、そこに龍人（マムクート）族と呼ばれる不思議な人々が棲（す）みつきはじめた。

魔力を封印した石の力により、自在に巨大な龍の姿に変身できる人々。それが龍人族だ。彼らは龍の力を用（もち）い、自らの手で未開の森林を切り開いていった。

アカネイア王国に統治された人間も、龍人族も、この頃は互いに干渉はせず、それぞれの生活圏を維持し、一応は共存関係を保っていた。

が、龍人族の中に一人の男が現れた時、両者の関係は崩れた。

暗黒龍メディウス。

龍人族の中で最も強大な力を持つという、野心に満ちた男だ。メディウスはまず、部族同士でいがみ合う龍人族を統一。大ドルーア帝国を打ち立てた。そして大陸制覇（せいは）の野望を抱き、アカネイア

王国への侵攻を開始したのだ。
　対するアカネイア王国も軍を編成し、果敢に応戦した。しかし人間と龍人族とでは、その力に差がありすぎた。暗黒龍メディウスとドルーア帝国軍の猛攻になす術はなく、王国軍は壊滅的打撃を受けた。
　今まさに世界は滅び去る。誰もがそう思った時だった。人々は一筋の光明を見いだした。
　アリティア地方のアンリという若者が、苦難の旅の末に神剣を手にし、暗黒龍メディウスの前に敢然と立ちはだかったのだ。
　神剣ファルシオン。
　常に光り輝く刀身を持った、神から与えられし聖なる武具。その一振りは目映い光彩を放ち、持つ者の意志を超え、邪悪な敵に止めを刺す。
　勇者アンリは、見事メディウスを打ち倒した。ドルーア帝国はその勢いを失い、アカネイア軍の反撃にあって瓦解した。メディウスに力を貸していた龍人族も、何処かに去って行った。
　以後、ドルーア帝国の基盤となったドルーア王国は、禁断の地として封印され、誰もそこに足を踏み入れることもなくなったのである。
　世界は再び平和な時を迎え、メディウスを倒した英雄アンリは、新たに誕生したアリティア王国の初代国王に選ばれた。そして彼が手にしていた神剣ファルシオンは、アリティア城の地下宝物庫で、長い眠りに就いたのだった。

それから百年。
アカネイア大陸には、アカネイア、アリティア、オレルアン、グルニア、マケドニア、グラ、タリスという七つの王国が誕生し、小さな争いはあるものの、平和な日々を刻み続けていた。

しかし。
ある嵐の夜、長い眠りから目覚めたかのように、暗黒龍メディウスが復活した。
メディウスは、同じく大陸制覇の野望を持つ悪の大司祭ガーネフと結託。かつての無念を晴らすべく、グルニア王国とマケドニア王国を怒濤の勢いで侵略した。
メディウスは、侵略した両王国を核として、新生ドルーア帝国を建設。再び大陸全土に戦いを挑んだ。
新生ドルーア帝国の猛攻はすさまじく、幾多の王国が苦戦を強いられた。
伝統のアカネイア王国は懸命に防戦した。が、大司祭ガーネフの策略と、グルニアの智将カミュの強力な攻撃の前に敗退を重ね、ついにその王城、アカネイア宮殿を奪われてしまう。
英雄アンリの血を引くアリティア王国のコーネリアス王は、神剣ファルシオンを手に、自ら軍を率いて出陣した。それこそが、勇者アンリの血に連なる者の定めと公言し。
暗黒龍メディウスを、唯一倒すことの出来る武器、神剣ファルシオン。そしてそれを使いこなせるのが、勇者アンリの末裔なのだ。

アカネイア大陸の命運を賭けた戦いは、当初、アリティア軍の優勢で進行した。だが、同盟国タラの裏切りにあい、アリティア軍は脆くも壊滅してしまう。

コーネリアス王は戦場に尽き果て、神剣ファルシオンもまた、何処かへと消え去ってしまったのだ。

そして王と軍を失ったアリティア王国は、ドルーア帝国の攻勢の前に崩壊した。

この時わずか十四歳であった王子、マルス・ノア・アリティアは、姉エリスの助けを受け、数人の敗残兵と共に辺境の島国、タリスに逃げ延びた。

タリス王国。

大陸の最東端に位置する島国で、アカネイアの七王国中、最も小さな王国として知られる。

この物語は、それから二年の後に始まる。

ドルーア帝国の魔手は、まだこの地に及んでいない。

# 第1章　マルスの旅立ち

二人の男が同時に剣を構えた。

互いにその隙を窺っているのか、剣を振り上げたまま、ぴくりとも動かない。

一人は、白銀の頭髪の老人。そしてもう一人は、空の色をそのまま映したかのような蒼い瞳の少年。老人は銀色に輝く大剣を天高くかざし、少年は細身の刀剣を、まるで小さなナイフであるかのように片手で支えている。

二人の足元には、名もなき草々と、赤紫のメニギシソウの花。その花びらが、不意に宙に舞った。いや、花びらではない。同じ色の蝶だった。刹那、閃光が走った。

老人が剣を振り降ろす。身に纏った真紅の鎧が、きしむような音をたてた。少年は剣を避けようとしない。それどころか、振り降ろされた剣に向かって半歩前に進み出た。

少年の手にした刀剣が踊る。光の弧を描きながら、華麗な舞いを踊る。その一閃は迫る大剣を真横に跳ね飛ばし、そのまま老人の喉元で止まった。やや遅れ、老人の顔に驚愕の色が浮かぶ。

「お見事!」

老人の顔から驚愕の色が消え、やがて穏やかな笑みに変わった。その笑顔を見て、少年はようや

く剣を引く。
「ジェイガン、手を抜いただろう」少し怒ったように言う。
ジェイガンと呼ばれた老人は、少しばつの悪そうな顔をしてみせた。
「私が手を抜いた、と？」
「ああ。寸止めでも、真剣勝負にかわりない。そう言ったのはジェイガンだろう」
「手を抜いた、ですか。いやいや、なかなか上出来ですぞ」
「上出来って？」
「手を抜いたと言っても、ほんのわずかに力を押さえただけ。それを見抜くとは、なかなかの上達ぶりです」
「そんなもんかなあ。何だか、うまく丸め込まれたみたいだ」
「納得できませんか」
「それはそうさ。敵は手加減なんてしてくれない。今のが実戦なら、僕は逆に両断されていただろう。いくら上達したと言っても、そんな程度の腕じゃ話にならないんだ」
わずかに顔が曇った。そのまま少年は押し黙り、不満げに俯いた。
「焦ってはなりません。焦りこそ、戦場にあっては自らの命を失わせる、危険な感情なのです」
「それは判っている。けど、いいかげん我慢できない。ここでのんびりと剣の練習をする。もう二年だ。毎日毎日、同じように腕を振るう。なあジェイガン、教えてくれ。いつまでそれを繰り返せ

ばいい。あと何日続ければいい」

詰めよる少年の真摯な眼差しを見ながら、ジェイガンは寂しそうに吐息を漏らした。この地に来て二年。何度同じ質問をぶつけられたことか。

――まだ早い。

ジェイガンは心中で呟いた。まだ戦いを挑むには、時期尚早過ぎる。少なくとも、目の前の少年の心から焦燥の思いが消えるまでは。

「どうなんだい、ジェイガン」

「……行きましょう。そろそろ城下に戻らねば。風が強い。ひと雨来そうです。林檎畑の様子を見に行かねば」

「また、そうやってごまかすのかい」

「ごまかしてはいません。ただ……」

「ただ?」

「いえ、何でもありません王子。お待ちを。馬を連れて来ます」

王子。ジェイガンは、確かに少年をそう呼んだ。しかしその身なりは、せいぜい見習い騎士程度の物でしかない。ミキタの毛で織られた衣服は、ありきたりな薄い灰青色で染められ、両肩の青い肩当ては、別段、特別あつらえというわけでない。事実それらの衣服と防具は、街に出入りする行商人から買い集めた物だ。唯一、柄に飾りの彫られた細身の刀剣――一般にレイピアと呼ばれる

――だけが目を引くが、これとても、名のある工匠の鍛えた由緒ある逸品というわけではない。

王位継承者であることを示すきらびやかな装飾具も、王族であることを示す刀剣もない。だが彼は、まぎれもなく王子だった。アリティア王国の、正当なる王位継承者だった。

アリティア王国第一王子、マルス・ノア・アリティア。それが少年の正式な名前である。

水をすくい上げると、両手の中で太陽が輝く。マルスはそのまま輝きを飲み干した。

幾多の山や丘を越えて海に注ぐウィスラ川。この川は永きに渡りタリスの大地を潤し続けて来た。そしてこれからもそうであろう。その水の流れに支えられて広がる、肥沃な麦畑の連なり。マルスは口元を拭いながら、ふとその景観に見入った。マルスはこの景色が好きだった。ジェイガンと剣の修練に出かける度に、こうして川沿いから麦の連なりを眺める。生まれ育ったアリティアの、金色に輝く麦穂の海。心の中で、密かにその情景と重ね合わせながら。

「今ごろアリティアでは、刈り入れの季節か……」

かすかに呟くその横で、馬がうれしそうに前足で水面を叩いている。さらにその向こうでは、ジェイガンが自分の馬の鬣をゆっくり撫でていた。

「麦秋、ですか。まったく早いものですな。この地に来てから、丸二年ですか」

「なんだ、聞いていたのか」マルスは照れくさそうな笑みを浮かべた。

「いやいや。私も同じことを思っておりました。金色の麦穂の波打つ様を懐かしく思い返しなが

ら」
その言葉を聞き、マルスは自戒の念にかられた。先ほどジェイガンにぶつけた憤り。それが、いかに自分本意の感情であったかに気付き。故郷を追われたのは自分ばかりでない。ジェイガンにしても同様だ。自分は父と姉を失った。そしてジェイガンもまた、愛する妻と娘を亡くしている。なのに自分だけが、不幸のどん底にいるような気になっていたのだ。
「……済まなかった、ジェイガン」
「どうされました王子？」
「いや。何となく詫びたかった。そんな気分だったんだ。あんまり、気にしないでくれ」
「マルス様、肩の力を抜いて行きましょう。焦っては、何事もいい結果を生まない。剣技も、麦の刈り入れも、はたまた恋愛も同じです。心中の焦りこそが最大の敵なのです」
「焦りこそ、戦場にあっては最も危険な感情である。だろ？　さっきも聞いたよ」
「いやいや失敬。歳をとると、物忘れが激しくなる」
明るく微笑むジェイガンの横で、馬がかすかにいなないた。
「行きましょう。馬が飼葉を欲しがっている。ここらの草は、口に合わないらしい」
「うん。夕方までに、ひと通り畑を見て回らないと。去年みたいに燐虫（作物にたかる害虫）にやられたら、またシーダに叱られちゃうよ」
「シーダ様ですか。さすがの王子も、シーダ様だけは苦手なのですな」

「若手ってわけじゃないけど。ん、まあ、いいや。行くぞジェイガン」
軽やかな動きで馬に跳び乗る。跳び乗るのと同時に手綱(たづな)を振るい、馬を走らせた。

城へは、青鈴の川をただ真っすぐ下って行けばいい。わずか一刻ほどの道のりだ。ジェイガンとマルスは、小さな川沿いの村落にさしかかった。見慣れた光景だ。村落の目抜(めぬ)き通りには、行商人の開いた露店が並んでいる。そして追いかけっこをする子どもや、染物を籠(かご)にまとめる女たち。
「マルス様、今日の修行はいかがでした」
「取れたての野菜、持っていかれませんか」
「マルス様、また子どもたちに、異国の話を聞かせてやって下さい」
村の人々がマルスの姿を認めるやいなや、次々に明るい声をかけてきた。ジェイガンはそれを、うれしそうに見ている。おずおずと進み出た一人の村娘が、馬上のマルスに何かを差し出した。それは赤々としたトネリの実だった。マルスはそれを照れくさそうに受け取り、村娘に向かって諾(うなず)く。そしてわずかに馬足を速めた。気恥ずかしいのだろう。
村を抜けたところで、ジェイガンが愉快(ゆかい)そうに声をかけてきた。
「王子、お安くありませんな」
「な、何言っているんだよ」
「気付いておられましたか。あの娘、陰からいつも王子を見ておられましたぞ。もう半年も前か

ら」

「本当か?」

「本当ですとも。恐らく今日こそはと、勇気を振り絞ったのでしょうな」

「やめてくれよ。勝手な想像を張りめぐらせるのは」

「人々から好感を得るというのは良いことです。その人に天恵の人望があるということです。こればかりは、努力して身に付くものではない」

「人望はともかく、この国の人々は他国者の僕らをすんなり受け入れてくれた。いくら感謝しても、したりないよ」

「左様ですな。それに……」

言葉が途切れた。ジェイガンは眉間に皺を寄せ、前方を凝視している。何事かとマルスはその視線を追った。木々の連なり、ゆるやかな丘陵、そしてその向こうに立ち昇る黒煙。まるで冥府の底から吐き出されたかのような、漆黒の煙の塊。

「……あれは城の、タリス城の辺りじゃないか? ただの火事じゃなさそうだぞ」

「参りますぞ王子!」

ジェイガンは馬の脇腹を踵で叩いた。いななきと共に馬が駆け出す。何が起こったか問う必要はない。マルスも同じく馬を走らせた。二人の心に驚きはない。ついにこの日が来たか、という諦めにも似た感情だけがある。いかにこの地が辺境の島といえ、侵略の手をまぬがれられるはずはな

い。そう、ドルーア帝国軍の魔手からは逃れられるはずがないのだ。
「ジェイガン。敵は水軍だろうか？」
「判りません。しかし軍艦が動いたのならば、城の見張りが気付かぬはずはありません。恐らくは奇襲。だとすると」
「海賊か。この辺りの海に巣くうという」
「多分」
激しく揺れる馬上で二人は敵の素性を探る。だが答えはここにはない。今は一刻も早く城に戻るのみ。その時、マルスの頭上で声が響いた。
「よかった、マルス！」
頭上、木々の峰をかすめるようにして一頭の白馬が近付いて来た。翼を持ち、天を自在に駆ける白馬ペガサスだ。そのペガサスにまたがる一人の少女。赤い甲冑を纏った少女が、声の主だった。
「マルス、会えてよかった！」少女は巧みにペガサスを操り、駆けるマルスらの右上に陣取る。
「どうしたんだシーダ。城で、城で何があった？」
「海賊よ。ガルダの海賊が奇襲をかけてきたの。城には火が放たれたわ。もう、もう手遅れよ！」
「やはり海賊か。恐らくドルーア帝国に、金で雇われたな」
ジェイガンが舌打ちする。予想通りだった。海を隔てたガルダの港。そこを根城とするガルダの海賊は、残虐非道なことで知られる。わずか一樽の積荷を奪うために、船団を丸ごと焼き払うなど

朝飯前の連中だ。

「大勢の人たちが殺されたわ。父は、タリス王は、海賊風情に城を奪われるかと最後の最後まで戦うつもりなの。王の間に陣取って、一歩も動かないの！」シーダの声は激しく震えている。今にも泣き叫びだしそうな、そんな脆さをはらんで。「お願い、父を、みんなを助けて！」

ついにシーダの緑の瞳から、大粒の涙がこぼれ落ちた。もう止まらない。堰を切ったように、次から次へと流れ落ちる。いつもの気丈なシーダ。男勝りのシーダからは想像も出来ない。

マルスは女性の涙が何より嫌いだった。実の姉、エリスとの別れを思い出すからだ。だからマルスは、少しでもシーダを安心させようと精一杯の虚言を吐いた。

「行こうシーダ。兵が僅かでも生き残っていれば、まだ勝ち目はある。このジェイガンと、アリティア宮廷騎士団が僅かでも残っていれば、海賊どもに負けることはない。行こう、城へ！」

シーダはこくりと諾いた。その横でジェイガンも、力強く諾く。やがて丘を越えると、彼らの前に炎の塊が現れた。それは幾重もの炎のヴェールを纏った、タリス城の無残な姿だった。

「すべてを焼き払え。虜囚を取るな。動く者は皆、殺せ。女も子どももだ。遺恨を残す」

牛のような顔をした巨漢。海賊の長ガザックだ。にやにやした笑いを口元に浮かべ、部下に運ばせた木箱を戦斧でこじ開ける。中には、干藁に丁寧にくるまれた葡萄酒の瓶が数本あった。それを一瓶取り出し口に運ぶ。

「いい出来だ。ふふん、城を焼く前に、運ばせるべきだったかな。どのみち、もう遅いが」

ガザックの背後で城の一部が崩れ落ちる。飛び散った炎の飛沫が彼の顔を真紅に染めた。と、炎の向こうから何かが飛んで来た。矢だ。矢はガザックの肩口に深々と突き刺さった。

「ほほう?」眉一つ動かさず矢を引き抜いた。火の粉のように血が飛び散る。そして体を揺さぶりながら炎の中へと進んだ。ちりちりと髪の毛や口髭が焦げるのも気にせず歩み続ける。

「お前か」

炎の隙間に隠れ、一人の少年が弓を構えていた。少年と呼ぶのにもまだ幼すぎるような歳の子だ。

「勇敢な小僧だ。このガザック様に弓を射るとはな」

少年はがたがたと震え、身を縮こまらせている。まるで蛇に睨まれた蛙だ。もはや少年は、弓を射ることも、逃げることも出来ない。

「こいつはお返ししよう。小僧の勇敢さに免じてな」

ガザックは、先ほど肩から抜いた矢を力任せに投げた。丸太のように太い腕は、大振りの弓そのものだ。放たれた矢はすさまじい勢いで少年の喉元に突き刺さる。それで終わりだった。少年は断末魔の悲鳴をあげる間もなく、その場に倒れ伏した。

ガザックはそれを見て、愉快そうに笑う。そして手にしていた葡萄酒を呷った。

「お前ら、残敵の掃討は済んだんだろうな。こんなちっぽけな島国とはいえ、仮にも騎士を擁する王城だ。まだまだ出て来るぞ」

周囲を蠢く部下に叫ぶと、再び酒を呷る。わずか二口ほどで、瓶は空になった。
「お頭！」
血のしたたる手斧を手にした海賊の一人が、ガザックに駆け寄る。まるで骸骨のような顔をした男だった。
「どうした。あらかた片づいちまったか？」
「と、とんだことになりました。残った騎兵が、えらく手強いんでさあ。左陣の連中が、あらかた潰されちまいました！」
「馬鹿言え。左陣には三十人以上置いてある。そうやすやすと殺られるかよ。それとも、丸まる一部隊残っていやがったのか？」
「そいつが、その……」
「言ってみろ！」
「たった、たった三人の騎兵相手に殺られちまったんです！」

「カイン、お前は残敵を掃討しつつ、生き残った兵を束ねるんだ」
「わかりました！」
「アベル。お前は私に付いて来い。このまま海賊どもを二分する。いいな」
「はいッ！」

ジェイガンが、二人の若き騎士にそれぞれ指示を送る。カインとアベル、今はなきアリティア王国宮廷騎士団の生き残りであり、マルス、ジェイガンと共にこのタリスに落ち延びてきた敗残の兵である。二人ともジェイガンが見込んだ優秀な騎士で、カインは〝猛牛〟、アベルは〝黒豹〟の異名を持つ。崩壊寸前の城に入ったジェイガンは、孤軍奮闘を続ける二人を見つけ、わずか三人の騎兵隊を組織。反撃の糸口を見つけるため、敵陣のど真ん中に切り込んだのだ。

「続け、アベル！」

　ジェイガンの手にした槍が弧を描く。優に十五尺（一尺は約〇・三メートル）はあるかと思われる長槍は、アリティア騎士団が好んで使う〝銀の槍〟だ。そのような長大な槍を、ジェイガンはいとも軽がると操る。聖騎士〝パラディン〟の称号を持つ、ジェイガンならではの技だ。

「騎兵だ。騎兵が来たぞ！」

「足を止めろ！　馬から引きずり降ろせ！」

　海賊たちが、迫るジェイガンとアベルの存在に気付いた。だが気付いた時にはもう遅い。

「ぬおおおッ！」腹の底から絞りだした憤激の声と共に、ジェイガンの手にした槍が居並ぶ海賊を次々と血祭りにあげた。それは一振りする度に確実に相手の命を奪い取る、必殺の一撃だ。

「な、何だ、あの槍は。あんなクソ長い槍を、なんであんなに振り回せるんだ!?」

「あいつら、ここの田舎騎士じゃない。アリティアだ。アリティアの宮廷騎士団だ！」

「一騎で百の兵に匹敵するという、あのアリティアの宮廷騎士か？　そんな奴らがいるなんて、聞

いてないぞ!?」
アリティア宮廷騎士団。その栄光の名を知らぬ者は、アカネイア大陸のどこを探してもいない。疾駆すれば怒濤のごとく。槍の一振りは雷を呼び、悪鬼すらその技の前にひれ伏す。それがアリティア宮廷騎士団だ。
「聞け、海賊ども。このアリティア宮廷騎士団右翼隊長ジェイガンが、貴様らの相手をする!」
片腕で槍を回転させつつ、ジェイガンは敵の群れに飛び込んだ。一方海賊たちは、仲間が次々に切り刻まれるのを見て、半狂乱となって逃げまどう。だが統制を失った愚かな軍勢を待つものは、全滅の二文字のみだ。
「逃がさん!」
黒豹の異名に違わず、アベルの動作は機敏そのものだ。遁走する海賊の前方に回り込み、手にした剣を振り抜いた。急所ははずす。しかし利き腕は確実に斬り落とす。馬と剣とアベル。その三つは、まるで一つの生き物のように海賊の群れの真ん中を駆け抜けた。その後に残るのは、血にまみれてうずくまる海賊達と、それと同じ数の斬り落とされた腕。
「アベル、情けはわが身を滅ぼすぞ。何故止めを刺さない」
苦しげに呻く海賊を尻目に、ジェイガンはアベルに詰め寄った。
「お許しを。腹を斬り裂くと、脂がついて剣の切れが悪くなりますので。それに単に殺すだけというのは、私の美学に反します。磨かれた技の美しさ、というものがない」

「やれやれ、相変わらずだな」
「それよりもジェイガン様、城の外の敵はあらかた片づいたようです。城内へ向かいましょう。マルス様とシーダ様のことが気にかかります」
「うむ。剣の腕は確かだが、なにぶん王子は人を斬ったことがない。……行こう！」
軽やかな蹄の音と共に、ジェイガンとアベルは城門へ向かった。

マルスとシーダの二人は、ジェイガンらが敵の注意を引きつける間に城内へと潜入した。そこかしこで紅蓮の炎が躍り、生き物のように通廊を駆け抜ける。行く手を阻む灼熱の壁だ。だがそれでも、先へ進まねばならない。タリス王を救い出すために。
「マルス、ここから先は駄目。渡り廊下はとうに崩れ落ちているわ。こっちから」
「けど、そっちは行き止まりじゃ……」
「見て」
シーダが壁にかかったレリーフをひねると、石壁の一部がぐるりと一回転し細い通廊への入口が現れた。
「こんなところに、隠し通路があったなんて」
「ごく一部の者しか知らないわ。ここなら、まだ火は回っていないはずよ」
「よし、急ごう」

マルスが先頭となり奥へと進む。通廊の中は地獄の熱さだった。当然だろう。四方八方から紅蓮の炎であぶられているのだ。まるで暖炉の中を進むようなものだ。さらにたちこめる煙が、マルスとシーダを何度となく咽びこませた。

「このままじゃ、こちらの身が持たないぞシーダ」

「ここよ、ここから出られるはず！」

シーダはおもむろに壁面に向き直った。何もない壁を押そうとする。だが手をかけた途端、短く悲痛な声を上げた。

「熱ッ！」

「かわろう」

注意深く、肩で石壁を押す。こうすれば肩当てで熱を防げる。しかし壁は動かない。あらん限りの力を振り絞る。じりじりと、壁は少しずつ動き出した。わずかに隙間が開く。髪の毛一本分のわずかな隙間だ。だがそこまで開いた時、マルスは突然作業を中断した。

「駄目だ。ここから先へは行けない」

「どうして？　だってこの先に父様が！」

「見るんだ」

かすかに空気が動いていた。隠し通路に充満した煙が、隙間から外へと流れて行く。

「向こう側は炎の海だ。ここを開けると一気に空気が流れ込んで、大爆発を起こす」

「何で？　そんなことないわ。だって、だってここから先は王族の間よ。どんなに炎が回っても、最後の最後まで燃え落ちないように作られているわ」
「敵は狡猾だ。恐らく、真っ先に王の間を狙ったに違いない」
「そんな、そんなことあるはずないわ。あたしが城を出る時には、まだ大丈夫だったのよ。どいてマルス。あたしがやる！」
シーダはマルスを押し退けようとした。しかしマルスは、頑なにそこを動こうとしない。
「どいてよ、どいてったら！」
「駄目なんだシーダ。もう、もう遅かったんだ」
「そんなこと、判るわけないじゃない！」
「判る。僕には判るんだ！」
「どうしてよ？　どうしてなの！」
「それは、僕の城が燃え落ちた時と同じだからさ」
マルスの表情は重い。その心の中では、二年前のアリティア城崩壊の情景が、色鮮やかに映し出されている。まるでつい昨日の出来事のように。
「マルス、お聞きなさい。この城はもう駄目。このまま留まっていても、あるのは死だけです」
長い紫の髪をなびかせながら、エリスはマルスに近付きそう言った。しかしマルスには、姉エリ

スの言葉がどうにも信じられない。まさか栄光の歴史に支えられたアリティア城が、こうも簡単に攻め滅ぼされてしまうとは。
　ドルーア帝国の侵攻に対し、マルスの父コーネリアス王は自ら軍を率いて出陣した。神剣〝ファルシオン〟を携え。
　ファルシオン。それはかつて暗黒龍メディウスを打ち倒したという伝説の剣だ。
　四尺の細い刀身からは、目も眩むばかりの光芒が放たれ続け、振るたびに光彩の弧を描く。また持ち主が対応しきれない敵の攻撃をも、ファルシオンは自らの意志で受け止めるのだという。
　神の加護を受けた正義の剣、それこそが神剣ファルシオンなのだ。無敵のアリティア宮廷騎士団と、伝説の神剣ファルシオンを手にした勇猛なるコーネリアス王。アカネイア大陸の誰もが、その勝利を信じて疑わなかった。
　しかし戦いは意外な結末を迎えた。アリティア軍の全滅、コーネリアス王の憤死という結末を。同盟国であるはずのグラに、背後から奇襲を受けたのだ。不意を突かれたアリティア軍は完全に瓦解し、コーネリアス王の手にしていた神剣ファルシオンも、何処ともなく姿を消してしまった。
　その戦いの悲惨な結末は、同時にアリティア王国の崩壊を意味していた。王を失い、虎の子の騎士団を欠いたアリティアに生き残る術はない。予想違わず、アリティア軍全滅から三日後、ドルーア、グラ連合軍は、王城アリティアを完全に包囲した。
　もはや道は二つに一つ。このままここで果てるか、それとも……。

「マルス。あなたは、アリティア王家の正統なる王位継承者、英雄アンリの血を引きし者。だからこそ、生き延びねばなりません。国のためでなく、人々のために。後の世で、人々の希望となるために」
「でも、姉上は⁉」
「私は僧侶としての教えを受けてきました。まだ城には多くの人々が残されています。最後の最後まで、そんな人々の命を救わねばならない義務があるのです」
「だったら僕も残ります。生まれ育った国を捨ててまで、姉上を見殺しにしてまで、生きようとは思いません！」
「いいえ、マルス。あなたの身は、あなただけのものではありません。今はただ蹂躙されるのみですが、いつの日か、皆、アリティアの、いえ、このアカネイア大陸の再建と復興を信じて立ち上がります。その時まで、あなたは生き続けなければなりません。僧侶として人々を救うのが私の義務。そして今のあなたの義務は、生き延びることなのです」
エリスの口調はひどく淡々としている。しかしどこかしら、有無をも言わせぬ力強さがあった。だからマルスも、それ以上言い返せなかった。
「マルス。国のためでなく、人のために生きなさい。勇者の子孫として」
「エリス様、マルス様、お早く！」
駆けつけたのはジェイガンだった。体中至るところから血を流しつつも、その目は獰猛な野獣の

ようにらんらんと輝いている。まだまだ戦える。両目の輝きが、そう語っていた。
「ジェイガン。あなたとカイン、アベルが生き残っていたのは天佑（てんゆう）でした。マルスを頼みます」
「はい。マルス王子と共に、城の背後から地下水脈を抜け、そして——」
「いえ、それ以上は言ってはなりません。私が敵の手に落ちた時、どのような手段で口を開かされるとも限りません。行き先は聞かないでおきます」
遠くで、かすかに剣戟（けんげき）の音が聞こえる。そして人々の悲鳴。エリスはそれ以上何も言わなかった。ただ紫の髪を撫（な）で上げ、マルスの肩に手を置いただけだった。ジェイガンは力強く諾（うなず）く。
「判りました。エリス様、なにとぞ御無事で。勇者アンリの御加護（ごかご）があらんことを」
「急ぎなさい。すでに城は炎の海。間もなく、この地下通廊も察知されることでしょう」
「ははっ！」
ジェイガンは、エリスに向かって剣を掲（かか）げた。汝（なんじ）の行く道に加護（かご）の光あらんことを。アリティア宮廷騎士団の間で交（か）わされる儀礼の構えだ。そのまま踵（きびす）を返し、ジェイガンはマルスの腕を取り薄暗い通廊の奥へと進んでいく。
「待ってくれジェイガン。姉上を！」
「マルス様。今は何卒（なにとぞ）、御自分の身だけを案じて下さい」
「いやだ。僕も姉上とここに残る。僕も生まれ育った城に残る。離してくれ、離せ！」
自分を引きずる手を離そうと、マルスはひたすらにもがいた。だがジェイガンの手は万力のよう

にマルスの腕を締め付け、緩まる気配はない。
「エリス姉さん！」
今にも泣き叫びそうな声で、マルスは背後を振り返った。すでにエリスは小さな人形のような大きさにしか見えなかった。暗がりの中に置き去りにされた、小さく、寂しげな人形のようにしか。
マルスは居ても立ってもいられなかった。強引にジェイガンの腕を引き離し、姉のもとに駆け寄ろうとする。しかしその前に、素早く回り込んだジェイガンが立ちはだかった。
「どいてくれジェイガン。そこを、どいてくれ！」
マルスは無我夢中で剣を抜いた。護身のために身につけていた細身のレイピアだ。だがその剣を抜ききるより早く、ジェイガンの拳がマルスの腹に叩きこまれた。
「王子、御無礼を！」
全身を貫くような衝撃。背骨がかすかにきしむのをマルスは感じた。世界からすべての光が消え失せていく。彼の瞼の裏には、ただ寂しげに佇む姉の姿だけがいつまでも残っていた。
彼が次に目を覚ましたのは、内海を進む粗末な船の上でだった。心配そうに自分を見上げていたジェイガン、アベル、カインの顔は、今でも忘れることは出来ない。それからいくつもの海を、いくつもの山を越え、ようやくタリスへとたどり着いた。未だドルーア軍の魔手の伸びていない辺境の地。アリティア王家と、元を辿れば同じ血脈に行き着くタリス王家を頼って。
時にマルス・ノア・アリティア、十四歳。今から二年前の出来事である。

「あの時もそうだった。連中は、まず真っ先に王族を狙い、城の中心に火をかけた。そして逃げ場をなくすよう、城の周囲をぐるりと取り囲んだんだ」

目に涙を浮かべるシーダは、ただ黙って諾くだけだ。

「ここはもう駄目だ。残念だけど、タリス王は……」

そこまで言った時、不意にシーダはその場にへたり込んだ。張りつめていた糸が切れたのだ。

「シーダ、君はこの国の王女だ。ただ一人残った王族だ。しっかりしなきゃ。城は焼けても、国の人々は生きている。その人たちの希望になるのが、君の役目じゃないか」

そう言ってマルスはシーダの肩を抱いた。かつて同じ台詞を姉が言った。あの時は、その言葉の意味も、理由も、まるで理解出来なかった。だが今は違う。同じことをシーダに言いながら、マルスは最後に見た姉の姿を思い起こした。あの時の姉の気持ちが、言いたかったことが、今ようやく判る。王族には王族としての義務がある。その義務を全うしなければならない。感情の命じるまま、城と命運を共にしてはならない。国民が一人でもいる限り、その地が城そのものなのだ。国そのものなのだ。国があって人が住むのではない。人が集まり国ができるのだ。

「行こうシーダ。君は生き続けなきゃならない。命ある限り」

肩を貸してやり、シーダを立ち上がらせる。もはや泣く気力もないらしい。シーダはただ呆然と中空を見つめている。だがここに留まっていても、やがては煙と炎にまかれて命を失うだけだ。マ

ルスは強引にシーダの腕を取り、もと来た道を引き返した。往路の通路から抜け出すと、そこは火の海だった。至るところで壁や天井が崩れ、回廊にうず高く瓦礫(がれき)の山を築いている。

――一気に、突破するしかないか……。

逆巻く炎と充満した煙にたじろぎながらも、マルスは回廊を駆け抜ける決意を固めた。いつ天井や床が崩れ、その下敷きになるとも限らない。脱出の機会は今しかないのだ。

「行こう」

シーダは小さく諾(うなず)いた。マルスは炎に包まれた回廊をぐるりと見回す。荒れ狂う炎の壁の向こうに、明かり取りの窓がある。あの窓は城に囲まれた中庭に面しているはずだ。

――あそこしかない。

決心しシーダを抱き寄せた。脇腹の柔らかな感触とほのかな体温が、衣服を通して伝わる。その確かな感覚がマルスにひとかけらの勇気を与えた。

「跳(と)ぶよ、シーダ」

マルスは大きく跳躍した。人間離れした瞬発力(しゅんぱつりょく)だ。しかし魔法の力などではない。培(つちか)われた筋力と意志の力だ。

シーダを抱きかかえたまま、マルスは炎の壁をくぐり抜け窓縁まで跳んだ。今度はその縁を足場にし、窓の外へ飛び出す。下方に中庭が見えた。美しい芝生はところどころ焼け焦げ、奇妙な文様のように見えた。



一瞬の間を置き着地する。マルスの四肢は、その衝撃に激しくきしんだ。二人分の体重を支えたのだ。並の衝撃ではない。が、すぐにその痛みを振り切りシーダを降ろす。中庭は炎に囲まれていた。灼熱の海の中に浮かぶ小さな島だ。火の粉が次々に舞い降り、芝生を焦がしていく。しかし建物の中よりはいくらかましだ。少なくとも足元が崩れ落ちる心配はない。マルスはシーダと共に逃げ場を探した。あった。中空にかかった渡り廊下を支える、石造りの大アーチ。あの下をくぐれば城の正面に抜けられるはずだ。

「あっちだ、シーダ」

マルスは呆然としたままのシーダを引きずるようにして走った。だがアーチをくぐろうとしたところで、強固な壁に行き当たった。壁は向こう側から突然現れた。が、壁が勝手気ままに動き回るはずはない。それは壁ではなかった。牛を思わせる顔、手にした戦斧、天にも届く巨軀。この城に火を放った海賊の長、ガザックだ。

「ほほう。最後の最後の土壇場で、大した獲物に出会ったってわけか。そっちにいるのはシーダ王女。それに……知っているぜ。アリティア城から姿を消したっていう、マルス・ノア・アリティア王子、だな?」

とっさにマルスは腰からレイピアを抜いた。

「へっ。アリティア宮廷騎士団が、まさかこんな片田舎の王城に身を隠していようとはな。おかしいとは思ったぜ」

　ガザックは、じりじりと間合いを詰める。マルスはわずかに後退しつつ、小声でシーダに「後ろに下がって」と告げた。
「おかげで部下のほとんどが殺られちまった。しかしな、貴様の死体をドルーア軍に持っていきゃあ、目も潰れんばかりの財宝を頂ける。とんだツキが転がり込んできやがった」
「貴様だな、海賊の頭領は。この城に火を放ち、罪もない多くの人々を手にかけた！」
「罪もない人々だと？　ふふん。さすがに王子様は言うことがお綺麗だ。ったく、赤面するわ」
「何が綺麗だ。何が赤面だ」
「馬鹿が。お前らを殺せば大金が転がり込む。俺たちだって、喰わなきゃ死んじまう。それに海賊共にだって家族はいる。そいつらを養わにゃならん。判るか。判りゃしねえだろう。何不自由なく暮らしている、王族の人間にはな」
　マルスはかぶりを振った。だからといって、人を斬り捨てていいはずはない。自分のために他者を殺戮するなど、獣にも劣る野蛮な行為ではないか。この男の言うことは、ただの詭弁に過ぎない。生きるために人としての道を敢えて踏み外した、外道の論理だ。
　マルスはレイピアを天高くかざした。天一流瞬撃の流派。ジェイガンに叩き込まれた、アリティアに古くから伝わる剣技。無駄な贅肉を一切そぎ落とした実用本位の技で、あくまで敵を殺すことだけを目的に編み出された必殺の剣法だ。わずか二年の間に、マルスはその剣法の基本のことごとくを飲み込んでいた。後は一にも二にも場数を踏むだけだ。真の戦場でどれほど多くの敵兵と相対

するか。そしてどれほど多く斬り倒すか。マルスはまだかつて人を斬ったことがない。平和なタリスでは、その必要は微塵もなかった。有能な素人は、場数を踏んだ素人に負ける。これは剣に限らず、いかなる道にも通じて言えることだ。有能な素人はマルス。場数を踏んだ素人はガザック。現にマルスはガザックの殺気に押され、じわじわと後退するのみ。

「ま、堅苦しい理屈は抜きだ。おとなしく死にな。安心しろ。後ろの王女様は、いろいろと利用させてもらうぜ。何しろ、めったにいねえ美形だ。使い途は限りなくある」

いやらしい笑いと共に、ガザックの手にした戦斧が閃いた。速い。六十貫(一貫は約三・七キロ)はあろうかという巨大な戦斧を、まるで棒切れか何かのように操る。しかしマルスの動きはさらに速い。いともたやすく後ろに跳ね、渾身の一撃を躱す。さすがにガザックも舌を巻いた。所詮、王族の身だしなみ程度の腕と思っていたのだろう。顔には驚愕の色がありありと浮かぶ。

「なかなかやるじゃねえか。しかし、避けているだけじゃどうにもならねえぞ!」

再びガザックは斧を振った。今度は派手な大振りではない。小刻みに切り刻むような動作で迫る。

——奴の言う通りだ、こちらから仕掛けないと。

頭では理解している。それにマルスにとって、ガザックの動きは水を飲む大牛のようにしか見えない。緩慢な動作だ。いくらでもつけ入る隙はある。だが斬り込めない。心の奥底の何かが、攻撃を拒んでいるのだ。

「ほれ、どうした、ほれ！」
ガザックが迫る。マルスは右に左に巧みに一閃を躱し続けているが、いつまでも逃げおおせるはずはない。案の定、中庭の壁に背がついた。
「袋小路だな、王子様。覚悟しな」
大きく振りかぶり、ガザックは渾身の力で戦斧を振り降ろした。止めの一撃にするつもりなのだろう。
「マルス！」
シーダの叫びがマルスの耳に届く。その声がマルスに決意を促した。猫のように身を縮め、鋭く跳躍する。振られた戦斧の脇をかすめ、そのまま中空で回転、そして着地。ガザックの真後ろに陣取った。
「小僧、いったい⁉」
「覚悟！」
振りむきざまのガザックに、マルスはレイピアの一撃を浴びせた。これこそまさに瞬間の一閃だ。いかなる剣の達人でも、その太刀筋を見極めるのは難しいだろう。力より素早さを利した天一流瞬撃の流派の真髄だ。まともに急所に当たれば、カダインの奥地に住む水竜すら一撃で屠れるだろう。まともに急所に当たってさえいれば、だが。
「ぬ、ぬう、小僧？」

「はずした？」
敢えてはずした訳ではない。無意識のうちに急所を避けたのだ。相手のことを考えてではない。自分が人を殺すという過酷な重圧に耐えきれなかった結果だ。
ガザックは肩から血をしたたらせマルスに迫る。レイピアは相手を斬り裂くための剣ではない。要所を貫くための剣だ。狙いがそれてしまえば、ただ相手の体に小さな穴を開けるだけだ。
「人を殺す勇気もないか。怖いんだろう。怖いんだろうな、ええ？　どうだ、この俺はここにいるぞ。斬れるか、斬ってみろ！」
血走った目で迫るガザックは手負いの獣だ。マルスの中途半端な攻撃は、ただ相手を獰猛な野獣に変えただけだった。
「所詮は王子様の道楽剣法に過ぎねえ。そんなモンで、この俺が斬れるかよ！」
ガザックの巨軀が大きく跳ねた。そして戦斧を斜め上から振り降ろす。周囲の炎を映して赤く光る斧の煌めきを、マルスはただ凝視するだけだった。身じろぎ一つ出来なかった。
負けた。その三文字だけが頭の中にある。剣で負けたのではない。気迫で負けたのだ。
「死ねや！」
いみじくも、それがガザックの最後の言葉となった。ガザックの首が宙を舞う。残された胴体からは、血が間欠泉のように噴き出している。マルスは何が起こったのか理解できず、口を半開きにして血の噴き出る様を見つめる。派手な音と共に、吹っ飛ばされた首が地面に転がり落ちた。と同

時に、残された体は二、三度痙攣し、ゆっくりと前のめりに倒れた。
その向こうに一人の騎士が立っている。燃え盛る炎を背にして。
「マルス様。迷うことなくお斬りなさい。情けも、躊躇も、戦場では余分な感情です。敵と信じる者を斬りなさい。強靭な精神をお持ちなさい。自分こそが正義という信念をお持ちなさい。それが出来ずして、アリティア復興は果たせませぬぞ！」
ジェイガンだった。手にした銀の槍からは、血のしずくが垂れている。二年前のあの日と同じく、マルスはまたしてもジェイガンに命を救われたのだった。

すでに火は消えつつあった。ジェイガンらの活躍によって敵の掃討も終わった。わずかに生き延びた海賊共は、我先に逃げだした。危機は去ったのだ。
王城近隣から駆けつけた人々の手によって、傷を負った人々も手当てを受けることが出来た。しかし城は完全に燃え落ち、王も、女王もその火の中で果てた。残ったのは王女のシーダと、王家の血を引く数人の者たちだけだった。しかしアリティア宮廷騎士団の活躍がなければ、その残った王族も根だやしにされていただろう。その意味では、タリス王国は幸運だったと言っていい。
「マルス王子。シーダ様の姿が見えません」
天幕の中で火傷の手当てを受けていたマルスは、アベルからその報せを聞いた。恐らくシーダの行くところは一つだ。マルスはアベルに心配ないと告げると、城の焼け跡に向かった。

思った通りだった。シーダは城の前庭にいた。その肩がわずかに震えている。泣いているのか。
マルスはためらいながらも、シーダにゆっくり近付いた。
「シーダ……」
何も言わず、シーダは積み重なった瓦礫（がれき）の山を指さす。瓦礫の下敷きになり、一人の少年が果てていた。しかしその命を奪ったのは、雪崩（なだれ）のようにおおいかぶさった瓦礫でも、逆巻（さかま）く炎でもなかった。喉元（のどもと）に刺さった一本の矢。それが少年の命を奪ったのだ。
そう、その少年はガザックに矢を射り、逆にその矢で殺された、あの幼い少年だった。
「この子ね、カシムっていうの」低い嗚咽（おえつ）にむせびながら、シーダは言葉を継いだ。「お父さんがいなくてね、お母さんも病気で、それで、自分がハンターになって、稼（かせ）ぐんだって。毎日この城に、野で取ってきた兎（うさぎ）や野鳥を納めに来ていたの。でも、でも、この子は……」
シーダはしゃがみ込み、開かれたままのカシムの両目を閉じてやった。
「この子は、まだ十になったばかりよ。城の兵でもない。そんな子が、なんでこんな目に遭（あ）わなきゃいけないの？　ね、マルス」
マルスに言葉はなかった。彼にもその理由は見つからない。あるとしたらたった一つだけだ。
シーダの肩に手を置くと、マルスはそのまま立ち上がり、ゆっくりと踵（きびす）を返した。まだ煙の臭（にお）いの立ちこめる王城を後にすると、真正面にジェイガンの姿を認めた。何か言いたげな顔をしている。そして話があるのはマルスも同様だった。

「ジェイガン。もう、僕は待てない」
馬上のジェイガンは、何も言わずにマルスの顔を見つめる。
「これ以上、待ちたくはない。辺境のこの地にも帝国の手がおよんだ。皇帝メディウスの野望は際限がない。このままだと、アカネイア大陸全土が焼け野原になってしまう」
マルスは太陽の沈み行く西に目を向けた。木々の向こうに緑の海が広がる。あの海を越えたところに、アカネイアの大地が広がっている。
「行こう。海賊の残した船がある。僕らと同じような反逆の士を募ろう。各地で戦っている、残党軍と合流しよう。きっと集まる。小さな力を束ねるんだ。そして、そして……」
マルスはジェイガンに向き直る。その瞳は、夕陽を映し真紅に染まっている。
「ドルーア帝国を滅ぼすんだ。二度とためらわない。この剣に誓って、僕は戦場の悪鬼になろうとも、ドルーア軍を滅ぼす」
すらりとレイピアを抜く。細い刀身が夕陽に煌めいた。マルスの熱い意志を託されたかのように。
「止めても無駄だ、ジェイガン。僕は一人でも行く」
「止めはしません。この時を待ち望んでおりました。参りましょう、戦乱の直中へ」
ジェイガンは馬から降り、マルスの前に立った。
「戦場では、頼れるのは自分一人です。もうおいそれと、王子を助けに行くわけにも参りません」
「もちろんだ。言ったろう。もうためらわない。ドルーア帝国の皇帝メディウスを打ち倒し、アリ

ティア王家を復興させるその日まで」
マルスの決意の表情を見て、ジェイガンは力強く諾(うなず)いた。

こうして、マルス、ジェイガン、アベル、カイン、四人のアリティア残党軍は、二年の歳月を経(へ)て立ち上がった。大陸全土を戦乱に巻き込み、なおもその戦火を広げようとしているドルーア帝国軍。その数十万の軍勢に、僅(わず)か四人で挑(いど)む。

自由アカネイア軍。いつしか人々にそう呼ばれる、鋭鋒(えいほう)の軍の誕生であった。目指すは本土、アカネイア大陸。

時にマルス・ノア・アリティア、十六歳と三カ月のことである。

# 第2章　デビルマウンテン

アカネイア大陸西方。ガルダ半島から内陸部にかけて、巨大な山脈が横たわっている。西オレルアン山脈。しかし人々は、それを魔の山脈、デビルマウンテンと呼ぶ。西の海から吹く強い海風と、内陸からの陸風がぶつかり合い、天候は一刻たりとも安定せず、また険しい岩肌で構築された山腹は、旅人の行く手を阻む。さらに伝承によれば、この山脈には数々の魔獣が巣くうのだという。

しかし今この山脈を根城とするのは、グリフォンでもガーゴイルの群れでもない。サムシアンと呼ばれる残忍な盗賊団だ。だが人間であるとはいえ、凶暴で危険極まりないという点では、魔獣と何ら変わることはない。今日もデビルマウンテンは不吉な影をその山裾に落としながら、天高く、研ぎすまされた剣のような峰をそびえ立たせている。

その中腹。二人の男女が険しい山道を下る。一人は、朱色の肩掛けを頭から羽織った若い女。どこかしら寂しげな表情が印象に残る。もう一人は山道には似合わぬ軽装の、これもまた若い男。二人は道というには語弊のありそうな、岩々の積み重なる山道を懸命に下る。共に息は荒く、手足のいたるところに小さな傷が見受けられる。二人の進む山道はあくまで険しく、しかも一歩道を踏み外せば、優に百五十間（一間は約一・八メートル）はあろうかという谷底へ飲み込まれてしまうだろ

う。
　小さな叫びを上げ、女が倒れた。先を進んでいた男は慌てて立ち止まり、女を助け起こす。
「大丈夫かい、レナさん。早く逃げねえと本当にヤバいぜ。サムシアンの連中は、逃げだした虜囚をみすみす放っておきはしねえ。今にも岩陰から飛び出してこねえとも限らない。さ、立って」
「ごめんなさい。でも、大事な〝治癒の杖〟を忘れてきてしまいました。取りに戻らないと」
「杖だって？　それが何だってんだよ。命の方が大事だぜ」
「いいえ。あれがないと、私が私である意味がなくなります。この近隣にいる僧侶は私一人。病に苦しむ村人たちを、助けることも出来なくなってしまいます」
「んなこと言っても、なあ……」
「お願いジュリアン。私のことはもういいから、あなただけでも逃げて。幸い、〝転移の杖〟だけは無事でした」レナは、手にした杖をかざした。先端に赤い水晶を戴く細い杖だ。
「これで、あなたを麓に転移させることも出来ます。だから……」
　レナはそれ以上は何も言わず、ただ相手の顔をじっと見つめた。しかしジュリアンと呼ばれた男はレナの手にした杖を払いのけ、彼女の両肩にそっと手を置く。
「レナさん。それじゃ俺が何のために奴らを裏切ったか、判りゃあしねえ。いいかい、何度も言ったけど、機会は今しかないんだ。山の麓に、アリティア宮廷騎士団の残党が来ているらしいんだ。知っているだろう。アリティアの騎士」

答えない。ただ無言で諾く。
「そうだ。無敵を謳われた最強の騎士団だ。その連中に頼めば、俺たち二人くらい助けてくれるさ。とにかく杖なんかよりも、まず命が大事だ。治癒の杖、だっけ。そいつは後で必ず俺が取り返す」
ジュリアンは、レナの肩を揺さぶりながら話を続ける。目を覚ませ。そう言わんばかりに。
「俺はこの辺りじゃ、ちっとは名を知られた盗賊だ。信用しな、必ず取り返す。とにかく今は、逃げることだけを考えよう」
そう言うと、強引にレナを立ち上がらせた。二人は手を取り合い、再び山道を下りだした。
だが――。数歩前を進むジュリアンは、レナの言動について思いを巡らせた。
――おかしなもんだ。どうもこのレナさん、生き延びることに執着がねえ。いくら神に仕える僧侶だからって、行き過ぎだ。まるで死に急いでるみてえじゃねえか。
幼い頃に戦災で両親を失ったジュリアンは、まだ読み書きもまともに出来ないうちから盗賊稼業で命を繋いできた。大勢の同じ境遇の子どもたちを横目で見ながら、自分だけは生き延びてみせると、ありとあらゆる汚れ仕事に手を染めた。そのうちに、ジュリアンの中にある一つの哲学のようなものが生まれた。人は生きるためなら、それこそ獣にでも虫けらにでもなれるのだと。王様も乞食も変わりない。皆、生きるためだけに生きているのだ。それはジュリアンの、十数年間の経験則から導き出された結論だった。少なくとも、今の今まで例外となるべき人物は見当たらなかった。
しかし、レナは違う。確実に迫っている死の瞬間を、まるで恐れていない。自分を取りまく運命

を、ありのままに受け入れているのだ。それはレナが、神に仕える身だからか。そうではない。ジュリアンはかぶりを振る。同じ聖職者という肩書きでありながら、今まで見てきた連中はろくでもない奴らばかりだった。良薬と偽り、馬糞を病人に飲ましていた医術者。凶作に見舞われた村々を訪れ、呪いをぬぐい去るという名目で、なけなしの銅貨をかき集めさせていた神官。レナはそんな連中と、完全に一線を画している。なぜ、自分の運命に逆らおうとしないのか。なぜ、ここまで追い詰められながら他人の身を案じるのか。ジュリアンは、その解答が欲しくて仲間を裏切ったと言っていい。どうにも解せない謎を、放っておけなかったのだ。

——とにかく、今はこの山を下りるのが先だ。このレナっていう僧侶のことは、その後でじっくりと研究させてもらおう。

そんなことを思いながら、ジュリアンはレナの手を引き山道を進んだ。

その背後の岩棚で、何かが動いた。毛皮の胴着を纏った大男達だ。二、三、いや、四人だ。それぞれ斧や剣を片手に、羚羊のような動きで岩壁を走る。人間離れした動きだ。それは逃げだしたジュリアンとレナを追う、サムシアンの一党だった。いつものジュリアンなら、とうに気付いていていい。だてに盗賊稼業で身を立てているわけではない。人並みはずれた鋭敏な感覚があればこそ、ここまで生きながらえてきたのだ。だが今は、あまりにレナに気を取られ過ぎていた。

男達が一斉に跳ねた。岩壁を滑るように降り、ジュリアンとレナを取り囲むように着地した。

サムシアン一党は、それぞれ武器を構え、にやにやした笑いを浮かべながら二人に迫る。



「ジュリアン。お前は、もう少し利口だと思っていたがなぁ」
「しかし、ま、身から出た錆ってもんだぁ。獲物の独り占めは、うちらの間では、重罪だぁな」
「新入りだから、知らなかったじゃ済まされねえんだなぁ」
独特の訛りが、不気味さを煽る。サムシアンの男達は、裏切りを最も嫌う。もともと山岳地帯に住む山民の一派が、時代の流れの中で賊となった。そのため同族意識が異常に強い。
四人のサムシアンは、じりじりと囲みを狭めていく。逃げ場はない。片側は切り立った崖。もう一方は目も眩む断崖。ジュリアンは、とっさにレナを背後に隠すようにした。
「ジュリアン。ありがとう。でも、もういいんです」
「ったく、馬鹿なこと言うんじゃねえ。俺だって少しは、剣くらい使えるんだ。それに……」
そこまでしか言えなかった。目の眩む光芒と奇妙な重圧感がジュリアンを包み込む。周囲の空気が一瞬で変わった。空気だけではない。気温も、感触も、そして景色も。
ジュリアンを包む景色が、まったく変わってしまっている。連なる岩々も、切り立った崖も、サムシアンの薄汚い笑いも、レナの寂しげな表情もない。代わりに、むせ返るような緑と、小川のせせらぎがある。ジュリアンはすぐに、ここがデビルマウンテン麓の山林だということを理解した。
何故、一瞬にして麓に。答えは一つしかない。
「馬鹿野郎、転移の杖を使いやがったな!」
ジュリアンは、木々の梢越しに見える山頂に向かって叫んだ。その叫びがレナに届くはずはない。

「シスターぁ。ジュリアンを逃がしちまったかい。しょうがねえなぁ」
サムシアンの一人がレナににじり寄る。多くの法力同様、転移の杖による瞬間転移の法は、術者自身にはかけられないという致命的欠点がある。今度こそレナの逃げ場はない。
「仕方ねえかぁ。シスターぁ。今度こそ、きちんと連れて帰るよぅ」
どこまでが着用している毛皮か腕か判らない、剛毛に被われた、サムシアンの獣のような腕がレナに伸びる。レナは何も言わない。逃げようともしない。ただ、その身をわずかに傾けた。
「おおお、何しやがんだよぉ！」
サムシアンの一人が手を伸ばしたが遅かった。レナはそのままゆっくりと、谷底へと落ちていく。辱めを受けるよりも死を選んだのだ。神に仕える聖職者としては、この時点でその資格を失ったことになる。自殺は禁じられた行為の一つだ。だがレナの女性としての尊厳が、彼女を崖下に導いたのだ。
「もったいねえ。もったいねえなぁ……」
斧を手にした一人が崖をのぞき込む。当然、そこからは何も見えないはずだった。大地は遥か下方にある。しかしサムシアンの男は、何も見えないはずの下方に信じ難い物を認めた。
「あ、ありゃあ何だ⁉」
異常を察知し、他の連中も同じように身を乗り出す。が、その必要はなかった。〝それ〟は自ら

下方から舞い上がり、サムシアンの男達の眼前に現れた

翼を持った白い馬。その上に乗る赤い甲冑の少女。そしてその華奢な腕に抱きかかえられた、身を投げたはずの僧侶レナ。サムシアンの男達は、無意識のうちに武器を構えた。その行動は次の事態を予期したものではなかったが、実に適切だった。

男達の頭上で風が唸った。瞬く間に、その風は切り立った崖を滑り降り、斧を持つサムシアンの一人の左胸を貫いた。天一流荒神の剣。いかに屈強なサムシアンといえど、心の臓を断ち割られ命を繋ぎとめられるはずはない。海老のように大きく仰け反り、そのまま倒れ込んだ。

「な、何者だ!?」

「殺せ。とにかく殺しちまえ!」

散。男達は白い馬のことも忘れ、舞い降りた一陣の風に躍りかかった。だが、別の風が背後から襲った。光彩が真横に走る。直後、男たち三人の首が同時に斬り落とされた。

「ジェイガン、僕一人でも充分だったのに」

崖から舞い降りた風はマルス。そして男達の首を薙払ったのはジェイガンだった。

「お見事ですぞ、マルス様」馬上のジェイガンは、槍に付いた血糊を拭いながらマルスに声をかける。

「しかし、無用な殺生だった。いかに多くの人々を手にかけた山賊とはいえ……」

「仕方ないですよ。何があっても、自分のために他者を殺すのは良くない」

「そうそう。どのみち、この山を越えるには、一戦交えるしかないんだから」
どこに伏せていたのか、馬にまたがったカインとアベルの二人が姿を見せた。その後には、数人の戦士達が続く。総勢十余名。タリスを旅立ち二カ月を経た、現在のマルス軍の全兵力である。
「それにしても、とんでもない山道だ。これじゃ馬が持たないぜ」
「アベル。それはお前の手綱さばきが悪いせいだ。歩かせ方に工夫をすれば、だいぶ馬も楽になる。見ろ、俺の愛馬を」
カインの言葉と裏腹に、馬はさも疲れたと言わんばかりに嘶いてみせた。
「へっへ、カイン。元気なのは、上に乗っかっているお前さんだけみたいだな」
「何を言う。行くぞ、おい」
だが四本の足は地と一つになったかのように、ぴくりとも動かない。そんな二人のやりとりを見ていたマルスは、ジェイガンに向き直った。
「この辺りで、適当な場所を見つけて休みにしよう。それに、あの僧侶の女の子の様子も見ないと」
折り良く、レナを抱えたシーダが舞い降りてきた。さすがに天を自在に舞うペガサスは、それほど疲れを見せていない。
「恐怖のあまり、気を失っているみたい。確かに危なかったもの。偵察に出てたあたしが、偶然このシスターを見つけなかったら」
シーダは優しい手つきで、ペガサスの背に身を預けているレナを抱え起こした。その顔は蒼白

く、死人と言ってもおかしくない」
「どうだろう、ジェイガン。この先に、開けた場所があればいいけど」
「そうですな。皆も疲れております。ただし、彼らが許してくれれば、ですが」
「彼ら？」マルスは怪訝(けげん)な表情でジェイガンに問い返した。
ジェイガンは答えない。代わりに、突然その両目を見開いたレナが叫んだ。
「来るわ。奴らが。奴らが来る！」

岩に挟(はさ)まれた窪(くぼ)みに、小さな巣がある。小枝や枯草(かれくさ)を束ねて作られた巣の中には、生まれたばかりの雛(ひな)が三羽、寄り添うようにして収まっている。ルリビタキだ。母鳥はいない。雛のために、餌(えさ)を探しに出ているのだろう。

と、頭上から大きく翼を広げた一羽の鳥が舞い降りてきた。一羽というより、一頭と言った方がいいくらいの大きさだ。獰猛(どうもう)なことで知られるハナアオタカだ。天地を貫く稲妻(いなずま)のように、急降下して来る。狙いは明白だ。ルリビタキの雛だ。ハナアオタカが小さく、しかし鋭く鳴いた。それは間もなく自分の手にかかって死ぬ、小さな獲物(えもの)に向けての鎮魂歌(ちんこんか)なのだろうか。

光芒(こうぼう)が閃(ひらめ)いた。身を二つに分かたれたハナアオタカは、そのまま崖下(がけした)へと真っ逆さまに落ちていった。少し遅れ、ルリビタキの母鳥が巣に戻ってきた。何事もなかったかのように、三羽の雛はこうるさく鳴き出す。母鳥はその声にせっつかれ、嘴(くちばし)に含んだ餌(えさ)を雛に分け与えはじめた。

やや離れたところに立つ男は、無表情にその姿を眺めていた。男の頭上から何かがひらひらと舞い降りてくる。ハナアオタカの羽だ。獲物めがけて舞い降りた時に、抜け落ちたのだろう。
再び光芒が閃いた。男が剣を抜いたのだ。いや、すでに剣は鞘に収まっている。だが中空を漂っていた羽は、いつの間にか二つに寸断されていた。
男は、痩せぎすと言っていい体格をしていた。背だけが異常に高い。だがさらによく観察すれば、その肉体が、いかに研ぎすまされたものであるかが判るだろう。無駄な肉はただの一片もなく、骨と皮と、筋肉だけで構築されている。その無駄のなさが、男を痩せぎすに見せていた。
男の名はナバール。その道では知らぬ者なしと謳われる、不敗の剣士である。
ナバールの眉がぴくりと動く。やや遅れて、背後からサムシアンの一人が現れた。
「ナバール様、大変です。西の峰に、とんでもなく腕の立つ連中が現れたんでさぁ!」
「ほほう。どんな連中だ。まさかドルーア帝国軍精鋭部隊でもあるまい」
「あっという間に二十人からの仲間が切り刻まれちまったんですよ。二十人ですよ、二十人。今、東の尾根を張っている連中に助けを求めましたがね。とにかく、とんでもねえ奴らなんです。この山道で、自由自在に馬を操る奴やら、風みてえにすばしこい奴やら、まったく手に負えねえ!」
「だったら、退けばいいだろう」
「そ、そんなわけにゃあ、いきやせんぜ。この悪魔の山をみすみす通したとあっちゃ、俺達サムシアンの面目が立たねぇ。だからこそ、ナバール様みたいな用心棒を雇っているんですからねぇ!」

早く助けてくれ」男の口調には、悲愴の色がありありと滲んでいる。ナバールはため息をつきながら、山腹の下方を見おろした。

こんな汚らしい連中でも、ドルーア帝国軍にたった一人で刃向かい、ぼろ切れのようになった自分を助けてくれた救い主であることに変わりはない。ナバールは思う。だからこそこうして、用心棒としてこの山に籠っているのだ。もっともお尋ね者の自分には、この山以外に住むところはないのだが。

「よかろう。行ってやる」

「あ、ありがてえ！　西の峰の三つめです。早く、早く頼みますぜ！」

せかす必要はない。ナバールはすでに姿を消していた。わずかに漂う土埃だけを残して。

「斬っても斬っても、埒があかない。どうするジェイガン！」

マルスの言う通りだ。いかに強者ぞろいと言っても、こちらは十名足らず。対するサムシアンは、それこそ百を越す数だ。

「アベル。お得意の速攻はどうした。黒豹の名が泣くぞ！」

「冗談じゃない。馬が疲れきってる。それに相手は地元の連中だ。地形を知りつくしている！」

言いながらも、アベルは剣で襲い来る敵の波をかき分ける。一振りする度に、サムシアンの腕や首が、血しぶきを滴らせながら飛んだ。しかし一向に減ることのない敵の猛攻は、確実にマルスた

ちから生気をそぎ取っていく。機動力のある馬上の連中はまだいい。後続の戦士達は、敵の攻撃を防ぐので手一杯だ。

「マルス、戦士のサジが殺られました。もう無理です！」レナを抱え、頭上に退避していたシーダが叫ぶ。

サジ。港町で出会った豪放な戦士だ。家族をドルーア帝国軍の手によって殺戮され、その復讐のためにマルスの軍に身を投じたのだが。

——こんな山賊相手に死んだんじゃ、何の意味もないじゃないか！

マルスは心中で呻いた。だがこのまま行けば、自分達も同じ運命を辿るのは火を見るより明らかだ。かといって、逃げようにも退路は完全に遮断されている。こんなところで死にたくはない。ドルーア帝国打倒の悲願を果たせぬまま、アリティア再建の夢を果たせぬまま、デビルマウンテンの露と消えるなど。そう強く念じた時、どこからか声が聞こえた。

「お兄さん、こっちだ。こっち！」

誰だ。マルスは剣戟を繰り返しながらも、声の主を目で探した。そびえ立つ断崖。そのわずかな隙間から、一人の若者が顔を覗かせている。

「ジュリアン、いつの間に！」シーダと共に、ペガサスにまたがるレナが叫んだ。隙間から顔を覗かせている男は、転移の杖で強制的に麓まで運ばれたジュリアンだった。「どうして戻って来たんです」

「冗談じゃない。あのまま、レナさんを見殺しに出来ますかい！　俺は汚い盗賊野郎だが、嘘だけは言ったためしがねえ。助けると言ったら助ける！」
その言葉自体が嘘だ。今までどれほど多くの人をたばかって来たか。しかしレナとの約束だけは果たそうと心に決めていた。彼が嘘をついたことがないとしたら、それは自分に対してだけだろう。
ともあれ、ジュリアンは鬼神のごとき速さで山道を駈け登り、苦戦するマルスらの姿を見つけた。そして秘密の抜け道に、その軍勢を呼び寄せようとしている。
「いいから、こっちだ。馬もぎりぎり通れるだけの広さがある。急いで！」
マルスはとっさに判断した。信用した訳ではない。だが、このまま全滅を待つよりましだと考えたのだ。
「この割れ目に逃げ込め。徒歩の連中が先だ。ジェイガン、アベル、カイン、そして僕が殿を務める！」
そこへサムシアンの一人が飛びかかって来た。手にした斧が不吉な光を投げかける。完全に意表を突いた攻撃だ。その数秒後、マルスは頭蓋を割られ地に伏しているだろう。マルスが並の戦士ならば。
だが、マルスは無意識のうちにレイピアを繰り出していた。意表を突かれたのはサムシアンの方だった。突き出された剣先を避ける術はなく、顔面で銀色の細い刃を受け止めた。絶叫とも嗚咽と

も言えぬ奇怪な音を発し、サムシアンは絶命した。
「急げ。急ぐんだ！」
マルスは何事もなかったように、仲間を断崖の隙間に導く。ジェイガンもその判断に同意し、槍を振りながら敵の追撃を阻んだ。数人の戦士達が辛くも隙間の中に逃げ込む。それを認めたマルスは、未だ戦い続けるジェイガン、アベル、カインの三人に叫んだ。
「後は僕たちだけだ。行こう！」
それを合図に、アリティアの騎士達は逃走に転じた。一列になり細い断崖の隙間へ潜り込む。ジュリアンの言う通り、かろうじて馬一頭分の幅があった。肩やつま先を左右の石壁にこすりながらも、三人は断崖の隙間を疾駆する。その後を追って駆けるマルスを振り返り、ジェイガンが叫んだ。
「マルス様、後ろにお乗り下さい」
「判った」
音もなく跳躍し、ふわりと馬鞍の後ろにまたがる。ジェイガン、マルス、二人を乗せた馬は、少しもその足を緩めることなく突き進んだ。前方にはカイン。頭上を見れば、シーダの操るペガサスがいる。背後に敵の気配はない。
「このまま一気に駆け抜けましょう。いかにサムシアンといえ、そうそう追いつけますまい。少なくとも、敵を分散させることは出来ましょう」
「そうだな。でも奇妙だ。この抜け道を、サムシアン一党が知らないはずはない。何故、追ってこ

ない」
「私も同じことを考えておりました。最悪の事態を」
「待ち伏せか。この先の出口で」
「判りません。しかし、あのジュリアンとかいう盗賊。嘘をついているようには見えません。少なくとも、レナという僧侶を思いやる気持ちに、偽りはなさそうでした」
ふとマルスは、頭上のペガサスを見上げた。ここからだと狭い石壁に阻まれ、レナの衣服の裾しか見えない。
「いいさ。間もなく判る。考えるのはそれからにしよう」
「そういう不敵なところは、亡きコーネリアス王に良く似ておられる。何やら、うれしいものですなマルス様」
「思い出話なんか、してる場合じゃないだろうジェイガン」
「いやいや、失敬しました。ん？」
連なる隙間の道が途切れていた。その先には絶壁に囲まれた広々とした空間が広がっている。四方を囲む崖の高さは、およそ八十間。ほぼ垂直に切り立ち、到底馬や人の足で登ることは出来ない。
「何だここは、これじゃ行き止まりじゃないか！」
先に到着していたカインが、案内したジュリアンに詰めよる。だがジュリアンはにたりと笑い、親指を突き立ててある場所を示した。そこには先ほどと同じような細道がある。岩を割って作った

人工の道だ。何代も続いたサムシアンの一族が、長い歳月をかけて築いた秘密の抜け道だった。このような抜け道は山脈の至るところにあり、自由にデビルマウンテンを往来出来る。これが神出鬼没のサムシアンの秘密だ。

「へへ。ここを抜ければ、すぐに下りの道に出られる。本当なら、レナさんと一緒に降りるはずだったんだが」

「よし。敵が来る前に行こう。隊列はこのままだ。少し間を置いて、騎馬隊も後を追う。シーダ」

マルスは頭上のシーダを呼び寄せた。器用にペガサスを操り、シーダはわずかに高度を下げる。

「君は上空から、前方に敵がいないかどうかを見張ってくれ。いいね」

「判ったわ。マルスも気を付けて」

「もちろんさ。さ、出発しよう」

「お待ちを！」ジェイガンが待ったをかけた。

マルスもすぐにその理由に気付いた。前方に人影。いつの間に現れたか、それは判らない。ただ確実なのは、その男が髪の毛も逆立つような強烈な殺気を放っているということだけだ。男はほとんど足を動かしていない。しかしゆっくりと、確実にこちらに向かって近付いて来る。ただ者ではない。マルスは瞬時に看破した。これは剣技を極めた者ならではの足運びだ。不用意に足を地から離すようなことはしない。隙が生まれるだけだ。地面を擦るようにしながら、それでいて素早く進む。

男が近付けば近付くほど、殺気はより一層増大し、体を押し包む重圧感となってマルスを襲った。仲間たちも同様に押し黙り、身動き一つせずに男を凝視している。少しでも動けば、次の瞬間には確実に全員の命が奪われる。そんな予感めいたものが各人の脳裏に渦巻いていた。

「用心棒の、剣士ナバール。とんでもねえ奴が出て来やがった……」

ジュリアンが茫然としながらつぶやく。剣士ナバール。その名を聞いた瞬間、マルスを除いた全員の顔が凍り付いた。

「馬鹿な。ナバールだと。あの伝説の剣皇が、何でこんなところにいるんだ」

「嘘だ。剣皇ナバールは死んだ。たった一人で帝国軍と戦い、そして死んだんだ！」

カインとアベルがそこまで口にして、ようやくマルスもその名を思い出した。不敗の剣皇ナバール。アカネイアの剣豪伝説に彗星のように現れ、そして不敗と常勝の名を欲しいままにして消えて行った幻の男。

幻の男が立ち止まった。そして周囲をぐるりと見回した後、馬上のジェイガンを指さした。

「そこの騎士殿」

「何用か」

「アリティア王国の宮廷騎士団と見受ける」

「いかにも。アリティア宮廷騎士団右翼隊長。ジェイガン・フォン・グライアス」

「貴公と、一対一で勝負をしたい」

「如何(いか)な理由で」
「それぞれの、命を賭(か)けて」
マルスは、周囲から放たれる無数の視線に気付いた。慌(あわ)てて振り返る。声も出なかった。
岩棚(いわだな)の上にサムシアンの大群が集結している。その数、およそ三百。くぐり抜けてきた岩の隙間(すきま)も、これから進もうとしていた抜け道も、すべて敵で埋め尽くされていた。まさしく袋の中の鼠(ねずみ)だ。だがジェイガンとナバールの二人は、周(まわ)りの状況など意に介(かい)さぬといった風に言葉を交(か)わし続ける。
「いいでしょうナバール殿。お相手いたそう」
ジェイガンは馬から降りた。後にはマルスだけが残される。
「貴公は騎士であろう。何故、馬から降りる」ナバールが問う。
「疲れた馬を、少しでも休ませたい」
「なるほど。しかし、その余裕が命を落とすぞ。死んでしまえば、馬の疲れなど関係なくなる」
「お構いなく」
「よかろう」
二人は、わずかな間を開けて向き合う。マルスは気が気でなかった。このような状況の中、無意味な決闘などしている場合ではない。身を乗りだしたその時、横からカインが割り込んで来た。
「マルス王子、我々は、このまま決闘を見守るのみ。口出しは無用です」

「けどカイン。こんな時に決闘なんて、何の意味があるんだ！」
「いえ。ジェイガン様は、唯一の生存の可能性に賭けていらっしゃいます。自分を打ち負かすことが出来たら、貴公らの逃げる道を用意する。剣皇ナバールの言葉には、そのような意味が込められています」
「そんな、無茶苦茶だ。ちゃんと約束を守る保障なんてありはしない。いくら剣皇とは言っても、今はサムシアンの用心棒なんだぞ」
「私はそうは思いません。ナバールは、我々の中で最も腕の立つジェイガン様を選びました。偶然ではありません。そして我が軍勢に、先を進む資格があるかを試そうというのです」
「少し姿を見ただけで、ジェイガンの腕を見抜いたっていうのか？」
「武の道に生きる者は、同じ力量を持った者を見極めます。剣皇にしてみれば造作もないことでしょう。ともかく、今はジェイガン様にすべてを託すのみです」
不安の色の浮かんだ瞳で、マルスはジェイガンの姿を見つめた。羽ばたきの音と共に、シーダのペガサスがその横に舞い降りる。
「マルス、本当に大丈夫なのかしら。剣皇と言ったら、このアカネイア大陸で五本の指に入るという名うての剣士。しかもジェイガンは、騎士でありながら馬から降りている。このままじゃ……」
「判らない。でも、今の僕らには見守ることしか出来ない。信じよう、ジェイガンを」
マルスは、そっとシーダの手を握ってやった。小刻みに震えるその小さな白い手は、見守る仲間

たちの心情を代弁しているかのようだった。

一同の見守る中、ジェイガンとナバールの二人が対峙する。

両者の体から発せられるすさまじい闘気が、周りの雑音を打ち消した。沈黙の支配する中、ジェイガンがゆっくりと腰から剣を抜く。ナバールは抜刀しない。ジェイガンは知っている。ナバールの得意とする剣技は一撃必殺の居合抜き。すでに抜いているも同然だ。下手に打ちかかると、思いもよらぬ方向から剣が飛んでくることになる。

睨み合う二人の頭上で鳥が鳴いた。この場にそぐわぬ、ひどく軽やかな声だ。聞きようによっては、火打ち石を叩く音にも似ている。ルリビタキだった。大きく宙を旋回し、そのまま岩壁の向こうに消える。と同時に、ジェイガンはじりじりと右に移動し相手の出方を見る。しかしナバールは微動だにしない。ただ目でジェイガンの動きを追うだけだ。

ならば、と、ジェイガンは剣先をゆっくり下げた。誘いである。光が走った。かなり遅れて疾風が後を追う。それは天性の才覚を持ったマルスにも見極められぬほどの、一瞬の斬撃だった。

ほぼ同時に、ジェイガンとナバールは後ろに飛んでいる。着地と同時に、ジェイガンの頬から一筋の血が流れた。ナバールは依然として剣を抜いていない。いや、抜いていないように見えるだけだ。事実、先の閃光はナバールの放った最初の一撃だった。

「この距離で私の斬撃を躱したのは、貴公が初めてだ」ナバールは、口元にかすかな笑みを浮かべる。「しかし次はない。馬から降りた騎兵は、所詮、翼をもがれた鳥も同じ」

その言葉に、ジェイガンは何も答えようとしない。答えの代わりに宙に舞った。頭上で剣を高くかざし、ナバールに斬りかかる。
「覚悟！」
「愚かな」
短いやりとりの中、二度、三度、空中で剣が切り結ばれた。今度はマルスの目にも、はっきりとナバールの剣が見える。だがそこまでだ。複雑な軌跡(きせき)を描く、太刀筋(たちすじ)のすべてを見抜くことは出来ない。ジェイガンは違った。確実にナバールの放つ剣を躱し、また自らの剣で受け止めている。
しかし逃げ場のない空中にいたことが災いした。ナバールの四度目の斬撃が、ジェイガンの肩口を深々と抉(えぐ)った。鋼(はがね)の肩あてを貫き、その下の肉と骨を砕(くだ)く。
「それたか！」
ナバールの言葉からも察せられるように、その剣は止(とど)めの一撃になるはずだった。ジェイガンは微妙に体をそらし、狙いをはずしたのだ。もし避けねば、確実に首を斬り落とされていただろう。だが、それでも戦いの趨勢(すうせい)は決した。着地したジェイガンの左肩から、真紅(しんく)の血があふれ出る。
「もう、終わったも同然だが」
「まだまだ戦える。たかが左肩！」
「判った。続けよう」
二人は再び対峙(たいじ)した。しかしナバールが涼しい顔をしているのに対し、ジェイガンは顔中に汗を

滲ませている。限界が近い。肩からは、滝のように鮮血が流れ落ちている。サムシアンの間から、かすかな薄ら笑いがもれた。多くの仲間を手にかけた騎士が死に行く様を、堪能しているのだ。

「ジェイガン……」

マルスが呟く。そして腰のレイピアに手をかけた。助けに入るつもりだ。だがその手を、隣にいたカインが押しとどめた。

「マルス様。それではジェイガン様の意図が無になります。ここは御辛抱を」

「でも、もう勝敗は決したも同然じゃないか。もうこれ以上は無理だ」

「いいえ。ジェイガン様を信じるのです。助けに行きたいのは、私も同じなのですから」

それ以上マルスは動くことが出来なかった。心の底から吐き出された言葉、カインの沈痛な面もちを見たからだ。ならば信じよう、ジェイガンの勝利を。マルスはそう自分に言い聞かせ、再び戦いの場に視線を移した。ジェイガンとナバール。二人を包む時間は完全に静止してしまったかのように見える。両者とも睨み合ったまま、ぴくりとも動かない。お互い、次の一撃で勝負が決まると判っているのだ。そして傷を負ったジェイガンに、万に一つも勝ち目はない。

再びルリビタキが鳴いた。カチカチ、カチカチ……。甲高い声で鳴く。

ジェイガンが飛んだ。先ほどの攻撃と寸分違わぬ動作だ。

「うおおおおっ！」

腹の底から振り絞った雄叫びと共にナバールに迫る。致命的な失策だ。ナバールほどの相手に、



同じ攻撃を繰り返すなど。
「所詮、この程度の相手だったか」
ナバールは半ば義務感で剣を抜いた。決闘の礼儀として、止めは刺さねばならない。が、剣に手をかけた瞬間、思いもかけぬ存在が視界に割り込んで来た。ルリビタキだ。餌でも見つけたか、ルリビタキがゆっくりと舞い降りて来る。それもジェイガンとナバールを結ぶ一直線上に。
「ちっ！」
舌打ちしつつ構えを変える。まだまだ間合いは充分にある。ジェイガンの攻撃が届くはずはない。しかしルリビタキを視界からはずした瞬間、ナバールは自分めがけて迫り来る一本の矢に気付いた。いや、矢ではない。それは剣だ。ジェイガンの手にしていた剣だ。剣を矢のように投げたのだ。避けるか、跳ね飛ばすか。ナバールは避ける方を選んだ。身を反らして避ける。
そこで勝敗は決した。一瞬の隙を突き、ナバールの眼前に達したジェイガンが右拳を振るう。渾身の一撃。その砲弾のような拳は、ナバールの腹に吸い込まれるように突き刺さった。
アリティア宮廷騎士団は、剣術と同様に体術も重んじる。馬上でなくとも、武器なくしても戦えるように。今まさに、剣の一撃にも匹敵する鉄の拳がナバールに叩き込まれたのだ。
さすがのナバールも、意表を突かれたその攻撃を防ぐことは出来なかった。臓腑を貫く衝撃に、握った剣を手離す。そして両膝をがくりと地に付け、そのまま前のめりに倒れ込んだ。
「やったな、ジェイガン！」

最初に叫んだのはマルスだった。続いて、カイン、アベルらが、口々にジェイガンの健闘を讃える。ジェイガンは落とした剣を拾い上げ、倒れ伏したナバールを見おろした。かすかに声が聞こえる。どうやら、それは笑い声らしい。

「負けたよ。まさか、鳥の動きまで計算しているとは思わなかった。しかも剣を投げるとは。アリティアでは、剣の使い方を教えていないのか」

「人を欺くこと。常に意表を突くこと。これこそ、最大の戦術なり」

「兵法指南第六十五之巻、か。まあ、いい。俺は剣で勝ち、拳に敗れた。約束通り山を降りろ」

「かたじけない」

決着は付いたはずだった。

しかし——。

「逃がすな。このまま連中を逃がすな！」

サムシアンの一人の叫びが引き金となった。堰を切ったように、憎しみと憤りを秘めた罵声が周囲に木霊した。猛烈な殺意が怒濤の津波となってマルスらを襲う。

「くそっ。せっかくのジェイガンの奮闘が！」

「マルス様、ここは我々が。せめて王子だけでも」

「いいや、僕も戦う。あのアリティア城脱出の時とは違う。いつまでも、みんなに助けられてばかりじゃない。自分の運命は、自分で切り開いてみせる！」マルスはカインにそう言いながら、腰か

らレイピアを引き抜いた。「シーダ。レナさんを連れて上空へ。君だけは生き延びることができるはずだ！」

だが返事をしたのはレナだった。「いいえ。もとはと言えば、私のせいなのです。ここに残ります。詳しい事情は知りませんが、マルスさん、あなたが」

「違うわ、レナさん」これはシーダだ。「どのみち、この山を突破するには、連中を相手にするしかなかった。てっとり早くガルダの港町を抜けてオレルアンにたどり着くには、これしか方法がなかったんですもの」

「でも……」

「それに、サムシアンの中には弓を持っている者もいる。空を行くペガサスナイトの弱点は、弓よ。どちらにしろ、逃げることは出来ないってこと」

「やれやれ、みんな譲り合ってばかりじゃないか」

このような切迫した事態だというのに、マルスは口元に笑みを浮かべた。

「一蓮托生、か。やるしかない」

そんな決意の言葉を述べた時だった。倒れていたナバールがおもむろに立ち上がり、剣を片手に身を乗り出した。

「ナバール殿？」

「まかされよ」ジェイガンに告げ、ゆっくりと進む。その肉体から、再び身も凍り付くような闘気

が発せられた。ナバールは、サムシアンの頭領と思われる男の前にまで近付いた。「ハイマン。覚悟はいいのだな」

「どういうことだナバール。貴様、まさか命を救ってやった恩を忘れたというのか。この私を斬るとでもいうのか？」頭領ハイマンは、ナバールの闘気に臆することなく叫んだ。

「……恩は忘れはせぬ。生きていたおかげで、私を打ち負かすような猛者とも出会えた。だが、それとこれとは別問題。ハイマン。貴様、いつも言っていたではないか。自らの窮地を自らの力できり抜けた者、サムシアンはこれを追わぬと。悪魔の山の血の掟、忘れたとは言わさん」

「ぬう……」

ハイマンは言葉に詰まった。周囲のサムシアン達も、その成りゆきを見守っている。同じようにマルスもまた、固唾を飲んで次の動静を窺うだけだ。

「どうなのだ、ハイマン。もしも、もしも貴様がそれでも退かぬと言うのなら、よかろう。私も相手となろう。だが忘れるな。相手は不死身の剣皇と、アリティア騎士団の精鋭。それを相手にする覚悟は、もちろんあるんだろうな」

確かに。人という枠を逸脱した、ナバールの剣の腕は充分承知している。さらに相手は、そのナバールをも負かしたほどの強者。他の兵も、並々ならぬ技量を持つことは明白だ。現に先の岩棚の戦いで、百人近い部下を失っている。このまま面目を取り全滅覚悟で挑むか、それとも……。

ハイマンはしばし思索した。そしておもむろに右手を高く振り上げた。サムシアン一党が、恨め

しそうな目をマルスらに向ける。だがその後、ぞろぞろと岩壁の向こうに消えていった。ハイマンのかざした右手は、撤退の合図だった。
「済まない。この恩義、死ぬまで忘れん」
ナバールは剣を鞘に収め、引き上げようとしているハイマンの背中に礼の言葉を投げた。ハイマンはただ無言で、ナバールを一瞥しただけだった。
全員が安堵のため息を漏らした。極限までの緊張の束縛から解放され、皆、へたり込むようにその場に腰を下ろす。
「かたじけない、ナバール殿」
ジェイガンは傷を負った左腕を押さえつつ、ナバールに一礼を送った。
「いや、貴公らの目的を知ったからな。その手助けがしたかった。そう思ってくれ」
「我々の、目的？」
「アリティア宮廷騎士団、か。国は滅んだのに兵は残る。そしてマルスといった、そこの坊主」ナバールはちらりとマルスの姿を見る。すでに殺気は消え失せている。「確かアリティアの王子も、同じ名だったな。もっとも、そこにいる坊主ほどの剣の使い手だったかどうか知らぬが」
剣の使い手。そう言われた時、マルスは何やら不思議な気がした。ナバールほどの人物に名手と呼ばれるなど。だがナバールはその時、マルスの秘められた才覚を確かに見抜いたのだ。
「王国再建、か。なかなか大層な話だ。この御時勢、帝国軍相手にそのような大それた考えを抱く

などとは。しかし、それも叶わぬ夢ではない。貴公らの、その力があればな」
「ナバール殿。我々に、力を貸して頂けぬか。貴公ほどの剣士ならば、百、いや、千の仲間を得たも同じ。いかがか」
「遠慮させてもらおう。私は、とうに死んだはずの男。今日ここで剣をまみえたのも、白昼の幻に過ぎぬ」
「幻?」
「……さらばだ!」
次の瞬間、ナバールの剣が弾け飛んだ。
ほとんどの者には、鞘に収まった剣が勝手に飛んでいったようにしか見えない。だがマルスは、その一部始終を見て取った。ナバールは剣を抜き、自らの命を絶とうとしたのだ。気付いたジェイガンは、僅かな差でナバールの剣を弾き飛ばした。もしその動きが少しでも遅れていたら、ナバールの剣は確実にそれを持つ者の首を寸断していたはずだ。
「なるほど、自害も出来ぬか」ナバールは地に刺さった自分の剣を見おろし、自嘲気味に呟く。
「お考えなおし下さい。その力、アカネイア大陸再興のために。いや、ドルーア帝国軍撃滅のために、何卒お貸しいただきたい」
「私に、これ以上の生き恥をさらせというのか。盗賊の用心棒に成り下がり、そして獲物であるはずの男に不様に敗れた。これ以上の生き恥を」

ジェイガンには何も言えない。自分もまた武の道に生きる者だ。ナバールの気持ちは痛いほど判る。逆の境遇ならば、同じように自らの命を断とうとしただろう。
「違います。生き恥などではありません」意外にも、割って入ったのはシーダだった。「ナバールさん、生きることが恥ならば、この世に生きるすべての者は、その恥を背負い生きているはずです。そうではないでしょう。それに、負けることが恥ではありません。生きることが戦いならば、戦わずして逃げることこそ、恥なのではないでしょうか」
ナバールは、じっとシーダの言葉に聞き入っている。
「無駄に命を捨てて、何になるんですか。それとも、過去の栄光の中で死にたいのですか。私は二カ月前、そこにいるマルスに教えられました。城は焼けても人は残る。アリティアは滅び、タリス城もまた焼け落ちました。でもマルスも私も生きています。崩壊した城の主として、恥をさらして生きています。でも、生きているからこそ摑(つか)める真の栄光があると思うからこそ、こうして生きているんです」
訴えかけるような目で、シーダはナバールを見つめる。それは言葉という名の刃(やいば)だ。その刃はナバールの胸に深々と突き刺さった。
「不敗の伝説がついえても、また今日から、新しい伝説を築けばいいじゃないですか」
「シーダさんの言うとおりです」
毅然(きぜん)とした声が響いた。それはシーダの後ろでペガサスにまたがる、僧侶レナの言葉だった。

「私の両親は戦災で死に、そして兄のマチスは帝国軍に徴兵され、二年前のアリティア騎士団との戦いで命を失いました。兄は最後まで戦いを嫌っていましたが、それでも、死ぬまでに十人近いアリティア兵を打ち倒したと聞いています。そう、マルスさん。あなた方の軍隊の兵を、私の実の兄が手にかけたのです」

それはマルスにとって、知っていながらも忘れようとしていた事実だった。帝国軍とは言え、相手は魔物や野獣の群れではない。同じように血肉を持った生身の人間なのだ。中には戦いを忌(い)み嫌っている者もいるだろう。だが、戦場でそれを問うことも出来ない。そしてそれ以前に、ドルーア帝国とは言いながらも、もともとは同じアカネイア大陸に住む同胞なのだ。

暗黒龍メディウスに征服されたグルニアとマケドニア。その二つの王国が、現在のドルーア帝国の母体になっている。そして今や大陸のほとんどの国が、ドルーア帝国の占領下にあるのだ。生き延びた兵士のほとんどが帝国軍に再編入され、マルスのような反乱軍の制圧に当たっている。つまりは、かつての仲間と剣を打ち合わせているのだ。そしてアカネイア大陸解放を目的に据(す)えたマルス軍は、果たしてこれから何人の同胞を斬り捨てねばならないのか。アカネイアのために、アカネイアの人々を斬る。マルスの動揺をよそに、レナの告白は続く。

「でも、それは仕方のないことなのです。どちらかが倒れるまで戦う。戦争とは、そうしたものなのですから。だからこそ敵を憎むのではなく、戦争という時代の流れすべてを憎み、それを生んだ要因を取り除かなければならないのです。そして、それこそが真の戦いなのです」

誰も一言も言葉を発しない。静かにレナの言葉に耳を傾けている。
「けど、私はその戦いから逃げだそうとしました。私が僧侶になったのも、実は、そんな戦争という流れから逃れるためだったのです。自分自身、そう気付いた時は茫然としました。神聖な神の道を、私は逃避の道にしていたのですから。それから私は離れ里を渡り歩き、可能な限りのけが人、病人を救おうとしてきました」
「そうそう。聖女のレナさんっていやあ、この辺りじゃ相当な有名人らしいからなァ」
ジュリアンが横から茶々を入れる。素っ頓狂な、場違いな声だった。シーダにじろりと睨まれ、ジュリアンは亀の子のように首をすくめた。
「聖女……ですか。でも、実は、それもまた逃げでしかなかったんです。それで自分が戦いから逃げていることを、埋め合わせようとしているだけだったんです。でも、シーダさんの言葉を聞き、私もようやく決心がつきました。もう逃げません。人を傷つけてはならぬという神の教えにそむくことになろうと、皆さんと共に行きます。いいえ、ぜひ行かせて下さい」
ジュリアンは、レナが生に執着しない理由にようやく気付いた。神の意志に身を委ねていたのではない。神にすがりついてまで生きている自分を、密かに恥じていたのだ。レナの言葉は、確実にナバールの心を揺り動かした。言葉だけではない。吐露された心情のすべてがナバールの魂を揺さぶったのだ。
「逃げ、か。現実からの逃避。そうだな、確かにその通りだ。私は負けた。それは事実だ。しか

し、それでもなお私の力が欲しいというのなら、貴公らに無償で貸すとしよう。どうせ捨てたつもりの命だ。好きに、するがいい」ナバールは、ゆっくりとマルスに向き直った。「真の栄光の日まで、この命、マルス王子に預けましょう」

腰からゆっくりと剣を抜き、マルスに差し出すように伸ばす。命にも等しい剣を、その主に託す。そんな意味の込められた、アカネイアの古くからの慣習だ。マルスはたじろいだ。王子とは言いながらも、このような典礼には慣れてはいない。救いの手を差し伸べたのはジュリアンだった。

「まあまあ、堅苦しい挨拶はなしにしましょ。申し遅れまして。俺は盗賊のジュリアン。この辺りじゃ、ちっとは名の知られた大盗賊だ」

「とんと聞いたことないな、そんな名は」

アベルがにべもなく答える。だがジュリアンはくじけない。

「ともかく、俺もお供させてもらいますぜ。何だか楽しいことになりそうだ。それにレナさんのことも気にかかる。どこまでも付いていきますぜ。いいでしょ、マルス王子！」

「あ、ああ。構わないけど」

「じゃあ決まりだ。さ、そうなりゃけが人の手当てをして、さっさとこの山を降りちまいましょう。いつサムシアンの気が変わるか知れない。レナさん。てきぱきと、治療しちゃって下さいな」

ジュリアンは、明るくレナに声を投げる。しかしレナは戸惑うばかりだ。

「でも、治癒の杖がないと、私には」

「おやおや、その治癒の杖ってのは、このことですか」
後ろ手に隠し持っていた杖を、芝居がかった動作で取り出す。
「どうして？　サムシアンの根城に置き忘れてきたのに」
「なあに、さっきの決闘の時、こっそり忍び込んで取り返してきたんです。忘れましたか、レナさん。俺は大盗賊だ。そして、決して嘘はつかない」言いながらジュリアンは、高らかに笑ってみせた。

こうして、剣士ナバール、僧侶レナ、盗賊ジュリアンの三人が、マルス一行に新たに加わった。そして物語の舞台は、オレルアン王国へと移る。そこには大陸で最も古い歴史を持ち、すべての王国の源となったアカネイアの王女、ニーナが匿われているのだという。

ドルーア帝国軍の侵攻に、真っ先に攻め滅ぼされた伝統ある大国アカネイア。その王宮の解放は、困窮の中にいる人々に一筋の光明を投げかけることになる。マルスの軍は、ニーナ王女の奪回、続いてアカネイア宮殿解放を最初の目的としていた。もともとそのためのデビルマウンテン突破である。そしてそれは果たされた。このまま北上すれば、数週間でオレルアンへとたどり着けるだろう。

時にマルス・ノア・アリティア十六歳と五カ月。タリスを旅立ち、すでに二カ月が過ぎ去っていた。

# 第3章 オレルアンの戦士

マリクには、都で聞くもの、見るもの、そのすべてが物珍しい。
幼い頃アリティアを離れ、カダインに移り住んで十年。修行に没頭するだけの毎日で、世の流行ごとに関心を持つ余裕などはなかった。完全に俗世と隔絶された生活を送っていたのだ。そのためオレルアンの街を歩いていると、自分が別の世界を歩いているような錯覚に捕らわれる。
商都オレルアン。そこは古くから交易の都として知られており、東西に続く交易路の中継点でもある。オレルアンにないものは、大陸のどこを探してもない。そんな言葉があるほど、取り扱われている交易品の数と種類は多岐にわたる。しかしそんなオレルアンも、今ではかつてほどの華やかさはない。王城を攻め落とされ、ドルーア帝国の支配下に置かれているからだ。交易と商売の自由は保障されているものの、やはり街にはどこか活気がなく、道を歩く人々の顔は暗い。いたるところに立っている帝国軍の歩哨も、街の雰囲気を重苦しくするのに一役買っていた。
だがそれでも、なおオレルアンが大陸随一の商業都市であることに違いはない。涼しげな朝の陽光の中、今日もまた多くの商品が市場を行き交い、商人が買いつけのために街を訪れる。
「お兄さん、カダインの人かい。だったらこの指輪いらないか。霊験あらたかな〃司祭の指輪〃だ。

本物だぜ。見てみなよ！」
「とれたてのトクアの実だ。たった今、メニディから運んで来たばかり。どうだい、味見してみるかい？　三十文でどうだい、え？」
「そんな数じゃだめだめ。一貫いくらだ。まとめて買わないと、安くならないよ！」
マリクは戦場さながらの市場をすり抜け、市街中心へと足を向けた。人混みになれていないため、どうにも気分が勝れない。人の往来の激しい市場ならば、何か手がかりが摑めると思ったのが間違いだった。とても人探しをしている余裕などはない。
――やれやれ。オレルアンに入ってもう三日。そろそろ、宿賃もなくなりそうだし。
そんなことを考えながら、石畳の目抜き通りを歩く。
ふと見ると、前方の十字路の角にドルーア兵が立っているのが見えた。青銅色の全身鎧を着込んだ重装歩兵が3人、馬車の行き交う往来を監視している。その手には鋭く尖った長槍。いかにも威圧的な空気を放っている。
マリクはカダイン参道府発行の、正式な参道書を持っている。何ら恐れることはない。しかし武装した兵の横を通るのは、あまり気持ちのいいものではなかった。さりげない歩調で、努めて平静を装い曲がり角を過ぎる。その時だった。
「おい、そこのお前！」
マリクは自分のことと思い、慌てて振り返った。

そうではない。呼び止められたのは、汚(きたな)い身なりをした若い男だった。

「は、私、のこと、ですか？」

「そうだ。お前だ。身分書を出せ」

重装歩兵の一人が詰問(きつもん)する。残る二人の歩兵は、男を囲むような位置に移動した。

「あ、はい。今、すぐ、出します」

男は懐(ふところ)に手を入れ、身分書を取り出した。占領後、国民に手渡された身分証で、不法侵入者の早期発見のため発行された。この身分書を携帯(けいたい)していなかった場合、その場で斬り殺されても文句は言えない。

歩兵はひったくるように身分書を手に取った。ねぶるように内容を改める。その間、残る二人の歩兵は男の身なりをじろじろと観察していた。

と、背後に回った歩兵が、男が持っていた茶色の革(かわ)袋に興味を示した。

「おい、この袋の中身はなんだ」

「あ、いや、それは、ただの、食糧で、その、何でもないんです」

「ただの食糧なら、何で見せられん」

「その、あの」

「とっとと見せんか、この蛆虫(うじむし)がッ！」

槍の柄(え)を男の腹に思いきり突き立てる。短い悲鳴とともに、男は石畳(いしだたみ)の路面にのけぞった。抱(かか)え

ていた革袋が口を開け、その中身が飛び出す。袋の中身は、種々様々な薬草の束だった。
「ほほう。よくまあ集めた物だ」
「けッ、ふざけやがって。桔梗蘭にネキジタン、ヒコの実にオオバナイキソメソウ。まだまだあるぞ。どれもこれも、薬事に用いる禁制品だ」
「貴様、薬草の調合が禁止されているのは知っているだろうな、ああン？」
歩兵は倒れた男の首根っこを掴み、無理やり立ち上がらせた。
「重罪だ。薬事は我が軍の認めた僧侶以外、許されていない！」
歩兵の拳が飛んだ。まともに男の顎に叩き込まれる。重い手っ甲を着けての一撃だ。男の前歯の一本が飛び、口元から鮮血がほとばしった。
が、それは始まりに過ぎなかった。歩兵達は、よろめく男に次々に鉄拳を、蹴りを幾度となく浴びせた。男は短い悲鳴を上げながら、まるで舞踏を踊っているかのように左右にふらつく。死の舞踏だ。全身鎧を着込んだ歩兵から浴びせられる殴打は、それこそ鎚矛の一撃ほどの威力を持つ。
「ひどい……」マリクは思わず呟いた。これは捕縛の様相ではない。
うさ晴らしを兼ねた、ただの私刑だ。マリクは周囲を見回した。いつの間にか人垣が出来ている。しかし誰もが、貝のように口を閉ざして蛮行を見つめるだけだ。恐らくは、ごく日常のありふれた出来事なのだろう。
——いわれなき暴行を受ける者に救いの手を差し伸べず、見て見ぬふりをする。それは暴行に加

担したも同じだ。マリク、お前も人を超える力を身に付けようとするのなら、それを忘れてはならない。

恩師ウェンデルの言葉が、マリクの耳に蘇る。彼は意を決し、一歩前に進み出た。だが、後ろから現れた太い腕に引き戻される。

「へたに関わり合いにならないほうがいい」

マリクを引き戻したのは、頭に白いターバンを巻き、体をすっぽり覆うマントに身を包んだ一人の男だった。歳は三十過ぎ、といったところか。

「このまま見過ごせません」

「相手は、三人だけじゃない。騒ぎを起こせば、すぐに街中の歩兵が集まる。危険過ぎるぞ」

「しかし……」

人垣にまぎれて交わされるマリクと白いターバンの男の会話を押し退けて、男の悲鳴が響いた。

「御勘弁を、何とぞ御勘弁を。薬草は、病気の母のために、集めたんです。お許しを！」

「許せだと？　罪を犯しておいて許せだと？」

倒れ込んだ男の背中を、歩兵の一人が踏みつけた。総重量五百貫を超す荷重が男にかかる。死ねと言うのも同じだ。男が低い声でうめく。

「待て！」人垣の中からマリクが飛び出した。歩兵達の蛮行にこらえきれず、ターバンの男の制止を振り払って身を乗り出したのだ。



「何だ、貴様？」
「いい加減にしろ。貴様らのしていることは、ただの暴行だ。それが軍人の、戦士のすることか！」
「ほほう。俺達にお説教か」歩兵の今度の狙いはマリクだ。倒れた男をそのままに、槍を片手にマリクに迫る。「この街の者ではないな。旅行者か。それとも、反乱分子か」
「貴様らに名乗る名前はない」
「なら、力ずくで言わせてやろう！」歩兵の一人が槍を繰り出した。
さすがに訓練の行き届いたドルーア帝国軍重装歩兵だけのことはある。その動きに一片の無駄もない。マリクは一歩後ろに退がり右手をかざした。手刀の構えだ。しかし間合いが広すぎる。
「馬鹿が、何の真似だ！」
歩兵が笑いをもらした瞬間、振り落ろされたマリクの右手から閃光が放たれた。その光はつむじ風のような大気のうねりを伴い、槍をかざした歩兵に伸びる。
放たれた一撃は、宙を引き裂く大気の刃だ。あらゆる物を寸断する真空の剣だ。その猛撃を食い止める術は、この世のどこにもない。風の魔法エクスカリバー。大気の精霊シルフィードとの盟約によって行使される精霊魔法。切断効果のある真空断層を、剣のように操る一撃必殺の呪文だ。
そのエクスカリバーの一撃が歩兵の胸に突き刺さる。分厚い鋼の胸板が紙のように切り裂かれ、その奥にある帷子、さらに岩のような肉体がばっくりと口を開けた。胸から鮮血がほとばしる。蟇

が押しつぶされたような呻きを上げて、歩兵はその場に崩れ落ちた。どくどくと真紅の血が広がる。石畳は真紅の絨毯と化した。
「魔法だ。こいつ、魔法を使いやがる！　魔導士だぜ！」
「けど、あんな魔法見たことないぞ。我が軍の魔法兵団の中にも、あんな魔法を使う奴はいない！」
残された二人の歩兵は滑稽なまでにうろたえる。いかに頑強な鎧も、魔法の前にはただの一枚布にしか過ぎない。そのことを充分に承知しているのだ。
倒れた歩兵がか細い声を絞り出す。絶命してはいない。かろうじて命を保っている。
「威力は抑えた。急所もはずしてある。こいつを連れて、今すぐこの場から立ち去れ」マリクはそう言い放つと、すたすたと暴行を受けていた男に近付いた。「大丈夫ですか」
男を抱え起こす。しかし男は、先ほどとはうって変わった凛とした声でマリクに言った。
「馬鹿、何で手を出した！」
「え。で、でも……」
「俺一人で何とかなったものを。見ろ」
重装歩兵の一人が呼子を吹いている。耳に障る甲高い音だ。周囲にいた群衆が散る。代わって通りの向こうから、民家の軒先から、次々に警備の歩兵達が集まってきた。
「相手が三人ならば、俺がねじふせていたんだが……」
傷だらけの男は跳ねるように飛び起きた。先ほどとは別人のような機敏な動作だ。

「逃げるぞ。いかに魔導士でも、あの数をまとめて相手にはできまい」
男は羽織ったマントを脱ぎ捨てた。マリクは思わず息を飲む。マントの下にあったのは、勇壮な騎士の姿そのものだった。そして甲冑の胸には、獅子をかたどった金色の紋章。それはオレルアン陥落の時、全滅したはずの王国騎馬隊の紋章だ。
「俺は騎馬弓兵のウルフ。行くぞ」
ウルフと名乗った男は、散らばった薬草の束を素早くかき集め、脱兎の勢いで駆け出した。マリクもその後に続く。二人は路地を駆け抜ける。しかし、すでに左右から歩哨が集まりつつあった。
「どうします。逃げ道はありませんよ」
「まあ見てろ」
間髪入れず、一台の馬車が二人のもとに突進して来た。二頭立ての、商人が好んで使う貨物馬車だ。その御者が身を乗りだし叫ぶ。
「乗れ！」
「あなたは？」
マリクが驚くのも無理はない。御者は、先ほどマリクを制止した白いターバンの男だった。
「急げ。歩兵がすぐに来る！」
ウルフは後ろの荷台に飛び乗った。そしてマリクに、来いと手で合図を送る。素性は判らないが、少なくとも敵ではなさそうだ。マリクはとっさに判断し荷台に乗った。

「行くぞ！」ターバンの男は手綱を振るう。勇ましいいななきと共に、二頭の馬は弾丸の勢いで飛び出した。そこらの駄馬とは明らかに違う。正規の訓練を受けた、血統正しい軍馬なのだろう。マリクは揺れる荷台の上で目星を付けた。

——とすると、やはりこの人達は。

そこで思考は中断された。御者の男の叫びが耳を突く。

「揺れるぞ。振り落とされるな！」

前方で、数人の重装歩兵が手に手に槍を構え立ちふさがっている。しかし男は速度を緩めない。このまま一気に突破するつもりだ。

「それっ！」手綱を激しく振る。二頭の馬は荒鷲のごとく目を光らせ、まっしぐらに歩兵に向かって突き進んだ。

「そこの馬車、止まれ！」

もう遅い。馬はさらに速度を増し、歩兵の目前で大きく前足をはね上げた。いかに強固な鎧を身に着けていても、猛然たる軍馬の突進を阻むことは出来ない。頭上から襲いかかる蹄の猛打に、重装歩兵は左右に弾き飛ばされた。

「このまま街を抜けるぞ！」

だが後方から、二騎の騎馬が追いすがってくる。ドルーア帝国軍の騎馬兵だ。さすがに馬車とでは速度が違う。距離が徐々に縮まってきた。騎馬兵が抜刀する。このままでは、背後から剣の一閃

を浴びせられるだろう。マリクはいつでも呪文を放てるよう身構えた。が、その横でウルフは、荷台に積まれた干藁（ほしわら）の中から一挺（ちょう）の弩（いしゆみ）と矢筒（やづつ）を取り出した。

「俺にまかせておきな。呪文は、何発でも使えるってもんじゃないだろう」言いながら弦を張り、溝（みぞ）に矢を置く。そして肩に弩をあてがい、正確に狙いを定めた。

「よし」呟（つぶや）くと同時に矢が放たれる。

　直後、馬上から騎馬兵が派手に吹っ飛んだ。正確無比。揺れる馬車の上から、疾走（しっそう）する目標を射ぬくのは容易なことではない。だがウルフは、それを苦もなくやってのけた。

　残るは一騎。しかしウルフの腕にかかっては、すでに仕留（しと）めたも同然だ。予想通り、ウルフはろくに狙いも定めないまま敵の騎馬兵を打ち倒した。主を失った二頭の馬は、それぞれ速度を緩（ゆる）め視界から消えていく。その頃には馬車はすでに街を抜け、うっそうとした森林の中にあった。

「ここまで来れば、連中も追っては来れまい」

　そう言いながら、ターバンの男は手綱を緩め馬車の速度を落とした。ウルフは弩を降ろし、腕で口元に残った血の飛沫（ひまつ）を拭（ぬぐ）っている。重装歩兵に殴（なぐ）られた時のものだ。

「やれやれ、手順がすっかり狂っちまったな。ここまで大騒ぎになってしまうとは、てんで思わなかった」

　それを聞きマリクはうつむいた。理由や素性（すじょう）はよく判らないが、男達の行動を邪魔（じゃま）してしまった

のは事実だ。
「すみませんでした。ですぎた真似をしてしまって」
しかし謝罪の言葉を聞き、馬を操っていたターバンの男は明るい笑顔で振り返った。
「詫びることはない。力のある者が、ない者を助ける。君の行動は正しい」
「ま、俺も困りはしたけど、内心はうれしかったぜ。まだまだ世の中も捨てたもんじゃないってね」
ウルフは屈託なく笑う。つられてマリクもかすかに微笑んだ。本人も気付いていなかったが、魔道の国カダインを発って以後、初めて浮かべた笑みだった。
「さて、と」ターバンの男が切り出す。「君は見たところオレルアンの人間ではなさそうだが、この御時勢、ただの旅行者という訳でもあるまい。よければ名前と、旅の目的を聞かせてもらえないか。力になれることが、あるかも知れない」
「……名前は、マリク。魔導士のマリク。カダインから来ました」
「ほう、カダインから。魔道を志す者なら、誰でも一度は足を踏み入れる伝説の国だな。しかし伝え聞くところによると、あそこもドルーア帝国の手に落ちたというが」
「その通りです。今では帝国軍が完全に支配しています」
「そんな馬鹿な！」ウルフが驚愕の表情で叫ぶ。「カダインは伝説の魔導士達の住む国だ。さっきのあんた、いや、マリクだっけ、あんたの呪文を見ても判る。武具なくして大国の軍勢と渡り合える最強の国家だ。それがどうして、やすやすと侵略されちまったんだ？」

「カダインでは一切の戦いが禁じられているんです。カダインに住む者、自らの技を白刃に代えることなかれ。古くからの戒律です。唯一、アカネイア興亡の危機に際してのみ、その技を用いても良いと」
「なるほどな、そういう理由があったか」
「しかも敵の総大将は、あの、大司祭ガーネフでした」
「ガーネフだと!?」
ウルフとターバンの男が同時に叫ぶ。その表情は見る見るうちに凍り付いた。
悪の大司祭ガーネフ。ドルーア帝国総帥メディウスの有能な片腕。軍政を取り仕切る実質的な指導者。そして最大最強の魔法〝マフー〟を操る、極黒の魔導士。その名を聞いて、恐怖しない者などいない。
「まさかあの男が自ら出陣するなど。魔道の国カダインの、秘められた力を恐れた証拠か」
「その通りです。恐らくガーネフは、カダインに星と光の魔法があると睨んだのでしょう。すべての攻撃を防ぎつつ、敵に大打撃を与える極黒の魔法マフー。それに唯一対抗できる、星の力を秘めた魔法を……」
「ガーネフはその力が行使される前に攻め込んだ。だがカダインには、その魔法はなかった」
「まさしくその通りです。星の魔法の力を封じ込めた魔道書は、歴史の闇の中に埋もれたままなのです。しかし僕の師匠ウェンデルは、勇敢にも、掟を破りガーネフに立ち向かいました。しかし星

の魔法なくして、奴のマフーに勝てるはずはありません。何しろガーネフには、この世のすべての悪魔が味方しているのですから」
「それでカダイン陥落の謎が解けた。しかしマリク、君はよく無事に脱出できたものだ」
「司祭ウェンデルが、あらかじめ手はずを整えておいてくれたのです。でなければ、ここまで辿り着くことも出来なかったでしょう」
「そうか……」
不意に沈黙がよぎる。二頭分の蹄の音、木々をかすめる小鳥達のさえずり、遠くの清流の流れ、それらの音だけが周囲に満ちている。ウルフが大きくため息をついた。マリクはただ、うつむくだけだ。それぞれが自分の無力さを痛感しているに違いない。敵として戦うには、あまりに帝国軍は強大すぎる。自在に龍に化身出来る皇帝メディウスだけでなく、その側近である大司祭ガーネフにも、誰も太刀打ち出来ないのだ。
ややあって、白いターバンの男がマリクに言った。
「ともかくも、我々はドルーア帝国と敵対する同士であるに違いない。ならば、ますます旅の目的を聞かせてはもらえないか。力及ばずとも、何か役に立つ情報くらい提供出来るかもしれん」
マリクは一瞬躊躇した。ここでうかつに旅の目的を語ってもよいものかと。だがどのみち、先の一件で手配者になったのは間違いない。もう旅行者と偽り旅を続けることも出来ないのだ。それにこの男達は信じても良さそうだ。魔道に生きる者として鍛えられたマリクの勘が、そう告げていた。

「判りました、お話ししましょう。その前に、その、あなたの名前を」
「ん？　ああ、そうか。失礼した。私はハーディン。オレルアン騎馬隊の隊長だ。正確には、だったと言うべきかな」
マリクは記憶を巡らす。カダインは魔道の国と言われるが、もともとは学問の都である。今でも古今東西の国事、軍事に関する情報がいち早く伝えられる。マリクもそこでオレルアンに関する知識は得ていた。
「ハーディン隊長。別名、草原の狼と呼ばれる、あのハーディン公ですか！」
「そんな風に呼ばれたこともあったな。だが今では、八人の部下を抱える敗残の兵にしか過ぎん」
「しかしハーディン隊長ほどのお方がおられながら、オレルアンが落とされるなど」
白いターバンの男、ハーディンは、静かにその瞳を閉じた。まるで苦悶に耐えているかのように、眉間にわずかに皺が寄る。やがてハーディンはマリクに向き直り、悲痛な面もちで答えた。
「国の人々には済まないと思っている。しかし我々はこのアカネイア大陸全体のことを考えたのだ」
「どういう、ことです？」
「敵が城を攻めている間、我々はある人を匿い城下を脱出した。そのために兵力は分散され、結果的にオレルアンは陥落してしまった」
「ある人を、匿う？」
「隊長。そこまで話していいんですか。マリクを疑っているという訳じゃありませんが……」

横からウルフが口を差し挟む。当然だろう。国を犠牲にしてまで守り抜いた人物だ、先ほど出会ったばかりのマリクに、迂闊に打ち明けるなどとは。だがハーディンは、意に介した風もなく言葉を続けた。

「マリク、君はアカネイア興亡の危機に際してのみ、その技を用いていいと言ったね。カダインの戒律にそうあると」

「はい」

「では君の目的は、多分ドルーア帝国軍打倒を目的とするある人物、いや、ある軍勢と合流することにあるんじゃないかな。アリティア王国の正当な後継者、マルス・ノア・アリティアの軍と」

マリクは言葉を失った。かつてアリティアにいた頃、幼なじみとして過ごしたマルス。彼が今、全アカネイア大陸解放を目指して立ち上がった。その助力となるべくマリクは旅立ったのだ。

「まいりました。その通りです」

「なら君は、我々の仲間だ」

「仲間？」

「我々も待っているのさ、マルス王子の軍を。彼らと合流して、ある人をアカネイア王国まで連れていく。そのつもりだ。それこそが、アカネイア大陸解放への近道なのだから」

「では、ある人というのは？」

「会わせよう。今からそこへ向かう。我々の、南の隠し砦に」

そう言ってハーディンは、手綱を振って馬足を速めた。
「マルス様、ジュリアンが戻りました」
オレルアン国境を間近に望む森林。その中の枯れ川の窪みに、マルス軍は密かに野営陣地を設営していた。
ぼろ切れなどを寄せ集めて作った天幕の中に、ジュリアンが足を踏み入れる。奥にいるマルスを中心に、ジェイガン、カイン、アベル、シーダの五人が、入ってきたジュリアンに目を向けた。
「どうだった、街の様子は」最初に質問したのはジェイガンだった。
「いや、どうもこうも。とにかく、何か飲み物はないんですかい」
「これでも飲んでいろ」カインが革の水袋を手渡す。
ジュリアンはその中身を一気に飲み下した。飲み終わると、さもうまそうに大きな吐息をつく。
「おいジュリアン、それで街の状況はどうだったんだ」
「いやあ、それがですね、俺が街に入るちょっと前に、市場の近くで大騒ぎがあったらしいんですよ。何でも魔法使いが、見張りの兵士をぶっ殺したっていうんでね」
「ほほう、魔法使いがか」
「はいな。しかもその魔法使いは、騎馬部隊の生き残りとつるんでたらしいとかでね。街中大騒ぎですよ。ついに本腰を入れて捜索を始めるとか。かなりの数の騎馬兵や重装歩兵が街を出て行きま

したよ。しかも臨時の検問所はあちこちに出来ているし。ま、大盗賊のジュリアン様にかかっちゃ、それも無駄ってもんですがね」

「そんなことは聞いておらん」ジェイガンがたしなめる。

続いて質問を放ったのは、一番奥に座るマルスだった。「で、ニーナ王女の行方は判ったかい」

「ああ、その王女ですよ。その前に、何か食い物はないんですか？」

「はいはい。残り物で悪いけど」

マルスの脇にいたシーダが、木の器を差し出す。木の実や野草で作った簡素なシチューだった。

「いや、こいつはどうも。あれ、ところでレナさんは、どこで」

「レナなら水を汲みに行ったわ。もうすぐ夕食の仕度にかからないといけないから」

「あ、さいですか」

「で、ニーナ王女は？」

あからさまな苛立ちの表情を浮かべ、ジェイガンはジュリアンに詰めよる。

「まあまあ落ち着いて。それでニーナ王女ですが、やっぱり騎馬部隊の残兵が匿っているらしいですぜ。ところがその場所については、てんで見当もつかない。あちこち嗅ぎ回ってみたんですが」

当然だろう。その程度で突き止められるのなら、とうに帝国軍が押し寄せているはずだ。しかしニーナが無事と判っただけでも大きな収穫だった。

「いかがします、マルス様」

ジェイガンはマルスに向き直る。状況を完全に把握しないまま兵を進める訳にもいかない。ニーナ王女を匿っているという、オレルアン騎馬部隊のハーディン隊長と合流出来れば一番いいのだが。
「肝心の居所が摑めないじゃ仕方ありませんやな。ここは回れ右して、迂回するってのも手ですぜ」
ジュリアンは事も無げに言う。ジェイガンは、猫の子のようにその首根っこを捕らえた。
「我々が何のために兵を進めていると思う。ジェイガンは、ニーナ王女はアカネイア王国の正統な後継者だ。王女を助け、各王国の祖であるアカネイアを解放すれば、大陸の人々の光明になる。多くの反乱兵も集まるだろう。そのための進軍だ。何度言ったら判る！」
「す、すいません！　でも、場所が判らないんじゃ」
「それを探すのが、お前の役目だろう。お前さんは名うての大盗賊じゃなかったのか？」
「それはそうですが、ねえ」
「ジェイガン、勘弁してやってくれ。ジュリアンは充分に役目を果たしてくれたさ」
マルスの言葉に、ジェイガンは首根っこをひっつかんだ手を離した。それがいきなりだったため、ジュリアンは不様に地面に倒れ込んだ。
「しかしマルス王子。我々が握っていた情報と、さして変わりはありませんな。合流の手段を見つけないと、このまま永遠に野営し続けるはめになります。もっとも、それもまた楽しいかも知れませんがね」
これはアベルだ。その心配はもっともだったが、マルスはおもむろに立ち上がり、意外な言葉を

口にした。
「みんな出陣の仕度（したく）を。すぐに兵を出す。シーダ、ひとっ飛びして、レナや見張りに立っている者を呼び集めてくれ」
「無謀（むぼう）ですぞ。まずはハーディン様と合流してからでないと」
　そのジェイガンの言葉に、マルスは笑みで応じた。
「だから、案内してもらうのさ。敵の捜索軍（そうさくぐん）にね」
　そう言ってマルスは、腰掛けていた木の切り株（きりかぶ）から立ち上がった。
　あまりの美しさに、マリクは思わず息を飲んだ。綺麗（きれい）にまとめられた金色の髪は白金（プラチナ）細工のようにまぶしく、新雪のように白い華奢（きゃしゃ）な手足は、優美な彫刻のようにも見える。そしてその声。宮廷楽団の琴の音色も、その声の前には錆（さ）びた弓矢の響きにしか聞こえない。
「あなたが、ニーナ王女、ですか」
「お会いできて光栄ですわ。ええと……」
「マリクです。魔導士のマリク。こちらこそ光栄です。このような場所で、アカネイアの姫君と会見出来るなど」
　確かにニーナの美しさには、到底似合わぬ貧相な場所ではある。オレルアン南の隠し砦（とりで）。それは百年の昔、第一次ドルーア戦役（せんえき）の際に作られた要塞の一部だ。しかし今では雨風にさらされ、周囲

の瓦礫と見分けがつかないほどになっている。だからこそ逆に、長らくドルーア帝国軍の捜索から逃れることが出来たのだが。

　今マリクは、その隠し砦の深部でニーナ王女と会見している。唯一生き残った、正アカネイア王家の最後の一人と。

「あなたに会えたのは幸運でしたわ、マリク。強い力を秘めた正義の使徒は、一人でも多いほうがいい。ましてそれが、マルス王子の古き友人というのでしたら」

　国を統治する者は、それぞれ不思議な力を秘めている。このニーナからも、高貴で、それでいて力強い何かを感じる。それは絶対の忠誠を誓わせる目眩にも似た光芒だ。後光。そう言っていいかも知れない。だからこそ自然に、次の言葉が口をついて出た。

「とんでもない、ニーナ王女。このマリク、自らの命に代えて姫の身をお守りしたいと思います」

「そんなに固くならないで、マリク。私もあなた方と同じ、この大陸の解放を願う者の一人に過ぎませんわ」

「それにしても、よくドルーア帝国の魔手から逃れられました。姫が御無事だったことは、この戦乱の世にあって唯一の希望と言えましょう」

　世辞ではない。これはマリクだけでなく、誰もが思うところだ。アカネイア王国は真っ先にドルーア帝国軍の侵略を受けた。それは王国が、いかに大陸中に強い影響力を持っているかの証だ。まず敵は、人々の戦意と希望を打ち砕いたのだ。

「私の身は、私一人の物ではない。そうおっしゃりたいのね、マリク」
「い、いえ、そのようなことは」
「いいのよ。私もそのつもりです。私のような者がアカネイア解放に役立つのなら、この身を挺してでも、なすべきことを行いましょう。亡き父や母に対する、それが唯一の手向けと信じます」
ニーナは優雅な動作で、椅子の脇にあるテーブルから湯呑を取った。そして湯気の立つ薬湯をゆっくりと口にする。それは先ほど、ウルフが街で仕入れてきた薬草から作られたものだ。
ハーディンの説明によると、姫はこのオレルアンに落ち延びて以来、健康をひどく害しているのだという。生来の体の弱さもあるが、それだけではないようだ。恐らく、筆舌に尽くし難い悲惨な体験を経たためだろう。実際、いかにしてニーナがこの地にまで辿り着けたか、それはハーディンですら知らない。ただオレルアン城陥落直前、王よりニーナ王女の護衛隊長を命じられただけだ。詳しい経緯は、ニーナ本人とオレルアン王しか知らない。しかしその王も今は亡い。ドルーア帝国軍侵攻の際、自ら出陣し戦死したのだ。ハーディンがニーナ王女を逃がす時間を稼ぐために。
「ではニーナ王女、私はこれで」
マリクは、これ以上の会見は王女の体に余計な負担をかけると判断した。
「判りました。では最後に教えて下さい。あなたはここに、しばらくいて下さるのですか」
「皆さんの許しが得られれば、そのつもりです。マルスは、いや、マルス王子は、ニーナ様、ハーディン隊長と合流を果たすつもりでしょう。私もすでにドルーア帝国軍から追われる身となりまし

た。ここにマルス王子が訪れるまで、置いていただければと思います」
ニーナは安堵のため息をつく。その脇に控えるハーディンも、嬉しそうな表情でマリクの前に進み出た。
「こちらこそ大歓迎だ。カダインの魔導士マリク。君がいてくれれば、百の兵を得たに等しい。共に戦おうではないか」
「よろしく、ハーディン隊長」
二人が手を握り合おうとした時、一人の兵が部屋の中に飛び込んで来た。その顔はマリクも知っている。砦に着いた時に紹介された、ロシェという名の騎兵だ。
「ハーディン隊長。つ、ついに来ました、奴らが！」
「まさか！　間違いではないのか」
「偵察に出ていたウルフが見つけました。真っすぐこちらに向かって迫って来ます。先発隊は、槍騎兵が百。重装歩兵百。総数およそ二百。後続部隊も集結しつつあります！」
「いつまでも隠れられるとは思わなかったが、まさかここまで早いとはな。恐らく今朝の街での騒動の後に、密かに付けられたに違いない」
「隊長、いかがします⁉」
ちらりとハーディンは、背後に控えるニーナの様子を窺った。アカネイアの王女は慌てても怯えもせず、ただハーディンの言葉を待っている。その毅然とした態度が彼に勇気を与えた。

「判った。皆を集めろ。囲みを突破する。王女を連れて、この隠し砦を放棄する！」

南オレルアン高原の原野を、無数の軍馬が進む。その背後からは、見るからに重々しい鎧を纏った重装歩兵が続く。商都オレルアンに駐留するドルーア帝国軍第八方面軍の先発隊だ。

「古城を根城とする敵は、十名にも満たない敗残の徒だ。しかし決して侮るな。相手の部隊を指揮するのは、あの草原の狼ハーディン。一対一で戦いを挑むな。数で押し切ればよい。目的は、あくまでニーナ王女にある。王女を発見し捕らえた者には、貴族の称号と、一生かかっても使い切れないほどの財宝が与えられる。全員、相応の奮起を期待する！」

先頭を進む重装騎兵が叫ぶ。その言葉に喚起され、続く兵は一斉に雄叫びを上げた。

奮起を促した重装騎兵の名はムラク。この部隊の隊長である。

――先鋒を言い渡されたのは幸いだった。勝てるな。ニーナ王女さえ手に入れれば、この俺の出世の道が開けるってもんだ。

そう思うと自然に顔の筋肉が緩む。情報によれば敵兵は十名足らず。こちらは先発隊だけで二百名。さらに後続の部隊も進撃を開始しつつある。これで勝てないはずはない。その余裕が、ムラクの頬を緩ませていた。

「よし、各隊一列縦隊。槍の布陣で臨む！」

敵の砦は近い。ムラクは後方に連なる部下に、布陣の指示を出した。

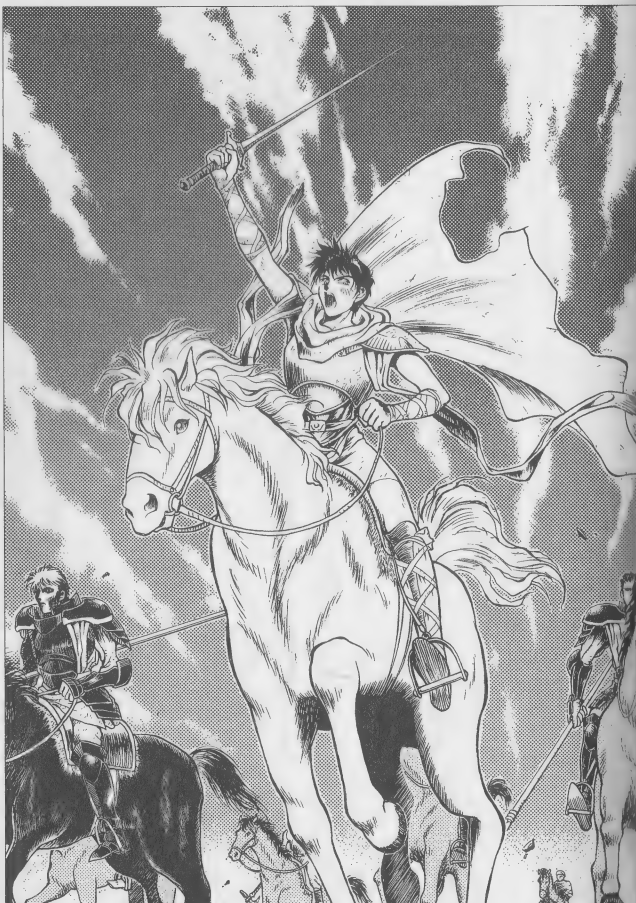
槍の布陣。一点突破のための戦術だ。敵の居城、南の隠し砦を抜くための。
しかし彼の真の敵は、隠し砦に立てこもるハーディンの部隊ではなかった。
一陣のつむじ風がムラクの目前で沸き起こった。かすかな閃光と共に、土煙が巻き起こる。ムラクの乗る馬が、何に怯えたか荒々しくいなないた。
「どうッ、どうッ!」ムラクは馬を鎮める。手綱を振るいながら、ようやく前方の人影に気付いた。
いつの間に現れたのか。周囲はどこまでも果てしなく広がる平原。身を隠すような物はない。しかし広がる土煙の向こうに、確かに一人の男が立っていた。
——まさか、これが噂に伝え聞く転移の杖の法力か。
そうとしか考えられない。もし男が転移の杖によって瞬間移動を成したとすると、それは奇襲を行うために違いない。敵将の首を取り、軍を瓦解させるために訪れた刺客。間違いない。
「何者か、貴様!」
ムラクは剣を抜いた。背後の部下達も、それにつられて剣を抜く。やがて風に押し流され土煙は消えた。男の姿形が明確になる。次の瞬間、ムラクの顔に痙攣が走った。
立っていたのは、野獣の瞳を持った一人の剣士だった。
「貴様、ナバール。辺境随一の剣士、剣皇ナバール。まさか。貴様は死んだのではなかったか!?」
ムラクの叫びは周囲に波紋を投げかけた。
剣皇ナバール。その名は畏怖と驚愕の感情を伴い、連なる兵士達をざわめかせる。

「馬鹿な、ハーディンの部隊に貴様が参加しているなど、聞いてはいないぞ！」
転移の杖によって運ばれたナバールは、それには答えなかった。ただ無言で、滑るような動作でムラクに迫る。
「かつてのナバールは死んだ。そう思って頂きたい」
「何をこざかしい。貴様を討ち取り、さらにニーナ王女も戴く。それにより我が名は、永遠に輝くのだ」
ムラクは馬から降りた。どのみちナバールから放たれる殺気に怯えて、馬は使い物にならない。鎧の重量によろめきながらも、ムラクは剣を片手にナバールに向き直った。
「貴公に個人的な恨みはないが、これもまた人のため。覚悟をされたい」
「馬鹿が、死ぬのは貴様だ！」
ムラクは剣を真横に振った。いや、振れなかった。剣を脇に引き寄せたところで、その動きは止まっていた。彼の口元は、最後の台詞の最後の音、〝だ〟の形で静止している。不気味な静寂が辺りを包んだ。ずるりと、何かが滑る音がした。ムラクの上半身だ。彼は上下に分かたれていた。
ナバールは、すでに剣を鞘に収めている。もちろん抜いた気配もなかった。瞬間の斬撃だ。すでに勝負は、彼がこの場に現れた時点で決していたのだ。
ムラクの上半身はそのまま横にずれ、どさりとオレルアンの大地に転がった。残った下半身も、同じように膝をついて倒れた。かつてムラクだった肉塊がそこにある。どくどくと鮮血と臓物をぶ

ちまけて、そこにある。
ムラクの部下達に言葉はなかった。すでに戦意は完全に消沈している。だが、仮にも彼らは訓練を受けたドルーア帝国軍の正規兵だ。すぐさま気を取り直し、ナバールに剣を向けた。
「隊長の仇を！　敵はたった一人。かかれ、かかれ、かかれッ！　剣皇ナバールを討ち取り、その名を上げるのだ！」
「叩き斬れ！　あの男の向こうにニーナ王女の匿われている砦がある。ひるむな、勝利は我らにあり！」
獣の咆哮のような雄叫びが沸き起こる。声でも上げねば、恐怖の余り腕が萎えてしまうからだ。
騎兵が一斉に迫る。が、ナバールは避けもせず、剣を抜こうともしない。彼の役目は敵将を討つ。ただそれだけだ。それによって敵の布陣は崩れる。そしてその目的は、すでに果たされていた。
「全員、かかれ！」号令がかかる。しかしそれは敵軍の中からではない。騎兵の後方からだ。「ジェイガン、カイン、アベルは撹乱を。シーダ、君は頭上から敵の退路を見極めてくれ。そして残りの者は、僕に付いて来い！」
敵の騎兵は、いきなり背後から現れたマルスの軍に慌てふためく。完全に機先を制された。ナバールがムラクと対峙している間に、マルスらはまさしく鬼神のごとき速さで後方から接近していたのだ。それはすなわち、騎兵の後に続く重装歩兵部隊の壊滅を意味する。
すでにマルスらは、わずか十名に満たない軍勢で、騎兵の後に続く重装歩兵を蹴散らしていた。

一人の損失すらなしに。そして残るは、将を失い動揺する百名の槍騎兵だけだった。
「後続部隊が来る前に片づけろ。この一戦ですべてが決まる！」マルスはレイピアを手に叫んだ。

ハーディンは部下を集め、直ちに隠し砦脱出の手はずを整えた。
しかし状況は絶望的だった。そもそも隠し砦は、外敵をオレルアン領内に入れぬよう作られた城塞だ。逆からの攻撃、つまり領内からの攻撃には、まったく無防備な造りになっている。さらに逃げたところで、周囲は一面、何もない平原が連なるだけだ。身を隠す物は何一つない。一歩ここを出れば、敵に見つけてくれと言わんばかりの状況に身をさらすことになる。
——しかし籠城はできん。こちらの兵の数が少なすぎる。しかも食糧も満足にない。せめて、せめてニーナ王女だけでも脱出させねば。
ハーディンはじっと自分の手のひらを見つめた。
——妻と娘の側に行くことになろうと、王女をお守りせねばなるまい。自らの国を賭けて王女を守り抜いた、亡きオレルアン王の遺志に報いるためにも。
そんな決意を固めた時だった。瓦礫の隙間から外の様子を窺っていたウルフが、今にも泣き叫びそうな声を上げた。「隊長、来ました。敵軍です！」
「そんな、信じられん。速い、速すぎる！」
「間違いありません。先頭は騎馬兵。その後ろに歩兵が続きます！」



「陽動も出来んというのか！」
ハーディンはウルフの脇を抜け、見張り場へと急いだ。崩れた瓦礫の隙間から外の様子を窺う。
確かに騎馬が見える。だが数が少ない。わずかに三頭だ。そしてその後ろに数人の歩兵。
――恐らく斥候だろう。ならば、今しか機会はない。あの斥候を倒し、一気に我らが砦を脱出、敵の注意を引きつける。そしてその隙に、ニーナ王女と数名の兵が逆の方向に脱出。それしか手はあるまい。
そんなハーディンの脇にマリクが現れた。
「隊長。僕に出来ることはありませんか。僕が街で騒ぎを起こさなかったら、こんなことには……」
「何を言うんだ。どのみち避けられなかった事態だ。いや、それよりも、君に頼みがある。最初で最後の頼みになるだろうが」
「頼み？」
「我々は、今から全軍で砦を脱出する。うまく敵をおびき出せたら、君は王女を連れて逆の方向に脱出してくれ。頼む」
「ハーディン隊長。まさかあなたは、捨て石になろうとしているんじゃ」
「その、まさかさ。君の魔法の力は見せてもらった。あの力で、王女を守り抜いて欲しい」
ハーディンはしごく淡々とした口調で続けた。その声には、死を覚悟した者の独特の響きがある。
「断らないでくれ。これは冷静な判断だ。君の力は、恐らく私の部下のそれを遥かに上回るだろう。

だから君に頼むんだ。私が行くわけにはいかない。敵に顔が知れている」
「し、しかし」
「頼むマリク。もう時間がない。議論の余地はないんだ。ニーナ王女を連れ、マルス王子と合流してくれ」
　マリクは黙って諾いた。確かに良策を練っている暇はない。すでに敵兵は、わずかな距離にまで迫っている。一刻たりとも無駄には出来ない。マリクは再び瓦礫の隙間から外に目を向けた。敵兵の姿を目に焼き付けておこうと。
　三騎の騎馬兵が平原を悠然と進んでいる。背後には歩兵達。そこでマリクは、何かが空に浮かんでいるのに気付いた。白い鳥か。いや、違う。鳥にしては大きすぎる。しかもその白いものの上には、人が乗っているではないか。マリクは目を凝らした。それは白いペガサスだった。もはやその数もめっきり減り、ごく一部の高貴な騎士しか扱わないペガサスだった。空を自在に舞うペガサス騎兵。確かにそれは、斥候にうってつけの兵種だろう。しかし帝国軍本隊でないオレルアンの駐留軍ごときが、そのような貴重な兵力を斥候に用いるだろうか。
「ハーディン隊長」
「マリク、もう時間だ。急いでくれ」
「待って下さい。あれを、あのペガサスを」
「ペガサス？　そんな大層なものは、オレルアン駐留軍にはないはずだが」

「しかし、あれは」迫る敵の部隊を指さした。そして自分で指さした敵軍を見て、歓喜の声を上げた。ひどく懐かしい顔がそこにあったからだ。「まさか……」

「どうした、マリク」

「間違いない、マルスだ。あれはマルスだ。昔とちっとも変わっていない。マルス・ノア・アリティア王子だ！」

「マルス？　アリティアのマルス王子か！」

二人の会話を耳にして、居合わせた一同はどっと見張り場に押し寄せた。その中の一人、騎兵のビラクが喜びに満ちた声で叫ぶ。

「間違いありません。自分は昔、見聞を広めるためアリティアに赴いたことがあります。先頭の騎兵は、アリティア宮廷騎士団のジェイガン様です。あれは間違いなく、アリティアの戦士達です！」

「ニーナ王女、助かりましたぞ。マルス王子が来てくれました！」

ハーディンは佇むニーナに向かって声を張り上げた。アカネイア王家の血を引く最後の一人、ニーナ王女。彼女はどんな宝石も色あせるような、輝きに満ちた笑みを浮かべた。

「伝説の勇者アンリ。あなたの血に連なる者に会わせて頂き、私は感謝の言葉もありません」

そして両手を祈るように組み、静かに天を見上げた。

かくしてマルス軍は、アカネイア王家のニーナ王女、そしてオレルアン王国の残党軍と合流を果

たした。もちろん、マルスとマリクの感動の再会も成された。その後マルス軍は、敵の増援の到着の前に隠し砦を脱出。一気にオレルアン城を奪回するため、その城下に進撃を開始した。ニーナ王女奪取のため編成された追撃軍が、帰還する前の隙を突こうという目論見だ。これはドルーア帝国打倒を最終目標に掲げる、マルス軍の最初の城攻めとなる。

現在マルス軍の陣容は以下の通り。

聖騎士、ジェイガン。騎士、カイン。騎士、アベル。ペガサス騎兵、シーダ。戦士、マジ。戦士、バーツ。海賊、ダロス。傭兵、オグマ。剣士、ナバール。盗賊、ジュリアン。僧侶、レナ。騎士、ハーディン。騎士、ロシェ。騎士、ビラク。騎馬弓兵、ウルフ。騎馬弓兵、ザガロ。戦士、シーザ。戦士、ラディ。重装歩兵、ロジャー。魔導士、マリク。

これにマルスを加えれば、総勢二十一名の精鋭部隊となる。もちろん戦いには参加しないが、ニーナ王女の存在も忘れてはならない。そしてそのマルス軍が、オレルアン城解放に挑む。時にマルス・ノア・アリティア、十六歳と六カ月。タリスを旅だってから三カ月が経過していた。

# 第４章　激闘の果てに……

「南の門を越えられた。敵軍は、じきに三の堀も突破するぞ。投石器も役に立たん。白兵だ。白兵で応戦するしかない。とにかく、一人でも多くの兵を集めろ！」
「落ち着け。何がどうなっている。ここからだと、東の陣が燃えているようにしか見えんぞ。誰か見てこい！」
「お、おい。城下で市民達が暴動を起こしたって話、聞いたかよ？　それに捜索に出た、ムラク隊長の部隊もやられちまったらしい！」
「アリティア宮廷騎士団だ。いや、それだけでない。オレルアン騎馬隊の残党軍もだ。しかもな、しかも、あの剣皇ナバールが生きていたって話だぞ」
「眉唾だ。単なるデマだ」
「ったく、話にならん。伝令は？　急いで伝鳩を飛ばせ。残党軍掃討に出発した軍勢を呼び戻すんだ。あの部隊が帰ってこないと、この城にはまともな戦力はない！」
「間違いない。市民が武器を手に、城下のいたるところで暴動を起こしているらしい。しかも散発

ろうというんだ！」

「何でだ。この国を制圧した時、すべての武具は没収したはずだろうが。だ、だから王城の守備兵は数も少ないんじゃないかよ。話が違うぜ、それじゃ！」

「ここは商都だ。武器はどっからでも手に入る！」

「おお？　お、おい！　見ろ、囲みが突破されたぞ！」

「……あれが、アリティア残党軍。い、いや。自由アカネイア軍か」

「何もかもが手遅れだ。もう間に合うはずがない。この城は、じきに落ちる！」

まさしく電撃の速さであった。ハーディンらと合流を果たしたマルス軍は、一瞬の間も置かずにオレルアン城への進撃を開始した。うっそうと生い茂る西オレルアンの山林をくぐり抜け、王城の背後から奇襲をかける。常識的に考えれば、あまりに無謀な作戦だった。わずか二十名ほどの軍勢で、強固な王城を叩くなど。

しかしマルス軍にとって、ほかに選択の道はなかった。ニーナ姫を救出したとはいえ、敵の追撃隊は四方八方から迫っている。さらに時が経てば、近隣の国々からも増援が送られるだろう。今やこのアカネイア大陸の全土が、ドルーア帝国の支配下にあるのだから。

「窮鼠、猫を噛む。そんな諺が東方にあるそうだ。追い詰められた鼠は猫にも食らいつく。この言葉に倣おうと思う。ただし狙うのは猫じゃない。その猫の住処だ。帰る場所を失えば、猫は戦意を失う。やるのは今しかない。猫が鼠を探してうろつき回っている、今、この瞬間しか」

　時間はわずかに遡る。南の隠し砦で、マルスは皆の顔を見つめながらそう言い切った。敵の追撃隊の裏をかき、防備の手の薄くなった王城を一気に奪回しようというのだ。反対の声も確かにあった。だがハーディンの言葉が、皆の決意を促した。

「勝てます。我々しか知らぬ西の山道を使いましょう。そうすれば、城まで約二刻。一方、追撃隊が舞い戻るのに三刻半。一刻半の猶予があります。しかも元々は我らの城。そのすべてを熟知しております。強固な部分も、逆に、脆い部分も」

　躊躇している猶予はない。やるしかないのだ。ハーディンとその部下が先陣を切り、マルス軍は西の山道を疾風のごとく駆け抜けた。神速の機動こそが、この戦いの成否を握る。城攻めをしつつ追撃隊を迎え討つだけの余力は、今のマルス軍にない。ハーディンの言った通り、かっきり二刻後、マルス軍はオレルアン城を見おろす断崖の上にたどり着いた。ほとんどの兵力を追撃隊として放っているらしい。城を守る兵の数はまばらだ。ここまで来て引き返す事は出来ない。後は行くのみ。

　マルスは無言でレイピアを高く掲げた。進軍の雄叫びはない。だがマルス軍の戦士達は、定められた役割を果たすべくそれぞれの行動を開始した。オレルアン城攻略戦の幕開きである。

「とんだ失策だったな。しかし、まさか城攻めに回るとは思ってもみなかった。窮鼠、猫を噛む、か。ふふん、まんまと裏をかかれたわ」

どこかで火の手が上がったのか、通路はわずかに白煙に煙っている。男は間断なく聞こえる剣戟の音に耳を傾け、数歩後ろを歩いていた側近に訪ねた。「敵は何人と言った」

「情報が入り乱れておりますが、二十にも満たない数と」

「ほほう。二十か。たった二十か!」長々と伸びた見事な顎髭をさすりながら、男は不思議にうれしそうな口調で呟く。そして右手の覗き窓から、外の様子を窺った。「なるほど、この城のすべてを知り尽くしている。まず東門と南門を押さえ、外界との接触を断つ。そして密かに、背後の西の断崖から本隊が城内に突入するか。ふふん、かつてこの城にいた者ならではの戦法だ。ハーディンめ。もう少し早くに始末しておくべきだったか」

男の名はマリオネス。ドルーア帝国軍の参謀の一人で、オレルアン王国が侵略されて以後、国内とその近隣の統治を委任されている。だが、それも過去の事となりつつあった。今まさに彼の城は、かつての持ち主達に奪回されようとしている。

「市民達が蜂起したという噂もあるが、それは真か」

「はい。オレルアン騎馬隊の復活、そしてニーナ王女生存の噂を聞き、城を攻める反乱軍の動きに呼応するように……」

「ニーナ・ウォル・アカネイア。正アカネイア王家の血をひきし者。その存在だけで人心を動かす、

か」
「そんなことより、マリオネス様。いかがされます。このままだと、じきに敵は城内に侵入いたします。退路も塞がれているでしょう。何か手段は、手段は！」
側近は取り乱し、マリオネスに救いを求めるような目を向けた。このままでは、城に閉じ込められたまま自らの死を待つだけだ。側に居合わせた城内の守備兵も、マリオネスの命令を待っている。
「敵将は、アリティアのマルス王子、か」
「さ、左様ですが」
「皮肉だな。アリティアの血族が、ドルーア帝国打倒の反乱軍を率いるとは。それとも、これは定められた運命なのか」
「は？」
「いいや、何でもない。呼び戻した追撃隊が帰城するのに、どれくらい時間がかかる」
「一刻、いや、四分の三刻ほどかと」
「よかろう。儂とて、このままむざむざと殺られる訳にはいかん。残存部隊を再編。重装騎兵は、城内に入ろうとする敵の排除にあたらせろ。弓兵は王の間の守備に。最後の反撃の糸口を掴む。王の間に続く回廊が最後の防衛線だ。残存部隊の到着まで持ちこたえてみせろ。よいな！」
マリオネスは羽織ったマントを大きくたなびかせ、足早に王の間に向かった。その背後で守備兵

達は、直ちに各所に伝令を放つ作業に取りかかった。

ナバールの白刃から逃れられる者はいない。それはこの世に存在する、ありとあらゆる物を寸断する光芒の刃だ。か細い閃光が戦場で瞬くたびに、確実に敵兵の命が寸断されていく。手にした剣の切っ先からは血の滴がしたたり、一時たりとも、そのしたたりが止まる事はない。

「相当の手練だぞ、この男！」

「囲め、囲むんだ。輪形の構えを取れ。一斉にかかれば、何とでもなる！」

オレルアン城東門。一対のガーゴイルの彫像を頭頂に頂くその門を背後にし、ナバールは幽鬼のごとく立つ。異形の神、ガーゴイルも蒼ざめるほどの先鋭な殺気をたぎらせて。その周りを、長槍を手にした重装歩兵の一群が取り囲む。ナバールの俊敏な動作を、輪形の中に封じ込めようとしているのだ。

歩兵の手にした槍が、ことごとくナバールの心の臓に狙いを定める。同時に、歩兵達の瞳が鋭い眼光を放った。絶対の自信の現れだ。彼らは一滴の水も漏らさぬ強固な布陣を形成しつつ、徐々にその包囲の輪を狭めつつある。槍の長さは、優にナバールの身長の倍。自信を持って当然だ。この囲みを逃れるには、鳥か土竜にでも化身するよりない。もちろんナバールは、そのような幻術の類を持ち合わせていなかった。

「詰めッ！」歩兵の一人が叫んだ。それに呼応し、じりじりと、さらに囲みの輪は狭まっていく。

ナバールは微動だにしない。鞘に収まる愛剣に手をかけたまま、静かに瞳を閉じている。歩兵達は、そんな彼の姿に静かな恐怖を覚えた。
──何故だ。何故逃げようとしない。何故抵抗しようとしない。
計り知れない物に対する恐怖だ。そして恐怖は心の奥底に焦りを生む。
「で、でァァァッ！」歩兵の一人が、やおら長槍を突き出した。恐怖と焦燥に突き動かされたのだ。同じように他の歩兵も一斉に槍を突き出す。集団心理だ。穂先の放つ光が収斂した。
その瞬間、ナバールが消えた。目標を無くした槍の穂先は、互いにぶつかりあい甲高い金属音の悲鳴を上げる。と同時に、最初に槍を突き出した歩兵の肩口から火花のような鮮血がほとばしった。
「ば、馬鹿な？　どこだ奴はッ？」
ナバールは空中にあった。突き出された槍を踏み台にし、さながら不死鳥のように天高く舞い上がったのだ。そして降下しながら手近な歩兵の肩を寸断。斬り裂いた部位を軸とし、くるりと回転しながら着地した。
「二十二！」囲みを逃れたナバールがぼそりと呟く。
「……のれェェェッ！」
円の布陣を乱して歩兵が迫る。だがその突進は、あまりに無謀すぎた。ナバールは一陣の風となり、歩兵の一群の間をすり抜けた。すり抜けながら、確実に兵の腕を、腹を、足を切断していく。
「二十三、二十四、二十五、二十六！」雑草を刈り取るように剣を振りながら、ナバールは淡々と

した声で数を数え続けた。数える度に、斬られた兵が地に倒れ伏す。

「二十七、二十八！」

懐に飛び込まれては、自慢の長槍も邪魔な棒切れに過ぎなくなる。また岩壁のように分厚い鎧も、あらゆる物の〝目〟を瞬時に読み取り、その流れのまま剣を走らすナバールの剣技の前には、チーズか紙切れにも等しい。

「二十九！」数え終わると同時に、ナバールは剣を鞘に収めた。彼の背後には、声もなく地に崩れた八人の歩兵達がいる。

「さて、お次はどいつだ」

ぼそりと低い声で呟き、ナバールは周囲を見回した。探す必要はない。辺りには汗と血の臭気と、そしてナバールが手にかけた二十九人の兵の無様な姿しかなかった。

「これで東門の掃討は、終わったというわけか。意外に脆いな。ハーディンとやらの言う通りか」

オレルアン城には二つの大きな門が存在する。城と城下を繋ぐ東門、そして平原へと続く南門だ。それぞれの門は跳ね橋になっており、城内と外界の境界線となっている。

ハーディンがマルスに示唆した作戦は、まずこの二つの門を押さえることだった。そうすれば城内は完全に隔絶された空間となり、城下の治安軍を呼び戻すことも、また外部に伝令を出すことも出来なくなる。限られた数の兵が相手であれば、少数のマルス軍が勝利する可能性はぐっと高まる。

さらに城下に伝令の使者を送り、ニーナ姫生存と、今まさに城を奪回する戦いが始まった旨を市民に知らせる。不満のたまりたまった市民が決起するのは、火を見るより明らかだった。事実、ほどなく市民は独自に反乱軍を組織。街に駐屯する治安軍に牙を剥いた。この段階で作戦は、八分通り成功していた。後は、もともとハーディンらを捕らえに放った追撃隊が戻るまでに、完全に王城を奪回すればいいのだ。その王城の東門を押さえる任は、ナバールがたった一人で請け負った。

そしてもう一方の南門へも、これもまた、たった一人の男が放たれた。マルスと感動の再会を果たした、魔導士マリクだ。

マリクの刃は、その両の腕だ。

風の魔法エクスカリバー。それは光の魔法オーラ、電撃の魔法トロンなどと並ぶ最上級魔法の一つで、手のひと振りがそのまま大気の刃と化し、敵の鎧をガラスのように打ち砕く。マリクは魔道の国カダインで、その魔道書を受け継いだ。僧侶の法力が、聖なる力を封じ込めた〝杖〟の助力を得て行使されるように、魔導士の能力は〝魔道書〟に託されている。だが、ただ単に杖や魔道書を得たからといって、即それらの法力、魔力を使いこなせるという訳ではない。術に耐えうる強靭な精神と、その封じ込められた力を解放させるだけの技量が必要となる。

マリクはその両方を兼ね備えていた。だからこそ、禁呪（カダイン魔道学会により指定された、禁断の秘術）の範疇に含まれるエクスカリバーの携帯を許されたのだ。ドルーア帝国に加担する、

並みの魔導士とは訳が違う。
そんな並の魔導士が三人、オレルアン王城の南門でマリクに牙を剝く。城の防備にあたっていた魔法部隊だ。
「ふんッ、小僧が。我らの魔力の前にひざまずくがいい！」
「なまじ魔法を使えることが、仇になったようだな」
「焼け死ぬがいい。骨も残さず！」
三位一体。三つの魔導士は一つにまとまったかと思うとちりぢりに散開し、そしてまた集う。いわゆる〝影法師・幻惑の走技〟だ。先頭の一人を斬っても、続く二人目が襲いかかる。それを万一かわしても、三人目が止めを刺す。集団剣技の一つの頂点とも言うべき型だ。剣技をそのまま魔道の技に応用しているのだ。
「其の一、参る！」先頭を走る魔導士が、獲物を狙う狼のように跳躍した。
次の瞬間、その手のひらがかすかな光を放った。
——ファイアか！
予想違わず、マリクの眼前で炎が弾けた。大気を燃やす火炎の魔法〝ファイア〟だ。最も初歩的な術だが、魔法への抵抗力を持たない者には、一撃で致命傷にもなりうる。しかしマリクは、その炎を避けようともしなかった。
全身が炎に包まれる。が、マリクは火傷一つ負っていない。魔力を使う者は、同時に魔力に耐え

うる術をも身に付ける。柔術を学ぶ者が、技の受け身を修得するように。
「やりおる。しかし、それしきで止めを刺せるとは思っておらんわッ！　其の二、参る！」
一人目の魔導士の影の中から、二人目が出現した。今度は炎ではない。天を差す人差し指が閃光の稲妻を発した。電撃の魔法〝サンダー〟だ。これもまた初歩の魔法だが、ファイアよりも射程が長く、不意打ちに効果を発揮する。
中空に突如現れた雷が、マリクの頭上に降り注いだ。しかし、またしてもマリクは避けようとしない。避雷針のごとく、その全身で稲妻を受けた。そして雷光を脱ぎ捨てるように両腕を広げ、続く三人目の魔導士に向かって叫んだ。
「この程度か、帝国軍魔法部隊の実力は！」
「抜かせ。氷の魔法〝ブリザー〟の技、とくと味わうがいい！　……其の三、参る！」
「遅い！」マリクが右手を振った。たちまち腕から大気の剣が放たれる。
瞬間の刃エクスカリバーだ。魔導士の術は間に合わない。仮に間にあっていたとしても、マリクには大したダメージを与えられなかったろう。
「これが幻の、エク……」驚愕の表情を浮かべたまま、その首が飛んだ。疾風の刃先に切断されたのだ。毬のように、宙を転がる首が呻く。「……スカリバー」
切断された首は残された二人の魔導士の足元に転がった。わずかにマリクは嫌悪の表情を見せる。
――身じろぎしなければ、急所をはずしたものを。

あえて手加減したマリクだったが、魔導士のあがきが自らの死を招いた。が、それは逆に残った二人の魔導士を救う結果になった。

「馬鹿な、あの力を伝承した者がいたとは。我々が、我々の力でかなうはずがない」

「信じられん。エクスカリバー。実在する魔法だったとは」

マリクの持つ魔法がエクスカリバーと知った魔導士は、恐怖におののき敗走に転じた。先ほどの自信はどこに行ったのか、無様にうろたえ走り去る。それを見て、マリクはわずかに微笑んだ。いかにもあっけない幕切れだったが、ともかく南門の制圧は終わったのだ。

東門と南門が封鎖され、城内は完全に外界と孤立した形になった。だがそれでも、アカネイア最大の商都オレルアンの王城である。その敷地の広さは、島国の小国タリスの城の比ではない。

シーダは空中にあった。そして眼下に広がるオレルアン城の全容を一望する。

「東と南で動く者は、ないか。ナバールとマリク、どうやら成功したみたいね」呟きながら、シーダは手綱を振るい高度をわずかに落とした。

天空の騎士ペガサスナイトは、あらゆる地形を無視して移動できるその機動力と、抜群の移動力によって、軍団の斥候、偵察行の任務に就く。しかし今では肝心のペガサスの個体数が減り、戦場でその姿を見るのも稀になった。さらにペガサスがいたとしても、それを乗りこなすには、天賦の才とでも言うべき特殊な能力が必要となる。崇高な幻獣ペガサスは、心の通じない者に決してなつ

こうとしない。仮に強引にまたがったとしても、空中で振り落とされるのが落ちだ。そしてペガサスと心で会話できるその能力は、婚儀を済ましていない清らかな乙女だけが持てるという。伝承だ。しかし実際ペガサスナイトとして活躍している騎士達は、皆、十代の若い乙女である。例を挙げよう。マケドニア王国の〝白騎士団〟は、大陸で唯一の天空騎士団として知られるが、全員が未婚の少女達で構成されている。そしてまたタリスの王女シーダも、十五になったばかりだ。

――手はずからいくと、そろそろマルス達が本陣に攻め入る頃ね。

心中で城攻めの手順を想起しながら、シーダはその薄い桜色の唇をとがらせた。十五の娘らしい、かわいげな仕草だ。

――なのに私はこうして空から敵の動きを監視するだけ、か。まったく、何のための剣なんだか。

ため息まじりに、腰に差した小振りの剣にそっと手をあてる。タリスを旅立って以来、ろくに抜いてもいない。ペガサスを操るシーダは、常に斥候の役目を任されてきた。敵の姿を見つけ、それをマルスらに報せればいい。後は男達が片を付けてくれる。危険の少ない役割ではあったが、シーダはそれを密かに不満に思っていた。自分の生まれ育った城を焼かれ、母を、そして父を殺められた。その憤激を決意に変え、マルスと共に旅立ったのだが、

「みんなが敵と組み合っているこの時にも、のうのうと空を舞うだけ。これじゃあ、いつまでたっても父様の、母様の仇なんて討てやしない……」

そんな焦燥の念に取り付かれていた。



もちろん頭では理解している。ペガサスナイトにしか出来ない空中からの偵察。それが今まで、どれほどマルスたちを助けたか。タリスと大陸を結ぶ海上で、ガルダの港町で、デビルマウンテンで、そしてこのオレルアンの平原で。シーダの活躍なくして、数で遥かに勝る敵軍を打ち破ることは、およそ成し得なかっただろう。それは判る。しかし頭では納得出来ても、感情が認めようとしない。軍団の中にあって、自分だけが取り残されているような不安を抱く。人殺しがしたい訳ではないが、かと言って、ただ戦いを見守るだけでは満足出来ない。少なくとも、アカネイアを守るための戦いに身を投じているという、実感めいたものが欲しかった。

「本陣の、入口か。ハーディン隊長とオレルアン騎馬隊。それに、レナ、さん」

幼い頃からペガサスナイトとしての鍛錬を積んだシーダは、野に住む鳥にも負けぬほどの遠視術を身に付けている。その緑の宝石のような瞳が、下方で敵兵と戦う味方の存在を捕らえた。

「ひるむな！　敵を分散させろ。マルス王子らが王の間に取り付くまで、ここで踏んばるんだ！」

「ハーディン隊長。右翼から新手。約二十！」

「チッ！　ロシェ、ビラク。壁を構築しろ。シーザ、ラディ、ロジャーは、バーツ殿と共に前進。いいか、我らの城だ。我々の手で奪回するんだ。オレルアン兵の底意地を見せてくれ！」

「お任せを！」

ハーディン率いる騎馬隊が、本陣の入口付近で重装歩兵と白兵戦を演じている。マルスの姿はない。恐らく何人かの兵を引き連れ、すでに城内に突入したらしい。ハーディンは敵兵力の集中を防

ぐため、入口付近で派手に暴れているのだ。そしてレナは、入口の脇にそびえる巨大な門柱の影で、怪我人の手当てにあたっていた。こんな時こそ、彼女の僧侶としての力が大いに役立つ。〝治癒の杖〟に封印された法力は、よほどの傷でなければたちどころに完治させてしまう。もちろんそれも、神の下で修養を積んだレナの精神力あってのことだ。

「レナさん、あんな戦場の真ん中で……」

傷を負った兵が、仲間にかつがれレナの側にまで運ばれる。戦士のバーツだ。レナが杖をかざすと、患部に乳白色の光が点る。その光は患部全体を包み込み、見る見るうちに傷を閉ざしていく。後には、こびりついた赤茶けた血痕が残るだけだ。

「そうか。レナさんも、ちゃんとみんなと一緒に戦ってるんだ」

シーダはそんなレナを、心底うらやましく思った。自分は今、どこで何をしている。ただ阿呆鳥みたいに宙を舞っているだけではないか。かと言って、与えられた役目を放棄する訳にはいかない。

焦燥は怒りに変わっていった。何に腹を立てていたのか。それはかすかに身震いしている自分に対してだった。目の前で城攻めが行われている。攻めているのは仲間達だが、それでもタリス城炎上の惨劇を思い出さずにはいられない。わずか三カ月ほど前の事だ。思い出すなというのが無理な話だろう。しかし自分は、ついさっきまで両親の仇を討ちたいと思っていたのではなかったか。ドルーア帝国を打倒したいと切望していたのではなかったか。

――なのに、何で震えるの。何が怖いの。こんな、こんな有様で、父様の仇なんて、討てるはず

がないじゃない。そうよ、少しは剣の腕にも自信はある。ジェイガン様にも剣技を教わった。でも、でも怖いのは何で？

押さえきれない恐怖感、激しい焦燥の念、自己への憤り、それらが複雑に入り交じった心境で、シーダは呆然と戦いを見つめるだけだった。

——単に見張りとしてだけの存在なら、いない方がいいのかも知れない。タリスに帰って、城の再建に力を尽くした方がいいのかもしれない。

そんな脈絡のないことを考えていた矢先だった。シーダはレナの背後から忍び寄る、一人の敵兵の姿に気付いた。

——もしかしたら……。

疑う余地はない。僧侶の存在に気付いた敵兵が、それを亡きものにしようとしているのだ。

当のレナは気付いていない。一心不乱に、傷を負った騎馬弓兵ザガロを治療している。もはや敵兵は間近に迫っていた。少し手を伸ばせば、レナを背中から寸断出来る距離にまで。

「レナさん！　レナ！」

叫んでも、周囲の剣の響きと怒声に阻まれ、聞こえない。それに気付いたシーダは、ためらいもなくペガサスの脇腹を一蹴した。同時に腰から剣を引き抜く。タリスを旅立って以来、ようやく明確な意志を持って抜いた剣だった。

——レナさんを助けなければ！

シーダは天空から駆け降りる、一人の戦士に変わった。

「さ、これでもう大丈夫です」
レナは、ザガロの肩を軽く叩いた。その額には玉のような汗が浮かんでいる。
「大丈夫ですか、レナさん。魔法のことはよく知りませんが、これだけたて続けに力を使っちゃあ……」
ザガロが遠慮がちに問う。レナは花のような笑みを浮かべて見せた。しかしその笑顔の向こうにありありと浮かぶ疲労の色は、隠しようがない。
「いいえ。私に出来るのは、この程度ですから。それにこれは、魔法じゃなくて法力ですよ」
「あ、そうでしたか。こいつは、どうも」
ぽりぽりと、ザガロはばつが悪そうに頭を掻く。レナは再度笑ってみせた。その笑顔の後ろで何かが動く。ザガロは戦慄した。敵兵だ。戦斧を構え、レナの頭蓋を両断しようとしている。
「危ない、レナさん！」
「え？」
間に合わない。腰に差した剣に手を伸ばしながらも、ザガロは絶望に打ち震えた。
「伏せて！」頭上から女の声が響く。シーダだ。
ペガサスにまたがったシーダがまっしぐらに降下してくる。目にも止まらぬ速さとはこのことだ

ろう。レナの背後の敵兵に突進。手にした剣で斬りかかった。
　ただの一撃ではない。ペガサスの降下速度が加算されている。シーダの剣は、敵兵の腹部をばっさりと斬り裂いた。声とも音ともとれぬ響きと共に、敵が倒れる。その時になって、ようやくレナは自分の身に危険が迫っていたことを知った。それほどに、シーダの突進は素早かった。
「大丈夫ですか、レナさん」ザガロが駆け寄る。しかしレナは至って冷静だった。
「私は平気です。それより、シーダさんが」
　シーダは、血の海の中で痙攣している敵兵を見つめながら、何やらぶつぶつと呟いている。その顔は氷雪よりも白く、剣を握りしめたままの手は小刻みに震えている。
　シーダはこの時、生まれて初めて人を殺めたのだ。いかに剣技に長けているとは言っても、幼さを残した十五の娘である。自らの行為に恐怖せずにはいられない。
「シーダさん、しっかりして！」
「え？　あ、レナさん。あ、ああ。大丈夫、だから」
「顔色が悪いわ。それに……」レナはシーダの手をそっと握る。「……こんなに冷たい」
「え、ええ。でも、レナさん。よかった、無事だったのね。よかった。本当に」
「そう、そうよシーダ。あなたのお陰だわ」
「私の？」
　惚けるシーダの脇から、馬にまたがったハーディンが近付いて来た。「どうした？」

代わって答えたのはサガロだ。「レナさんが危ないところでした。しかし、マークさんが見事に敵を片づけてくれましたよ」
「そうか」ハーディンは兵の死体をちらりと見てから、レナとシーダに向き直った。「ここはもう何とかなりそうだ。残った敵も、すでに戦闘意欲をなくしている。で、シーダ様。東門と南門の状況はどうでした」
「あ、はい。二つとも、すでに敵の姿はありません。ナバールとマリクの奇襲は成功したようです。門もじきに閉ざされるでしょう」
「そうですか。良かった」力強く諾き、残敵の掃討に向かおうとしている味方に声を放った。「聞いたか、タリスのシーダ王女が貴重な情報を届けてくれた。南門と東門の制圧は成功した。これ以上の敵は、もう現れない。残るは城内本陣の敵だけだ！」
一同の歓喜の声が周囲に満ちた。皆、手にした剣や槍、斧を振り上げ明るい表情を見せる。同じようにハーディンも銀の剣をかざしてから、再びシーダに向き直った。
「あなたのもたらしてくれた情報が、疲れきった兵にみなぎる生気を与えてくれましたぞ」
「私の、ですか？」
「そうです。さ、行きましょう。本陣の攻略は、マルス殿におまかせしましょう。我々は残敵の掃討に！」
「判りました！」

シーダはハーディンの言葉に力一杯諾いた。と同時に、彼女のまたがるペガサスが、いかにもうれしそうな声で嘶いた。

オレルアン城本陣は〝王の間〟が存在する塔を中心にした、円形の大回廊として建築されている。本陣の中心に攻め入ろうとする者は、果てしなく連なる螺旋の回廊を進むしかない。そしてその回廊の至る所に、侵入者を除去するための罠が隠されており、また防備の兵のための拠点も用意されている。

「あらかた塔内の敵兵は片づけたようですな。物音一つしない。外での剣戟の音が消えました。恐らく、ハーディン公の部隊が敵の排除に成功したのでしょう」

「僕らも急ごう。流れに逆らわない方がいい。このまま一気に本陣の最頂部、王の間を攻略する。そこに敵将マリオネスがいるはずだ！」

「はい、マルス様！」

マルス、ジェイガンの背後には、敵兵の遺体が積み重なっている。彼ら二人を中心とした突撃隊は、すでに本陣の奥深くへと潜入していた。

「マルス様。ここから先には侵入者用の罠はありません。が、通路の幅が狭まります。お気を付けを！」

「判った」

マルスに注意を促したのは、騎馬弓兵のウルフだった。ハーディン隊長の指示により、マルスらの水先案内を請け負ったのだ。
「まったく、それにしても何という長い回廊か」
「ふふ。さすがのジェイガンも、馬から降りると息が切れるかい？」
「何をおっしゃいます、マルス王子。いささか老いたとは言え、まだまだこの両の脚は、野を駆ける大羚羊にも負けない健脚を保っておりますぞ」
「けど、羚羊ほど細くはなさそうだな」
「お、王子！」
「冗談、冗談。さ、行こう！」
そんな二人のやりとりを聞き、背後に続くウルフ、オグマ、ダロスの三人はくっくと忍び笑いを漏らした。そしてジェイガンは、頬をわずかに緩める。
――タリスを旅立ってわずか三カ月というのに、よくここまで成長された。敵地の中にあって恐怖に押し潰されず、なおかつ配下の者の緊張も解きほぐすとは。
ジェイガンの買い被りではない。現にレイピアを握るマルスの右手のひらは、蠟燭のように白くなっている。緊張に負けまいと、万力のような力で柄を握りしめているためだ。先の冗談が、ただの暢気から発せられたものでないと判る。
――マルス様がアリティア国王子としての役割に目覚め、そしてニーナ王女も救出された。この

ままいけば、ドルーア帝国打倒も夢ではあるまい。
ジェイガンは、心無しか以前より逞しく見えるマルスの背中を見ながら、回廊を駆けて行った。
重々しい足音を石造りの回廊に刻みながら、やがて一行は広々とした広間に辿り着いた。王の間の存在する塔にしては、えらく無愛想な造りの広間だった。
四方を石壁で囲まれ、装飾的な物は一つとしてない。天井近い壁に、明かり取りのための細い隙間があるだけだ。薄暗い広間のそこかしこに、木箱や石棺がうず高く積まれている。
「この広間は、いったい?」
「オレルアン城はもともと城塞として建築されました。増築を繰り返してここまでの規模になったのですが、この王の間の存在する塔は、建築当時のままの雰囲気を保っているのです。ここは昔、籠城の際に食糧や財宝を蓄えておくための倉庫でした。今でも万一に備え、昔のままに残してあるのです」
ウルフの説明を聞きながら、マルスは広間をぐるりと見回した。
広い。とても塔の中とは思えないほどの大きさだ。それこそ弓の練習でも出来そうなほどに。
「……ってことは、この広間にある木箱には、いろんなお宝が隠されているってことスね！」
「ぬッ!?」
背後に、いつの間にか見慣れぬ男が立っている。ウルフは反射的に剣先をその男に向けた。男は大げさな動作で飛びずさり、両手を振って武器を持っていないことを示した。

「あ、危ねえ危ねえ！　へへ、味方に斬られたんじゃ、洒落にもならねえ」
「お、お前、いつの間に！」マルスが驚くのも無理はない。いつの間にか彼らの背後に、盗賊のジュリアンが立っていたのだ。
「ジュリアン、お前、ちゃんと自分の任務はこなしたんだろうな！」
険しい顔でジェイガンが詰問する。
「そりゃないでしょ、ジェイガンさん。ちゃんと城下町に行って宣伝して来ましたよ。ニーナ王女は生きていた。アリティアとオレルアンの残党軍が、今まさに城攻めを開始したってね。だからこそ、市民が一斉に蜂起したんじゃないですか。今ごろ街は大騒ぎですよ。市民全員が反乱軍に早変わりですよ。いや、しかし大したもんですな。どの家も、みんな武器を隠し持ってたらしい。さすがに歩哨たちも、その数に押されて風前の灯火って感じですよ」
「オレルアンは古くから交通の要所と発展して来たが、その分、他国からの侵略を受けやすかったという歴史がある。そのため市民達も、いざという時のために護衛用の武器を隠し持っているのだ」
ウルフの言葉に、ジュリアンは大げさに驚いて見せた。
「へええ。でも、ま、この俺の宣伝の仕方がうまかったんでしょうねえ」
「馬鹿言え。どうせ、どさくさに紛れて金目の物でも漁ってたんだろうが」
「よく判りましたね、見て下さい！」ジュリアンは肩に担いだ布袋から、種々様々な宝石、刀剣の類を取り出して見せた。「いやあ、実はこの街に昔の相棒がいましてね。リカードっつうんですが、

そいつも手伝ってくれまして。ああッ？　……え？　何するんですかい！」
ジュリアンの手から、ジェイガンは布袋をむしり取った。「こいつは街の人々の貴重な財産だ。ひとまず、預かっておくぞ」
「な、何を言ってんだ。この俺の正当な稼ぎじゃねえかよ！」
「その話は、後でな」
「き、きったねー！」
「うぬッ!?」
「へ？」
広間の奥で影が動いた。続いて、かすかに何かが空をかすめる音。矢だ。ジェイガンは稲妻の速さでその矢を叩き落とした。
「敵だ！　待ち伏せだぞ！」
マルスの叫びに、ジュリアンを除く全員が一斉に身構えた。広間の奥の木箱の陰から、石棺の中から、敵兵がわらわらと姿を現す。その様は、まるで墓場から悪霊が湧き出るようにも見えた。
「気を付けろ。こいつら、今までの雑兵とは訳が違うぞ。精鋭だ。殺気を完全に封じて待ち伏せが出来るほどの連中だ」
「な、な、なんてこったい！」
「ジュリアン、その辺の木箱の隅にでも隠れていろ！」

「か、勘弁してくれよ」
「……来るぞ！」
敵兵は物も言わず、足音すらさせずに近付いて来た。甲冑を纏った騎兵。全身鎧を着込んだ重装歩兵。ローブ姿の魔導士。種々雑多な顔ぶれだ。選り抜きの混成部隊と言ったところか。
人数は十一。しかし開放されたすさまじい殺気は、その数十倍の人数がいるかのような錯覚すら抱かせる。先頭にいた傭兵の一撃が戦いの火蓋を切った。狙いはジェイガンだ。速い。わずかに身を反らせ、ジェイガンは自らの剣で敵の猛攻を受け止めた。
「ぬ、うッ！」
両者はそのまま鍔迫り合いに転じた。一進一退。どちらも微動だにしない。
「く、そっ！」
ジェイガンは渾身の力で剣を押し切り、その勢いで相手を跳ね飛ばした。しかし敵兵は猫のようにくるりと空中で一回転し、木箱の上に見事な着地を決めた。まさしく猫だ。つりあがったその目が、闇の中できらりと光る。
——強い！
ジェイガンは心中で呻いた。すでに周囲では、敵味方が入り乱れての乱戦が始まっている。しかしこちらは敵の半数。しかも相手はかなりの熟達者だ。
「こいつら、速い！　捕らえきれないぞ！」

「退がるな、思う壷だぞ！」
「だが、これほどの斬撃を浴びせられちゃ……」
ダロス、ウルフの二人が押されている。どちらも腕の立つ兵には違いないが、片や海賊、片や騎馬弓兵。船上でもなく、また馬もなく、本来の実力を出しきれていない。マルスと傭兵のオグマは互角の戦いを演じているものの、ダロスらの援護に回らねばならぬという不利な条件がある。
——まずいな、このままでは。
ジェイガンが心中で呟いたその時だった。
「よそ見をしていては、いかんな……」敵の傭兵が初めて口を開いた。鋭い猛撃と共に。
ジェイガンはそれをすれすれのところでかわし、続いて大きくしゃがみ込んだ。
「うぬ？」
敵兵にはジェイガンの行動が理解出来なかった。敵の目前でしゃがみ込んで何の利がある。ありはしない。止めを刺そうと、剣を振り降ろした。刹那、ジェイガンはバネのように体を伸ばした。意表を突かれた敵の剣先は、ジェイガンの剣にはね上げられ、天を差す格好となった。懐ががら空きだ。一方ジェイガンは、大上段の構えを取っている。
「その技!?　天一流か！」
「遅いっ！」ジェイガンの放った渾身の一撃が、敵兵の頭蓋をかち割る。天一流瞬撃の流派、その秘技・仁王の剣だ。

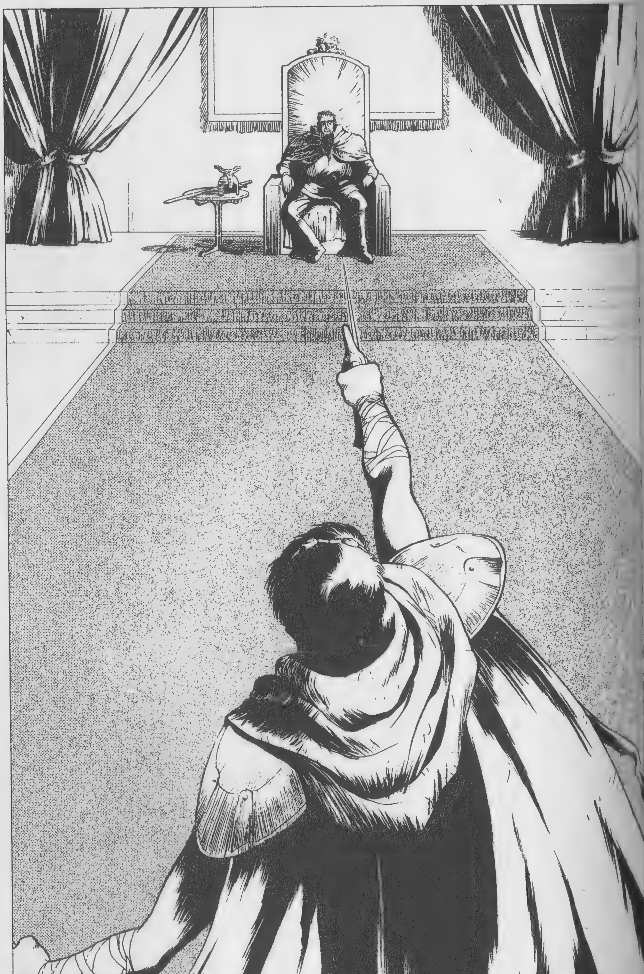
「マルス様！」ジェイガンは、敵兵が床に倒れるのも待たずに叫んだ。「マルス様、ここは我々にまかせて、王の間に向かって下さい！」
「何だって!?」敵兵の追撃を躱しつつ、マルスはジェイガンに問い返す。
「王の間にお早く。そして敵将に止めを刺すのです！」
「しかし、今この場を離れたら」
「何とかします。お急ぎを！」
叫ぶジェイガンの背後から、ローブをなびかせた魔導士が迫る。その両手より白い煙が吐き出された。氷結の魔法ブリザー。まともに喰らえば五臓六腑を凍らされ、瞬時に絶命する強烈な氷霧だ。
「喰らうかっ！」襲いかかった白煙を、ジェイガンはすんでのところで躱しつつ突進。頭から突っこむようにして魔導士へと向かう。
「血も凍らせてやる」
「撃たせん！」
両者共、持てる力のすべてをもって次の攻撃を放った。が、わずかにジェイガンの方が速かった。魔導士は突き出した両腕を切断され、さらに腹部に止めの一閃を喰らった。
「マルス様。このままでは埒があきません。恐らく敵は、ここで我々を足止めし、時間稼ぎをする腹づもり」
「時間、稼ぎ？」

すでにマルスも、挟撃していた二人の傭兵のうち一人を片づけている。
「いかにも。隊の帰城を待っているのです！」
「な、ならばジェイガンが敵将を！」
「なりませぬ。亡国アリティアの王子が敵将を討ってこそ、この戦いの意義が生まれるのです。ご理解を」
　この戦いは、マルス王子率いる反乱軍の存在を、乱世の人界に知らしめる大いなる第一歩である。正アカネイア王家のニーナ王女の名の下に、僅かな数の反乱軍がオレルアンの占領軍を打ち破る。それだけで圧政に苦しむ人々への光明になるし、さらに噂が巷間を駆けめぐれば、続々と有志が馳せ参じることも考えられる。現にアリティア城下の市民達は、武器を手に立ち上がったではないか。
「行ってください、マルス様！」
「マルス王子！」
「敵将マリオネスを、そのレイピアの錆として下さい！」
　ウルフ、ダロス、オグマが口々に叫ぶ。皆、敵と必死に戦いながら、マルスに期待の色の浮かんだ瞳を向けている。
「判った。この場はまかせる！」
　マルスがようやく決意した。敵兵の目前でレイピアを振り抜く。その勢いにたじろぎ、敵が後ずさる。マルスはそれを機に、石の床を蹴り大きく跳躍した。虎のような力強さで、鼠のような素早

さて、マルスはジェイガンの背後に着地した。「後はまかせる！」
「マルス様、敵将を見たら、何があっても躊躇されるな。情けは無用。よいですな」
「判った」
「御武運を！」
マルスは踵を返して上へ登る階段を目指した。
その背後から届くジェイガンの叫びが、細い回廊に響きわたった。
「有象無象ども。貴様らの相手はこのアリティア王国宮廷騎士団、右翼隊長ジェイガンが請け負う！」

マルスがたどり着いた先は、大理石で作られた白堊の広間だった。
本陣最上階。オレルアン国王の間である。一国の王の間というのに、きらびやかな装飾の類は何一つない。実用本位に徹した作りだ。壁面には、城内を見渡す大窓と、差し込む光を和らげる白い大布。また別の壁には、オレルアン王国の紋章を施した国旗。そして簡素でありながら気品の漂う調度品は、かつてこの部屋の主だった者の趣味の良さを窺わせた。
亡きオレルアン国王。今、それに代わって玉座に悠然と座しているのは、侵略軍の将軍マリオネスだった。
マリオネスとマルスは、しばし無言で互いを見据えた。広間には、他に誰一人として存在しない。

最初に口を開いたのは、マルスの方だった。
「……マリオネス将軍、ですね」
「いかにも。私がマリオネスだ」
「アリティア国王子、マルス・ノア・アリティア。アカネイアの万民のため、その命を貰い受けに参りました」
すらりと鞘からレイピアを抜く。その細い刀身が、かすかな蒼白い光を放った。
「待たれよ、マルス王子。貴公と話がしたい」
「あいにく私は、その必要を感じておりません。お覚悟を！」
レイピアの剣先を、マリオネスの眉間にぴたりと向けた。青眼の構え。この時、すでにマリオネスの命はマルスの手の中にあった。間合いは十歩分。マルスの俊敏な斬撃をもってすれば、瞬きの間隙も与えずその首をはねることが出来よう。だが、
「そなたの父コーネリアス王は、戦場にあっても情けを失わぬ、真の武人だったと伝え聞く。その子息が、末期の一言すら聞けぬ、と言うか」
父の名を出され、マルスの心は僅かに揺れた。
「…………」
「いかがか？」
「判った。聞こう」



どのみち敵になす術はない。見たところ、帯剣もしていない。その気になればいつでも止めを刺せる。マルスはゆっくりと剣先を下げた。そして深く、大きくため息をつく。
「さあ、マリオネス将軍。聞かせてもらおうか。末期の一言とやらを」
「いや、聞くのは私の方だよ」
「何？」
「そなたの断末魔の声を、な」
マリオネスの顔が不気味にひきつった。悪魔のような残忍な笑みだ。同時に、壁に掛けられた大布の後ろから、国旗の向こうから、数人の弓兵が姿を現す。手には銀色の弓。張りつめた弦にすえられた矢は、ぴたりとマルスの胸に狙いを定められていた。
「!!」
いかにマルスといえど、複数の弓兵を同時に斬り倒すことは不可能だ。
目眩にも似た混濁した意識の底で、マルスは自らの甘さを悔いた。
――油断、か。
幾つもの弦が同時に唸った。不思議に、放たれた矢は、まるで蛞蝓の歩みのように緩慢に見えた。
……その時。巨大な壁がマルスの眼前に出現した。放たれた無数の矢が、壁に突き刺さる。音は一つ。しかし刺さった矢は五本。寸分のずれもない同時射撃だった。
「う、ぐッ」

低い、くぐもった声で壁が唸った。それは壁ではない。人だ。鎧を纏った人だ。
「ジェ、イ、ガン？」
マルスは我が目を疑った。突如現れた壁。今まさに床に崩れようとしている壁。それはまさしくジェイガンだった。
「ジェイガン！」
「御無事、でした、か。マルス様」
胸に刺さった五本の矢は、鎧を貫き、さらにその奥の屈強な肉体をも射抜いていた。矢を伝わり、真紅の鮮血が白い床にしたたり落ちる。
「ジェイガン、何故だ。何故！」
「……マ、ルス様。言った、はずです。迷うことなく、お斬りなさい。残虐に、なりきる、強靭な、精神を、お持ちなさい……」
ジェイガンの瞳から、徐々に生気が失われていく。床の血だまりが広がるごとに、確実に命の光が消えていく。どうすることも出来ない。ジェイガンの瞳に向かって叫び続けるだけだ。
「済まない、ジェイガン。また、また命を、僕の命を！」
「なんの、この程度の……。マルス様、後は、頼み、ましたぞ……」
「しっかりしてくれ、お願いだ！」
「…………」

「ジェイガン！」
「コーネリアス王、御許、に」
「!!」
そのままジェイガンは、二度と口を開くことはなかった。ついに生命という主を失ったその瞳は、遥か未来を見つめるように天を睨み続けるだけだ。口元には微かな笑みが浮かんでいた。それはなすべきことを行った者のみに許された、満ち足りた、充足と安堵の笑みだった。
「何で、こんな……」
これほどあっけない物なのか。無敵を謳われたアリティア宮廷騎士団、右翼隊長。鋼の肉体を持った不敗の聖騎士。それが今、胸に五本の矢を受けて床に倒れ伏している。祖国アリティアを遠く離れた、異国の王城で。
「……ジェイ、ガン」
マルスの呟きに重なるようにして、マリオネスの罵声が飛んだ。「しとめろ！　矢を放て！　矢を！」
マルスはすっくと立ち上がり、レイピアを天高くかざした。
いや、そこにいるのはマルスではない。王子としての気品も、十六の少年としての無邪気さも捨て去った、殺意に満ちた一人の戦士だ。両の目を血走らせ、獲物に牙を剝く一匹の獰猛な野獣だ。
野獣に言葉はない。無言のまま跳躍する。次いで、鬼神の速さで弓兵へと突進した。

「ひッ！」
弦を引く間も与えない。手にしたレイピアが唸ると、弓兵の体は左右に分かたれた。返す刀で背後の弓兵をも切断。さらにレイピアを手前に引きながら、その柄で三人目の弓兵の頭を叩き割った。
一瞬にして弓兵三人分の死骸が床に転がる。天一流の奥義にも、このような技は存在しない。野獣と化したマルスは、ただ自らの殺意の赴くままに剣を振るうだけだ。
背後で弦が唸った。残された二人の弓兵が矢を放ったのだ。が、それは徒労に終わった。すでにマルスの姿はそこにない。彼らの真後ろだ。
「う!?」「あ！」死の前に、それぞれ一語だけ遺言を残すことが許された。
次の瞬間には、二人の弓兵は同時に斬り捨てられている。
「ま、待て！」
護衛の弓兵が残らず打ち倒されたのを見て、マリオネスは懇願するように床にひざまずいた。命乞いのつもりだったのだろうか。どのみち、今となっては判らない。マルスは何のためらいもなくマリオネスの首を斬り飛ばした。この世の誰の目にも捕らえることの出来ない瞬間の斬撃で。
白い床に赤い帯を残しながら、マリオネスの首が転がる。この瞬間、オレルアン城攻略戦は完遂された。しかし今のマルスに、そのような実感などは微塵もなかった。あるのはただ、果てしない疲労感と、そして挫折感だけだった。

ハーディンを初めとした兵達は、皆、歓喜の叫びを上げた。
マリオネス将軍戦死の報を、駆け降りてきたジュリアンから聞き受けたのだ。
「よし、後は城の尖塔に我が国の国旗を掲げる。城下からも一望出来るはずだ。帰城する敵軍からも見えるだろう。その時、奴らがどんな顔をするか、今から見物だな」
血糊の付いた剣を、ゆっくりと鞘に収める。他の者も同じように剣を収め、また槍の穂先を地に降ろした。戦いはひとまずの決着を見たのだ。ハーディンはそびえ立つ王城の尖塔をまぶしげに見上げる。城は奪回され、亡き王の仇も討てた。わずか二十名ほどの反乱軍が、一国を鎮圧するドルーアの派遣軍を打ち破ったのだ。その感慨は、とても言葉で言い表せるものではない。
「やり遂げたな、我々の力で」
その時、頭上で城内の様子を監視していたシーダが舞い降りてきた。ペガサスの白い羽毛が周囲に舞う。
「ね、ジュリアン。マルスは、マルスは!?」不安と期待の入り交じった表情で、シーダはジュリアンに問う。
「心配はないですぜ。そうそう、驚かないで下さい。なんと敵将マリオネスに止めを刺したのは、マルス王子なんですからね！」
「良かった！」
シーダは百合のような笑みを浮かべ、深く大きな吐息をついた。上気した頬は、紅を差したかの

ように紅い。

「そうだったか、マルス王子が」

「ええ。最上階の真っ赤な部屋で、手にしたレイピアが一閃！　ずばっとマリオネスをぶったぎった！」

「ちょっと待った。王の間は、白い大理石のはずだが」口を差し挟んだのは、騎馬弓兵のザガロだ。疑わしい眼差しをジュリアンに向ける。

「おいおい、本当にちゃんと見てきたんだろうな？」

「あ、いや、実は俺が王の間に着いた時にゃ、すでに決着はついてたんで……」

「やれやれ……」

「いやいや、早く報せなきゃっと思って、急いで駆け降りて来たんですよ。少しはほめてくれたっていいじゃないスか！」

ハーディンは満面に笑みをたたえながら、あやすようにジュリアンに言った。「判った判った。じゃあ、王子以下、全員が無事なんだな」

「ええ、そりゃもう！」

ジュリアンは知らない。血で染め抜かれた王の間の片隅に、ジェイガンの遺体があったことを。

「しかしマルス王子も、意外に情に脆いっていうのか、感激屋なんですねえ、シーダさん」

「え、何で？」

「いやね、王の間に入った時、マルス王子は呆然（ぼうぜん）と立ち尽くしてたんですが、その肩が微（かす）かに震（ふる）えていたんですよ。遠慮して声はかけませんでしたが。間違いない。ありゃ、泣いてたんですよ。ま、その気持ちも判りますがね。これだけの大仕事を果たしたんだから」
そう言いながらジュリアンは、鼻先の汚れを指先で拭（ぬぐ）った。

# 第5章 天駆ける三姉妹

すべてが青に染め抜かれていた。天も、海も、それぞれが互いに負けじと、深い青の輝きを放っている。連なる小島も、浮かぶ白い筋のような雲も、そして海面に群がる鷗(かもめ)の群れも、今にもその青の中に埋没してしまいそうに見える。

アカネイア大陸南端。突き出た二本の半島をつなぐディール湾の中ほどは、午後の陽光によって青の世界と化していた。その中を、三頭のペガサスが進む。翼を持った天空の白馬。つかず、離れず。青の中に三角形を描くように空を駆け続ける。ペガサスには、それぞれ色鮮やかな甲冑(かっちゅう)を纏(まと)った少女がまたがっていた。先頭のペガサスの少女は、緑の着衣と深い紫の胸当てを。続く長身の少女は、薄青色の着衣と紅色の胸当て。そして殿(しんがり)のいちばん幼げな少女は、真紅の着衣と紅色の胸当てを付けていた。青一色の世界にあって、色とりどりの着衣で身を包む少女達は、あたかも虹(にじ)の輝きのごとく周囲に照りはえる。着衣の色はもとより、その髪型、身長、体格も少しずつ異なる三人だったが、どこかに共通の雰囲気があった。具体的に共通しているのは深緑の瞳だけなのだが、それだけではない、三人を繋(つな)ぐ目に見えない〝何か〟があった。

気のせいではない。彼女達は同じ血で結ばれた実の姉妹なのだ。ペガサスナイト三姉妹。彼女達

はどこから来て、そして、どこへ行こうとしているのか。

「ねぇパオラ姉さん。そろそろ、どっかで休もうよ。朝からずーっと、ずーっと飛び続けてるんだもん。いいかげん疲れちゃったよ」さもだるそうに、後尾に陣取るいちばん背の低い少女が愚痴をこぼした。背だけでなく、その顔つきも三人の中でいちばん幼い。末っ子のエストだ。

「そうね」先頭の少女は天を仰ぎ見た。長女のパオラ。三人の中でいちばん長い艶やかな髪が、首の動きに合わせて揺れ動く。すでに太陽は天頂を過ぎ、ゆっくりと西に傾きつつあった。「もう、丸半日か。いいわ。この辺りで休まないと、いいかげんペガサス達が参っちゃうから」

「やったぁ!」

「でも、待って、お姉さん……」

「なあに、カチュア?」

カチュアと呼ばれた少女は三姉妹の次女。もっとも背が高く、顔立ちも大人びている。

「急がないと、間に合わないかも知れない。そんなことにでも、なれば……」

消え入りそうな声、途切れがちな口調、顔はうつむいたままだ。何か、よほど不安なことでもあるのだろうか。しかしパオラは気にかけない。それはカチュアのいつものままの姿なのだ。

「急がば回れって言うわ。あんまり飛ばし過ぎて、逆にペガサスがへばっても困るわ。私たちの本来の目的が、ふいになってしまうもの」

「そう、ね。そうかも……」
「カチュア姉さんは心配性過ぎるのよ！　大丈夫。ずぇーったい間に合うから。へーき、へーき！」
「エストは、いつもそうだから……」
「え？」
「勝手にあちこち、飛び回って、道に迷ったりするのよ……」
「ひ、ひっどーい、カチュア姉さん！」
「でも、本当だから……」
「まあまあ、ともかく」雲行きの怪しそうな二人の会話にパオラが割り込んだ。
「あそこに小さな島が見えるわ。ひと休みしましょう。エスト。水はまだあるわよね？」
「え!?」
「水よ。あんたがみんなの水筒持ってるんじゃない」
「あは！　そ、それが……」
エストは急に声を細め、わざとらしく肩をすくめてみせる。パオラは不吉な予感を覚えた。
「……も、もしかして、あんた！」
「御免なさい！　みーんな飲んじゃった！」
「エストっ!!」パオラは眉を釣り上げて叫ぶ。
その横でカチュアは慌てもせず、ただ大きなため息をついた。日常茶飯事のことらしい。やれや

れまたか、そんな表情を浮かべている。
「な、な、な、何考えてるの、あんたッ！」パオラは手綱を振るい、愛馬をエストの脇に付ける。
「だって、喉がカラカラだったんだもん！」同じくエストも手綱を振り、近付く姉から逃げだそうとする。その態度がよりパオラを憤らせた。
「待ちなさい、あんたッ！」
「御免なさい。反省してまーす！」
「……してまーす、じゃないでしょ！　これッ、待ちなさいエスト！」
「だって、待ったら殴るんでしょ！」
「当たり前よ！」
「じゃ、待たない！」
「エスト！」
エストとパオラ、二人を乗せたペガサスは、派手な追跡劇を繰り広げながら下方に浮かぶ小島へと降下していった。
「あーあ。相変わらず、ねえ……」カチュアは呆れ顔でそれを見ながら、ゆっくりと二人の後を追って行く。そして大きく首をうなだれ、今日二回目のため息をついた。
幸いにも、小島には湧き水の流れ出る天然の水飲み場があった。三頭のペガサスはそれぞれ翼を

休め、水を飲んだり、毛づくろいをしたりしている。気高い伝説の神獣とはいえ、その姿は大地を駆ける馬と何ら変わることはない。
そのすぐ脇のなだらかな岩場に、思い思いの格好でくつろぐ三姉妹の姿があった。
「もし湧き水がなかったら、どうするつもりだったのよエスト」
パオラの怒りは随分と収まっていた。先ほどよりも口調は柔らかい。だが完全に許した訳ではない。険しい視線をエストに向け続けている。
「御免、なさい。反省してます」
口だけだ。笑みを浮かべたまま頭をたれる。
「やれやれ……」これはカチュアだ。革の水袋に詰めた新鮮な清水と、油紙に包まれた乾パンを交互に口に運びながら呟く。
「エストに、何かをまかせる、ってこと自体、すでに間違い、なのよ、姉さん……」
ぽつり、ぽつりとした緩慢な口調ながら、有無をも言わさぬ厳しさが込められていた。
「…………」
パオラの叱責より、こちらの方が効いたらしい。エストの顔から明るい笑みが消えた。辺りに気まずい雰囲気が漂う。エストはうつむいたまま。カチュアは気にした風もなく、ぼそぼそと乾パンをかじる。長女のパオラは慌てて声を発し沈黙を破った。
「ま、まあまあ。水のことはもういいわよ。何とかなったんだし。それより、これからのことを考

えましょう。ね、カチュア、エスト」

「私は、その、つもりよ……」

「は、はぁい！」

「ええと、そうね。ともかく、もう一度、今の状況を確認しておきましょう。いいわね」

二人の妹が諾く。パオラは脇に降ろした背負い袋から、丁寧に折りたたまれた一枚の地図を取り出した。「ここがオレルアン城。反乱軍の手によって、半年前に奪回された場所ね」

「うんうん。ニーナ王女様の軍隊でしょ。それに〝草原の獅子〟ハーディン公。すんごくカッコいいって噂のっ！」

「違うわ、実際、指揮していたのは、マルス王子、だってば……。それに、オレルアン騎馬隊の、ハーディン公は、獅子じゃなくて、〝草原の狼〟よ……」

「ぶーぶーっ！」

「ええい、やかましっ！　ともかく、ここがオレルアン城。ここから南に下って……」パオラは地図を差す人差し指の位置を下へずらしていく。「オレルアン城を奪回したマルス軍、今では自由アカネイア軍と呼ばれているけど、その勢いをかって周辺のドルーア帝国方面軍を次々に撃破」

「すごいわよねぇ、たった三十人ほどの軍隊で。極黒の剣皇ナバール、風の魔導士マリク、それにアリティア宮廷騎士団のカインとアベル。ああ、早く逢いたい！」

「……あんまり、期待すると、裏切られた時、怖いわよ……」

「んー、もう！　カチュア姉さん、何だってそんなにいじめるのよ！」
「はいはいはい！　ともかく、それからの数カ月間、自由アカネイア軍はオレルアン城を拠点に、半島の帝国軍を次々に打ち破っていったわ。レフカンディの谷の〝鋼鉄師団〟、港町ワーレンの騎馬弓兵隊、ペラディ城の〝無敵水軍〟、ノルダの町の〝グルニアの木馬隊〟。そして今、遠征の末にこの地に野戦陣地を構築しているの」
　とんっ、と、突き立てるように地図の一点を差す。アカネイア王国国境線。そのすぐ左側に、王城を表す記号が記されている。
「うわっ、もう、こんなところにまで？　アカネイア宮殿のすぐ近くじゃないっ！」
「……あんた、何で、私たちがこうして、海峡越えをしていると、思ってたの？　マケドニアを発つ前に、ミネルバ様が、説明して下さったじゃない……」
「あ、え!?　あははっ！　そうだっけ？」
「……おバカ……」
「お、おバカ!?　ひ、ひどいわよカチュア姉さん！　そこまで言うなんてっ！」
　両手で頭を押えながら、パオラはその顔をしかめた。いつものことながら、この二人のやりとりは頭痛の種だ。
　――いっそのこと、二人ともまとめてこの島に置いて行こうか。
　そんな不穏な考えが頭に浮かぶ。だが実の妹たちであり、今となっては、マケドニア白騎士団の

最後の仲間でもある。ここで見捨てる訳にもいかない。しかもペガサスナイトとしての彼女らの能力は、ミネルバ王女の折り紙付きだ。だからこそ、この重要な任務を委任されたのではなかったか。
「カチュアもエストもおやめなさい。いいこと、二人ともこの任務の意義を、もう一度考えてみて」
「……は、い」
「わかりました！」
「ふう、で、何の話だっけ？」
「マルス王子の軍、つまりは自由アカネイア軍が、アカネイア宮殿の近くにまで軍を進めているってとこまで！」
「そうだったわね。そう、オレルアン城攻略からわずか半年足らずの間に、自由アカネイア軍は半島の敵を一掃。そして念願の、アカネイア宮殿解放にかかろうとしているの」
「このアカネイア大陸の象徴。アカネイア宮殿。ニーナ王女が、この宮殿に再び足を踏み入れるということは、すなわち、ドルーア軍の威信を、完全に打ち砕くことになる」
「うん、カチュアの言う通りだわ。実際に自由アカネイア軍の決起以後、各地の反乱軍はその勢いを盛り返し、ドルーアの駐留軍や侵攻軍と互角の戦いを演じるまでになった」
「そうだよね。だからこそあたしたちも、こうやって援軍として参じられるんだもんね！」
「そうね。あの悪夢のような戦いの果てに、こんな光明が垣間見えるなんて、あの頃は思ってもいなかったわ」

長女パオラのその言葉に、カチュア、エストの二人は小さく頷く。どこかしら、寂しげな表情をたたえながら。エストにいたっては、その目に光るものすら浮かべている。この時の三人の胸中には、母国崩壊のあの忌まわしい出来事が、鮮明に想起されていたに違いない。

彼女達の生まれ故郷はマケドニア王国。暗黒龍メディウス復活の際、真っ先に攻め滅ぼされ、そして新生ドルーア帝国の基盤となった国家だ。

しかしマケドニアとて、そうたやすくメディウスの手に落ちた訳ではない。マケドニアはもともとアカネイア大陸随一の武装国家。空を舞うペガサスナイトの集う〝白騎士団〟を初めとし、陸には大騎馬隊が、海には強大な水軍がそれぞれ控えている。だが龍人族の力は、あまりに強大すぎた。

神秘の魔力を封印した〝魔龍石〟の力を得て、人の姿から、一瞬にして巨大な龍と化す龍人族。その腕のひと振りは強固な城壁をなぎ倒し、爆炎のごとき死の吐息は、数万の兵を一瞬のうちに消し炭とする。さらに彼らが天を舞えばいかなる神獣よりも早く、また地を駆ければ、どんな軍馬も追いつくことは出来ない。

敵は、その巨大な一頭の龍を中心とした布陣で攻め込んで来たのだ。いかに強固な堤防も、ひとたび小さな傷が付けば、そこから無残に全体が崩れて行く。マケドニア軍の崩壊も、その様に似ていた。まず先陣を切った大騎馬隊が全滅の憂き目を見た。正面切って敗れたのではない。迫り来る巨大な龍の姿に恐れおののき、戦いの中途で瓦解したというのが正しい。続いて重装歩兵隊、弓

隊、魔法部隊がことごとく惨敗。王国の人々は、いつ国内に龍の群れが押し寄せて来るか、気が気でない日々を過ごした。しかし時のマケドニア王は、その壮麗な王宮のバルコニーから、国民に向けてマケドニア王国軍の絶対の勝利を確約した。

まさにその時だった。天空を貫き、雲間から巨大な龍が飛来。バルコニーに立つ王もろとも、王城を一瞬のうちに破壊し尽くした。そしてその混乱に乗じて、多くの敵部隊が王城に押し寄せたのだ。虎の子のペガサスナイツ、すなわちマケドニア白騎士団が悠然と立ち上がったが、不意を突かれた戦いではあまりに分が悪すぎた。しかも王を失った悲しみにより、勇猛を謳われた白騎士団の隊長は本来の力量を発揮できないでいた。

マケドニア白騎士団隊長。それはマケドニア王の実の娘、ミネルバ王女その人だったのである。

「王を目前で失い、そして王城を滅ぼされ、国の民の心は粉々に打ち砕かれました。戦いの意志も萎え、ただ死の恐怖に怯える今のマケドニアに、あの恐るべき敵を倒すだけの力はありません。我我は苦渋を飲み、そして恥辱に耐え、再起を信じてその身を隠すしかありません。いつの日か、栄光のマケドニア王国の再建を信じて……」

ミネルバ王女は悲しみに耐えながらも、残された僅かな兵の前で語った。この日から、マケドニアの苦難の歴史が始まることとなる。龍人族の長メディウスは、破壊された王城を再建。自らを皇帝とし、新生ドルーア帝国の基盤を固めた。

そして国民は深い悲しみと絶望で、再建された王城のバルコニーに立つ邪悪な影を見た。漆黒の

ローブに身を包んだその男こそ、ドルーア帝国軍の実質的指導者になる大司祭ガーネフだった。
闇の中から歴史の表舞台に突如出現したガーネフ。この男は、メディウスに代わって新生ドルーア帝国の建設を公言。マケドニアを陥落させた勢いをもって、内海越しに隣接するグルニア王国を占領した。そしてガーネフの公言通り、マケドニアとグルニアの二カ国が統合され、新生ドルーア帝国が誕生したのである。
その頃——。敗走の屈辱に耐えつつも、ミネルバ王女を中心とするマケドニア反乱軍は、追撃の手を逃れ奥深い山中に身を隠していた。じっと再起の時を信じて。
それから長い歳月が流れた。マケドニア反乱軍は密かに破壊活動を行いながらも、さすがに強大無比のドルーア帝国に致命傷を与えられず、ただ崩壊の時を待つだけとなっていた。当初は数多く残っていた有志も、そのほとんどが死に絶え、今ではわずか数十人という規模にまでなっていた。
アリティア宮廷騎士団と並び大陸にその名を轟かせたマケドニア白騎士団も、隊長のミネルバ王女以下の三人を残すのみだった。すなわち、パオラ、カチュア、エストの三姉妹である。

「ミネルバ様、もう私たちに、長い間戦い続けるだけの余力は残されていません。白騎士団は私たち姉妹と、ミネルバ王女を加えて四人。残る戦士たちを加えても、わずか三十にも満たない数にしかなりません」
「とても、残念なの、ですが……」

「みんな、みんな、せっかくここまで頑張ったのにっ！」
「ある時は岩の隙間に淀んだ泥水をすすり、ある時は野の雑草をかじり飢えをしのぎました。あれから二年。よくもここまで戦い続けてこられたと思います」
「ほんと、泥水まずかったもんっ！」
「あんたは、黙って、なさい……」
「ぶーぶーっ！」
「しかし、それももはや限界かと思われます。かくなる上は、王女、私たちにこう命じて下さい。ただ一言〝栄光の白騎士団として、戦場で死ね〟と」
赤い、燃えるような長い髪を風になびかせながら、ミネルバはただ黙ってうつむいていた。やがてゆっくりとその顔を上げると、細い切れ長の目をパオラに向け、こう言った。
「パオラ、それにカチュア、エスト。私が二年前に言った言葉、覚えている？」
「え？」
「……二年前……王城陥落の日……」
「あーっ、思いだしたっ。あれでしょっ、ミネルバ様。我々は、えーっと、再起を信じて、その身を隠すしかない。いつの日か、マケドニア王国の再建を信じて……っていう」
「ふふ、そうよパオラ。よく覚えていたわね」
「わーいっ！　誉められちった！」

「エスト、王女様の、前で、はしたない……」
「いいのよ。それよりも、エストの言った言葉を噛みしめてちょうだい。私たちは、何も死ぬために戦って来たわけじゃない。生きて、生き抜いて、そして王国を復興させるために戦って来たのよ？　そうでなければ、ええと、パオラは、今年いくつ？」
「はい、十八になります」
「カチュアが十七、エストが十五ね？」
「はい……」
「はーいっ！」
「そう、そんなに若いあなたたちを、こんな悲惨な戦いに引きずりこんだりしないわ。ただ死なすための戦いなら、ね。それに死んで行った多くの仲間のことを思い出しなさい。みんな、私たちとそう歳の変わらない少女達が……」
「そう、そうでした。わかりますミネルバ様。だからこそ、私たちに死ぬな、と」
パオラは失われた仲間の顔を思い返しながら、沈んだ表情を見せるミネルバの心中を察した。崩れ行く王城からかろうじて逃れたマケドニア第二王女、すなわちミネルバの妹マリアも、この二年間の戦いの中で失われていた。
しかしミネルバは、過去への想いを断ち切るように、かぶりを振って言葉を繋いだ。
「死んでも栄光は輝かないわ。それに今こそ、私たち反乱軍が決起する時だというのに」



「決起の、時、ですか……？」
「そうよ、カチュア。私たちの協力者が伝えてきてくれたの。帝国軍の動きと、それに敵対する勢力の行動を、ね」
言いながらミネルバは、腰に下げた小さな革袋（かわ）から一枚の紙片を取り出した。それはドルーア帝国軍に参加しつつも、未（いま）だマケドニアに忠誠を誓う同志の託（たく）したものだ。今までミネルバの指揮する反乱軍が生き延びてこられたのも、そのような多くの内通（ないつう）者の助力によるところが大きい。
「いいこと。アリティアのマルス王子の話は、あなたたちも知っているわね？」
「はい。タリス城に落ち延びた、若き王子でしたね」
「ええ。そのマルス王子が軍を興（おこ）したらしいの。わずか二十名にも満たない小さな、小さな軍なんだけど、ね」
「えー、じゃあ、あたしたちの軍よりも、もっと数が少ないんだぁ！」
エストは、大きな深緑の瞳をさらに大きくする。驚いて当然だ。帝国軍の最小規模の部隊でも六十名。二十という数は、強大なドルーア帝国から見れば、蟻（あり）のような存在にも等しい。
ミネルバはエストの言葉に諾（うなず）き、さらに話を続けた。
「でも、そのマルス軍は、タリスからオレルアンにまで歩を進め……。いい、ここからが重要なの。あのニーナ王女を救出。オレルアン残党軍とともに、王城の解放に成功したらしいの。今では彼らはその規模を増し、自由アカネイア軍の名で呼ばれているわ」

「ニ、ニーナ王女が!?」
「御健在、だったん、ですか」
「ニーナ王女って?」
「馬鹿ね、エスト。正アカネイア王家の、唯一の、正統なる後継者……。このアカネイア大陸のすべての国々は、みんな、アカネイア王家につながる……」
呆れ顔のカチュアは、侮蔑の色のこもった瞳でエストを見つめる。呆れて当然だ。ニーナ王女はアカネイアに住む者にとって、女神にも等しい存在なのだ。アカネイアの象徴と言い換えてもいい。
「えーんっ! 馬鹿って言ったぁっ!」
「……だって……」
「静かに、カチュア、エスト! それでミネルバ様、その後のマルス軍の動きは?」
「残念ながら今回の情報はそこまで。今は帝国軍が、増援部隊をオレルアン方面に派遣したとしか、わからないわ」
「増援ですか。そうでしょうね。わずか二十ほどの兵にオレルアン城を奪回され、しかもニーナ王女の生存が確認されたとなると」
「帝国軍は、いいえ、皇帝メディウスは、その威信を賭けて自由アカネイア軍打倒に乗り出すわね。事実、大司祭ガーネフが動きだしているらしいわ。それにグルニアの智将カミュも」

「ガーネフはわかりますけど、カミュ将軍までもが⁉」パオラは大きく目を見開いた。

カミュ将軍。それはグルニア黒騎士団の隊長であり、勇猛さと知略に長けた有能な将軍だ。剣の腕も、大陸随一と噂される。

「ええ。カミュ将軍は真の武人。だからこそ、祖国の決定には逆らえないのです。帝国の一部になったといえ、グルニア王国自体は消滅していません。カミュ将軍はあくまで、そのグルニアの人間として自由アカネイア軍討伐に乗りだしたのです」

「大司祭ガーネフにカミュ将軍。そうまでして、自由アカネイア軍を叩こうとしているなんて……」

「皇帝メディウスは、反乱の芽を早いうちに摘み取ろうとしているのです。ニーナ王女が生きていたことを知り、各地の反乱軍はますますその勢いを増すでしょう。ドルーア帝国にとって、それは避けねばならぬ最悪の事態。各地方の反乱軍の力を束ねれば、恐らく一国の軍勢にも匹敵する巨大な勢力にもなるわ。ただ今までは、それを統率する強固な意志がなかっただけのこと。みんなバラバラに、散発的な戦いを行ってきただけ」

「もしもその軍勢が結束すれば……」

「そう。悪に対抗する正義の軍団にもなるわ。いいこと、パオラ、カチュア、エスト。私たちの待ち望んでいた日が、今まさに訪れようとしているの」

「わかったミネルバ様。じゃあ私たちは、今からそのマルス王子の軍に馳せ参じるってわけです

ね!?」
「残念だけど違うわ、エスト」
パオラもカチュアも拍子抜けしたらしい。エストと同じく、マルス軍への参加を予期していたのに、それが見事に裏切られたのだ。
「じゃあ私たちは?」
「マルス軍はオレルアン騎馬隊をはじめとした、各地の反乱勢力と合流を果たしつつある。そうやすやすと、ドルーアの軍勢に負けたりしない。私たちが参加したところで、大して大勢に変化があるとも思えないわ」
「では、どうされるんです? このまま指をくわえて見ていろ、とでも?」
「焦らないで、パオラ。私たちは、ここで私たちにしか出来ないことをするの」
「私たちに、しか……出来ない、こと……」
ミネルバは、先ほど見せた紙片をもう一度取り出しパオラに手渡した。
「これは、さっきの?」
「ドルーア帝国の根幹を成す新生マケドニア軍。私たちはその中枢に、有力な情報網の根を張っているわ。それを駆使するの」
「もしかしたら……ミネルバ様……」
「その通りよ。マルス軍は近い将来、伝統のアカネイア宮殿奪回に乗り出すに違いない。この大陸

の存亡と未来を賭けて。その時のために、私たちはあらゆる情報を細大漏らさずかき集めるの」
「そして、自由アカネイア軍を勝利に導く！」
「それがこれからの私たちの戦い。それからでも遅くないわ。戦いに馳せ参じるのは」
　そう言ってミネルバは、希望に燃え立つ瞳で明るく微笑んだ。

　それから三カ月の後、数々の貴重な情報を得たパオラたちは、ミネルバの見送りを受け、自由アカネイア軍との合流を果たそうと海峡を進んでいた。
「でも、予定よりもだいぶ遅れてるわ。本当なら、アカネイアの国境を越えたところで、マルス軍と合流するつもりだったんだけど」
「でも、最後の最後で、あんな情報が、入るなんて、思わなかった、もの……」
「あの情報って、もしかしたら大司祭ガーネフのっ!?」
「そう、まさかあの男が、これほど早くに動き出すなんて。しかもマルス王子たちは、当然このことを知らないはずよ」
「ドルーア帝国も、相当、焦っているみたいね……」
「この情報を手に入れるために、どれほどの犠牲が出たか……」そっと目を伏せるパオラ。
　カチュアもまた、悲惨な戦いの記憶から逃れるように、視線をパオラから外らす。どこまでも明るいエストですら、悲しげな色を瞳に浮かべて沈黙を守る。

しばしの間があり、パオラが呟くように口にした。
「アカネイアの城にガーネフあり。たった、たったこれだけのこと、なのにね」
「でも、その情報が、きっと歴史を、変えることに、なるわ……」
「そうね。そしてこの、一冊の魔道書が」
パオラは背負い袋から、薄汚れた一冊の書物を取り出した。もはや表紙の箔押しの文字もかすれ、四隅も丸く擦り切れている。しかしその書物が、ここに存在するという事実だけが重要なのだ。
〝スターライト・エクスプロージョン〟。その言葉の意味は、後に解きあかされる。
「さ、ペガサスたちも元気を取り戻したみたいだし、行きましょう。私たちもアカネイアへと！」
おもむろにパオラが立ち上がった。勢いで乱れた前髪を、細く、白いその腕で撫でる。カチュアもまた、広げた荷を背負い袋に押し込めながら立ち上がった。エストはぐずぐずと、残った乾パンをかじっている。
「行くわよエスト。今度こそ、本当に置いて行っちゃうからね。出発の前に行ったでしょ。もしも誰かの身に何かあっても、構わず先に行くって！」
「でも、乾パンかじってて置いて行かれたんじゃ、マケドニア白騎士団の、誇りも、何も、ないわよね……」
「そ、そんなに急がないでよ。ま、待ってってたらぁっ！」
慌てて立ち上がりながらも、衣服の裾に付いた砂埃をはたき落とすことは忘れない。子どものよ

うに見えても、エストは一人前の女の子なのだ。もちろん、置いて行かれそうなこの瞬間にやるようなことではないが。

「カチュア、エスト。最後の休憩は終わり。ここからなら、わずか半日でアカネイア。思い切り飛ばすわよ。さっきも言ったように、誰かが脱落しても、残った二人、それとも一人が、私たちの務めを果たすこと。いいわね」

「情報と、魔道書を、マルス軍に届ける。それも、アカネイア城の攻略が、始まる前に……」

「その通り。いいわね、エスト！」

「もごっ！　もぐっ！　は、はいっ！」口から乾パンをこぼしながら諾く。先ほどの女の子らしい一面は、どこかに落として来たらしい。

「何があっても、エストにだけは、その任務、まかせたくないわね……」

「ひっどーいっ！」

「さ、出発！」

パオラの叫びを合図に、それぞれのまたがった白いペガサスは、大地を蹴って大空へと舞い上がった。翼の羽ばたきだけではない。蹄で空を蹴りながら走る。それがペガサスだ。清らかな乙女にのみ、その背を許す伝説の神獣だ。

三頭の神獣は鼻息も荒く、わずかな間に雲の峰にまで駆け昇った。すでに陽は西に傾きつつある。雲の峰々は、その色を朱に染めつつあった。紅色の雲の尾根。雪山の夕暮れを想起させる、え

も言えぬ美しき景観だ。
パオラの長い髪が風にそよぐ。カチュアのすらりと伸びた足が、ペガサスの脇腹で揺れる。エストの深緑の瞳が、夕景を映して不思議な色に染まる。三人の少女たちは、ものも言わずに手綱を振るい続けた。
しばらくして、エストがおずおずとパオラの脇に移動し、小さな声で話しかけた。
「ねえ、パオラ姉さん」
「何?」
「あたし、本当に付いて来て良かったのかなあ」
「何を言ってんの?」
「でもねえ、あたし、剣の腕も未熟だし、結局、今までだって、みんなに助けてもらって生き延びてきたみたいな、ものだし……」
「ちょ、ちょっと!」
パオラは突然のエストの言葉に狼狽を隠せない。いつも陽気なエスト、うるさいくらいの声で、明るい笑いをふりまき続けるエスト。それが今、沈み込んだ表情をパオラに向けている。
「カチュア姉さんの言うとおりかも、ね。あたしなんか、マケドアニ白騎士団の恥さらしなのかも知れない」

「まさか。カチュアの性格知ってるでしょ？　少しきつい言い方だけど、冗談よ」
「そうかなあ……」
「そうよ」
二人の間に、カチュアが割って入った。この期に及んで、さらに追い打ちをかけるつもりなのか。パオラはカチュアに何か言おうとした。だが遅かった。カチュアはいつになく流麗な口調でエストに語りかけた。
「ねえ、エスト。あんた、少し考え違いしてるんじゃない？」
「……え？」
「世の中にはね、いろいろな役目を持っている人がいるの。蹄鉄を打つ人、剣を作る人、本を書く人、船の櫓を漕ぐ人、そして小さな頃からペガサスを操る力を与えられ、綺麗な服や、素敵な彼氏とも無縁で、戦場を駆けることを余儀なくされた人……」
「…………」
「でもね、それは仕方のないことなの。誰に命令されたわけでもないけど、生まれた時から、決められていた役目なのよ」
「生まれた時から？」
「そうよ。だからみんな自分の役目を精一杯果たそうと、毎日を一生懸命に生きるの。その役目に疑問を持つのもいいけど、でも、役目は役目だもの。だったら後悔しないよう、ちゃんとこなしたい

じゃない」

エストはこくんと諾いた。

「仕事や立場だけではないわ。それぞれの生き方にも、役目があるの。人の上に立つ人、人の言うことをきちんとこなす人、一人だけで自分を磨く人、それにね、周りの人を明るくさせる人。エスト、あんたの無邪気さが、どれだけ殺伐とした戦場でみんなをなごませたか、わかってないでしょ?」

「え? だって、あたしは、ただ、馬鹿なだけで?」

「それもまた役目よ。少なくとも、人を不愉快にさせる馬鹿じゃなければ、それはそれでいいじゃない。中には、とても頭が良くても、人を嫌な気持ちにさせる人もいるわ」

「そうかなあ……」

「そうよ。あんた、自分でみんなに助けてもらったって言ったわね。でも、嫌な人を助けようと思う人はいないわ。助けられる人は、それだけの何かいいことを、その人にしているの」

「いいこと、かあ」

「そう、わかった?」

「少し……」

「じゃ、後は自分で考えなさい」

「うんっ!」

エストの顔に笑みが戻った。その顔が紅く見えるのは、夕陽のせいだけではなさそうだった。

二人のやりとりを見守っていたパオラは、何故だか不思議に泣きそうな気持ちになった。悲しいからではない。うれしいからだ。黙っていると、本当に涙がこぼれそうだったので、パオラはいつもより一段大きな声で話しだした。

「ねえ、マルス王子って、どんな人だと思う?」

「何よ、姉さん、いきなり……」いつもの緩慢な口調に戻ったカチュアが、怪訝な顔で問う。

「だって、あれだけの強者揃いの軍隊を指揮するだけの人でしょ。どんな人かなあ、と思って」

「……そうねえ……」

「きっと、すごくカッコいいんだよ!」

「そうかもね。少なくとも、勇敢で逞しい、真の勇者には違いないわよね。ニーナ王女から〝ファイアーエムブレム〟を託されるくらいだもの」

「ふぁいあ、えむぶれ? 何それ?」

「あんた、本当に、何も、知らないのね。お馬鹿……」

「ふん、ふん、ふん、だっ! いーじゃないよお!」

「ファイアーエムブレム。聖なる炎の紋章。大陸存亡の危機が訪れた時、アカネイア王国の代理として世界を救う者の証。大いなる知恵、正しき勇気、強き力を象徴する覇者の証。マルス王子はオレルアン城解放の後に、ニーナ王女からそれを授かったらしいわ」

「うわあ、何だかすっごーい！　早く見てみたいね。ファイアーエムブレム！」
「そうね。もうすぐ見れるわ。三人揃（そろ）って」
「どうかなあ、エストが、いるから……」
「べーだ！　姉さんたちを踏み越えてでも、絶対に見に行くもん！」
「やれやれ……」
そして三人の少女たちは、薔薇（ばら）色の空に蹄（ひづめ）と羽ばたきの音、そして明るい笑い声を響かせながら、一路東へと向けて飛び去って行った。目指（めざ）すはアカネイア王国。
自由アカネイア軍との合流を果たすために。

# 第6章　アカネイア・パレス

山々の峰の輪郭が、白い光で縁どられていく。夜明けだ。
東の空が乳白色に染まり、深い眠りから覚めた鳥たちが、さえずりながら梢を行き来する。そんな生き物たちの気配の甦った森の遥か向こうに、荘麗な趣をたたえるアカネイア宮殿があった。
この大陸の六つの王国、オレルアン、グルニア、マケドニア、アリティア、グラ、タリスの源流となった、伝統あるアカネイアの宮殿。東西南北、各方位にそびえる四本の白い塔。それを取り囲む豪奢な宮廷と中庭。宮殿の背後、すなわち西側は切り立った崖になっており、その向こうには大海が果てしなく広がっている。それらの情景が、昇りつつある朝陽に鮮明に照らし出された。

「……時間だ。行こう」
マルスはおもむろに振り返り、決意の表情を皆に向けた。
「わかりました。このハーディン、もう何も言いますまい。全力を挙げ、マルス様の宮廷突入を援護いたします」愛馬の脇に立つハーディンは深々と頭を垂れた。
その背後に立つカイン、アベル、そして多くの兵も、同じようにマルスに一礼を送る。

「ジェイガン様も、陰ながら見守っておられるはず。何とぞ命を粗末にせず、必ず生きてお帰り下さい」
「カインの言う通りです。まだまだ我々には、母国アリティアを復興させるという目的があるのですから」
カインとアベルの言葉に、マルスは静かな口調で応じた。
「もちろんだ、カイン、アベル。僕にはこの……」言いながら、胸を彩る真紅の宝玉を示す。それはニーナ王女から託された覇者の証、〝ファイアーエムブレム〟だ。正アカネイア王家の王位継承者から、真の勇者にのみ託されるという伝説の紋章。それが今、マルスの胸で炎の煌めきにも似た輝きを放っている。「……ファイアーエムブレムがある。アカネイアの人々の魂が、僕を守ってくれるさ。それより、そちらの方こそ無茶はしないでくれ。アカネイア宮殿の奪還も、まだまだ我々の大いなる目的の第一歩にしか過ぎない」
一同は、マルスのその力強い言葉に諾いた。かすかに風がそよぎ、森の木々がざわめく。マルスは兵の背後に控えるレナに、目で合図を送った。
「……わかりました」諾くその手には、霊木で作られた一本の杖が握られている。
転移の杖。あの悪魔の山で、ジュリアンを一瞬のうちに麓へ運んだ法力の杖だ。レナは杖を手に、マルスの側に進み出る。が、その時、周囲の沈黙を破ってシーダが口を開いた。
「マルス！」

「どうしたんだい、シーダ？」
「あ、いいえ、何でも、ないわ」
「…………」
「本当に、何でもないの」
「シーダ」
「え？」
「勝ってくる」
「うん」
二人の会話はそれきり途切れた。いや、それで充分だった。シーダは満足げな笑みを浮かべて退がる。入れ替わりに、レナが進み出た。互いに諾きあったあと、レナはマルスの目前で一心不乱に祈りだした。自らの持つ、杖の力を解放させようと。神秘の力が杖に宿った。転移の杖の先端は乳白色の光を放ち、そのままマルスの全身を包み込む。光のベールの向こうで、マルスは見守る皆に笑顔を向けた。そしてそのまま、周囲の景色にとけ込むように姿を消した。
沈黙がよぎる。レナの手の中で、杖が音もなく崩れた。封じ込められた法力を使い果たしたのだ。
「諸君。マルス王子が敵将に止めを刺さんと、今まさに、宮殿の中枢に転移された！」ハーディンが高らかな声で叫ぶ。「玉座の間には僅かな警備兵しかいないはずだ。しかし宮殿の周囲には、数千もの精鋭部隊が鉄壁の布陣を敷き待ち受けている。我々の役目は、マルス王子の隠密行を察知さ

れぬよう、力の続く限り、陽動、撹乱を行うことにある。すでに、海に面した断崖を望む後門では、ナバール殿とマリク殿を中心とした別動隊が行動を開始する頃だ。我らも負けてはおられん。皆、持てる力を存分に出し切り、この戦いに臨んでほしい。悲願のアカネイア宮殿奪回を、成就させるために！」

「一同、抜刀！」

カインの号令の下、一同は剣を抜き、槍を構え、そして弓を握りしめた。手にしたそれぞれの武具が、朝の陽光を反射し、涼しげな煌めきを四方に投げる。

「突撃！」

騎馬弓兵のウルフが、どこからともなく取り出したラッパを高らかに吹き鳴らす。オレルアン王国騎馬隊、進撃の譜に従って。一瞬の間も置かず、居並ぶ解放軍の兵士たちは、我先にとアカネイア宮殿に向かって突進した。島国の小国タリスを旅立ち早や一年。今まさに、彼らの当面の目的であったアカネイア宮殿奪回のための戦いが始まろうとしていた。

「部隊の配置は、済んでいるんだろうな!?」

「当たり前だ。奴らの動きは事前に知れている。ふんッ、自由アカネイア軍か。調子づきやがって。オレルアン城やディール要塞のような訳にはいかんぞ！」

「〝青〟部隊は右陣の警備を。〝緑〟部隊と〝紫〟部隊には後門の増援に加わってもらう」

「……よかろう。急いでな」

「うむ。各隊の武運を祈る！」

装備と鎧に施された装飾から見るに、各騎兵部隊の分隊長らしい。彼らは敬礼を交わし合い、十字路の手前で四方に分かれた。その途端、薄暗い通廊の陰から不意に何かが飛び出した。マルスだ。通廊の陰と陰を結ぶように、鋭く、素早く移動する。マルスは時折その足を止め、柱の陰で聞き耳をたてた。そして兵の気配がないことを確認すると、再び無音の走りで通廊を駆け抜ける。ただひたすら〝玉座の間〟を目指して。

転移の杖でマルスが運ばれたのは宮殿の内側まで。さすがに直接、敵将の目前に転移するという訳にはいかなかった。オレルアン城の時のように精鋭部隊が待ち受けている場合が考えられたし、敵将が別の場所に潜んでいる可能性もある。そのため、あえて転移を宮殿の内側までに押さえたのだ。

しかし。マルスは密かに通廊を駆けながら思いを巡らす。

——兵の流れ、布陣、雰囲気、そして気配。間違いない。この宮殿を取り仕切る司祭ボーゼンは、中心の玉座の間にいる！

予測は、宮殿の奥へ奥へと足を踏み入れるごとに、次第に確信へと高まっていった。

宮殿を警備する兵が通廊を行き交う。その度にマルスは、ある時は石柱の陰に、ある時は壁一面を彩る飾り布の後ろに隠れ、敵をやり過ごした。今のマルスにとって、殺気や気配を完全に消すの

は造作もないことだ。それこそ人が無意識に呼吸をするように、いつでも自在に〝気〟を操ることが出来る。
「……このまま、真っすぐか」つぶやき、さらに通廊の奥へと走る。走ると言うより、低く飛ぶ、と言った方がふさわしい。その動作は疾風迅雷。獣の素早さだ。しかも衣服の擦れ合う音一つ、空気の揺らぐ気配すら残さない。
――ニーナ王女の言うとおり、内部は意外に手薄だ。これなら……。
これなら、王女との約束を果たせそうだ。マルスの脳裏に、昨夜のニーナ王女との会話が横切る。
「無茶です。たった一人で敵の中枢に乗り込もうなど。もしも、もしものことがあれば！」
マルスの立てた戦術を聞くやいなや、ニーナはいつになく語気を荒げて叫んだ。驚いて当然だ。自由アカネイア軍の指導者が、たった一人で敵地に乗り込むなど。もしもそれでマルスが無為に死せば、たちまち兵は戦意を失い、圧倒的な優勢を誇る守備軍に壊滅させられるに違いない。
だがマルスも、相応の覚悟でこの戦術を立案したのだ。
「ニーナ様、お聞き下さい。オレルアンで反乱軍の体裁を成してから半年の間、我々は数多くの敵軍を打ち破って参りました。そしてそれらの勝利の末に得たものは、確かに大きかった」
「そう、そうですわ。希望と自由。多くの国土。安静なる日々。そして、多くの人々の命」
「しかしニーナ様。それに反し、我が軍の戦士たちの多くが、戦いの中でその命を散らしました。

アカネイア解放のため。大義のため。それはわかります。しかし、無為に命が失われていいという法はありません」
「………」
「ニーナ様。オレルアン城攻略の際、私はかけがえのない師、ジェイガンを失いました。それから以後も、多くの仲間が失われていきました。もうこれ以上、愛すべき仲間を失いたくはありません」
「でもマルス王子。だからといって、あなたが敵陣に一騎駆けを行うという理由にはなりません」
「おわかりでしょう。救世の勇者、アンリの血に連なる者。すなわちアリティアの王位継承者が敵将を討たねば、この解放戦線の意味はないのです。三年前、父も同じ理由でその命を失いました。押し寄せる侵略軍に対する、討伐隊の先陣を切り……」マルスは悲しげな表情をニーナから隠そうと、その顔をわずかに伏せた。そして伏せたまま言葉を繋いだ。「アリティア王家に伝わる神剣ファルシオンこそ失われましたが、私も勇者アンリの血を引く者です。私がやらなければ、私が敵将を討たねばならないのです。ご心配なきよう。必ずや司祭ボーゼンを打ち倒し、生きて帰って来ます」
　それきり、ニーナ王女は何も言わなかった。無言の承諾だった。そして今、マルスはたった一人、アカネイア宮殿の通廊を駆けている。きらやびかなアカネイア宮殿の通廊は、かつて攻略したオレルアンの城や、ディール要塞などとは明らかに異なる構造を持つ。旧ドルーア帝国の侵攻以前、すなわち百年以上昔に建築されたこの宮殿は、外敵に対する防備を考慮に入れず設計されている。ア

カネイア大陸統一後の、平和と繁栄のシンボルとして作られたためだ。

――アカネイアの栄光は取り戻される。その後、祖国アリティアの解放に赴く。もう少しだ、もう少しで。

そう思うと、自然、四肢が緊張にうち震えた。やがてマルスは、今までの通廊が野鼠の巣穴としか言えなくなるような、広大な通路に突き当たった。〝南の大廊〟。玉座の間につながる広大な通廊だ。それこそ、ペガサスナイトが空中で縦横無尽に剣戟を繰り広げることの出来そうな高さと、重装歩兵一部隊が横一列で進軍出来るだけの幅がある。縦横、三十尺に四十尺といったところか。

用心し、わずかに身をずらしながら大廊の奥を覗き込む。天井を支える巨大な石柱の陰に、身を潜めるようにして重装歩兵が立っていた。玉座の間を守備する精鋭部隊だろう。柱ごとに、それぞれ二人ずつ配置されている。突き当たりの大扉まで、柱は左右合わせて十本。ということは、敵は最低でも二十人はいる計算になる。

――敵の将軍、司祭ボーゼンは、知略には長けるが武の心得はないと聞く。ここに居並ぶ守備隊を抜けば、後は……。

行く手を塞ぐものはない。マルスは決心した。すらりと鞘からレイピアを引き抜き、抑えていた殺気を放つ。すぐさま敵兵たちがマルスの存在に気付いた。目で見た訳ではない。素早く殺気を感知したのだ。

「……さすがは精鋭部隊」

マルスは舌を巻きながらも、大股で大廊のど真ん中に進み出た。全身を包む鋼の鎧の重さは、自分の体重ほどもあろう。だが重装歩兵たちは、まるで舞を舞うかのような軽やかな動作でマルスに迫る。当初の予想は覆された。敵兵は、両手両足を使っても到底数えられる数ではなかった。マルス同様に気配を完全に消し去り、物陰に潜んでいたのだ。

「そこの者、一人で乗り込むとは勇敢この上なし。しかし、ここから先は一歩たりとも通すわけにはいかん。その首、しかと貰い受ける！」先頭の一人が口を開く。

その間にも敵兵は、じりじりとマルスとの間合いを詰めている。完全に包囲したところで、一気に止めを刺す気なのだろう。勢いにまかせて突進したりはしない。集団戦闘に熟達した者たちの動きだ。

――しかし、これしきのことで打ち倒されるくらいなら、祖国アリティア解放は、そしてメディウス打倒は果たせない！

心中で叫んでから、マルスはレイピアを高く掲げた。そしてあくまで落ち着き払った声で、アリティア宮廷騎士団の儀礼に従い名乗りを上げた。

「我が名はマルス・ノア・アリティア。栄光の王道を貫くため、閃光の白刃を今ここに振るわん！」

マルスがアリティアの王子であったのは、そこまでだった。次の瞬間には、殺戮と破壊のみを身上とする、一人の鬼神と化していた。オレルアンの王の間で吠えた野獣。それが、このアカネイア宮廷〝南の大廊〟に放たれたのだ。

「見て下さい、ニーナ様！　始まったみたいですぜ！」
ジュリアンは高台の上で、遥か下方に広がるアカネイア宮殿を指さし叫んだ。
小さな豆粒のような兵士たちが、右に左に行き交う。まるで蟻の群れだ。さすがに怒声や剣戟の音は聞こえない。しかしそれを見おろすニーナの心の中には、確かに激しい剣の音が届いていた。
「それにしても、こんな稼ぎ時にニーナ王女様の護衛とは、残念無念！」
「何か不満か？」同じく、護衛に残った弓兵のジョルジュが声を荒げる。
「い、いやぁ。お宝探しが出来なくて、残念だなーって！」
「ふふん、幸運だったというものだぞ。今までの戦いとは訳が違う。何しろ、ここを奪われれば帝国軍も面子が立たん。見ろ、中庭が守備兵で埋め尽くされるほどだ」
「あらーっ、ホントに。レナさん、大丈夫かなあ」
芝生に覆われているはずの中庭が、茶色に染まって見える。それは、光沢を放つ守備兵の鎧の色だった。立錐の余地もないほどに集結した守備兵で、緑の芝生が完全に覆い隠されているのだ。
「やれやれ、どうなることやら」
呟くジュリアンの横で、ニーナは両手を組みマルスの無事を祈った。「……マルス王子」
と、その時だった。何か例えようのないどす黒い気配が、ニーナの体を包み込んだ。吐き気を催すほど醜悪で、身を凍らせるような冷酷さを持った、ひどく不気味な気配だった。

「これは、この、気配、この、邪悪な気は……」
「あれれ？」
「ぬッ!?」
ジュリアンとジョルジュの二人が、ニーナの身に起こった異変に気付いた。王女は両手で自分自身を抱きしめ、激しい悪寒に打ち震えている。まるで、酷寒の地に薄着で放り出されたかのように。
「ニーナ様！」
「どうされました！　お体の具合でも!?」
「……この、気配！」
「気配？　何も、何も感じませんが。敵ですか!?」
「ここでは、ありません……」ニーナは震える指先で、下方に広がるアカネイア宮殿を指した。玉座の間の位置する、南の塔の最上階。「……玉座の間に……気配が」
「玉座の間に!?」
「あの、恐ろしい邪悪な気……」
ニーナがその醜悪な気を感知出来たのは、ひとえに悪夢のような記憶のせいに他ならない。何度逃れようとしても、なお体にまとわりつく戦慄の記憶。敵の手に落ち、虜囚となっていた頃の、あの忌まわしき感覚。それがニーナの脳裏に鮮明に蘇っていた。

「なぜ、なぜ、あの男が！」
「あの男？　ニーナ様、それは、それはいったい何なのです⁉　何者なのです⁉」
「危ない、マルスが。マルス王子が！」それだけ叫ぶと、ニーナは恐怖に耐えきれず意識を失った。慌てて腕を伸ばしたジュリアンの腕の中に、ゆっくりと倒れ込む。
「ど、どうしたんだ、王女様⁉」
「わからん。しかし……」
「しかし？」
「もう遅い。マルス王子に危険を伝える術（すべ）は、ない」
その横で、ジュリアンはため息混じりに呆然（ぼうぜん）と天を見上げた。その視界の脇を、白い三羽の鳥が横切る。いや、鳥にしては飛び方がおかしい。「あれ……ペガサスか？」
「ペガサス？」ジョルジュも同じく天を見上げた。
紺碧（こんぺき）の青い空。そこを横切るのは、まさしく三頭のペガサスだった。

「馬鹿な。今、何と言った」
押し寄せる津波のような敵騎兵の群れを剣でかき分けながら、ハーディンは背後のウルフに向き直った。
「はい。暗黒の大司祭ガーネフは、このアカネイア宮殿、玉座の間にあり！」

「信じられん」
「しかし、マケドニアからの使者の言葉を信じるなら……」
「ならば、ならばマルス王子はどうなる」
「ハーディン様、側面！」
「ぬッ!?」
　敵騎兵の中の一騎が味方をかき分け突出した。前方に長槍を突き出しながら、狙いをハーディンに定める。まず敵将を討ち倒し、兵の戦意をそぐという戦場の基本に従っての行動だ。
「覚悟ッ！」
「ええい！」
　ウルフの報告に動揺していたハーディンは、僅かに対応が遅れた。が、それは致命的な遅れだった。彼の眼前で、敵兵の手にした槍の穂先が不気味な光を放つ。次の瞬間には、ハーディンの胸にその穂先がめり込んでいるだろう。しかし、そうはならなかった。どこからか放たれた閃光が馬上の敵を寸断。敵兵はそのまま愛馬からずり落ち、味方の騎馬の蹄に踏みしだかれた。
　ナバールだ。剣皇の名を欲しいままにするナバールの斬撃が、苦境のハーディンを救ったのだ。
「ナバール！」
　さらに続く敵の騎馬がナバールを取り囲んだ。だが剣皇は動じることなく、手にした剣でゆっくりと中空に弧を描いた。敵の騎馬は構わずナバールに突っこむ。もしも彼らが相手の素性を知って

いれば、迷わず馬を退かせただろう。

もう遅い。ナバールの剣は意志あるかのように宙をのたうち、周囲の獲物に狙いを定めた。一瞬の後、無数の騎兵が馬上から転落している。右手を失った者、首をなくした者、肩口を深々と切り裂かれた者。その傷は多種多様だが、負わせた相手はたった一人。ナバールである。

彼はさらに押し寄せる敵兵を前にしながらも、悠然と振り返って叫んだ。

「ここはまかされよ。一刻を争う。マルス王子を救う手だてを」

「かたじけない。ロシェ、ビラク、ザガロ。ナバール殿の援護を。カイン、アベル殿と共に、今しばらくこの場を支えてくれ。ウルフ、マケドニアからの使者はどこか⁉」

「橋頭堡として確保した、東の城門」

「わかった!」

振り向きもせずハーディンは馬を飛ばした。仲間の技量を信じているからこそ、彼は振り向かずに済んだのだ。事実その背後では、ナバールの剣によって、二桁の敵兵が一撃のもとに斬り倒されていた。

防衛線をすり抜けた敵兵を排除しながら、ハーディンは東の城門へと辿り着いた。真っ先に敵を排除し、宮殿内部に攻め込むための橋頭堡として使われている場所だ。そこにはシーダとレナ、そして幾人かの兵のほか、見慣れぬ三人の少女がいた。脇に白い天馬がいるためペガサスナイトとわ

かるが、そうでなければ、迷い込んだ村娘にでも見間違えそうな年恰好だ
「あなた方か。マケドニアからの使者というのは」
「はい。マケドニア白騎士団のパオラです。そしてこの二人は、妹のカチュアとエスト」
――まさか、このような少女とは。
その心の揺(ゆ)らぎを見抜いたか、パオラは背負い袋から一枚の書面を取り出した。
「ミネルバ王女からの親書です。これで、信用して頂(いただ)けますね？」
「……うむ、確かに」ハーディンは力強く諾(うなず)き、すぐに話題を切り替えた。
使者が本物ならば、先ほどの情報にも偽(いつわ)りはないということだ。ならば一刻の猶予(ゆうよ)もない。マルス王子が、今にも最大の危険に向かって突き進んでいるのだ。
「パオラ殿、では、あの大司祭ガーネフがこのアカネイア宮殿にいるというのは⁉」
「事実です」
「三日前に入手した情報です。ガーネフは、アカネイア宮殿で、マルス王子を待ち受けると……」
「とにかく急がないと、大変なことになるわ！」
三姉妹は順に、矢継(やつ)ぎ早(ばや)に言葉を繋(つな)ぐ。帝国軍は、マルス王子が単身敵陣に乗り込むというこちらの戦術を、完全に見抜いていたのだ。それにしてもマルス王子を討つために、大司祭ガーネフが自ら赴(おもむ)くなど。
「勇者アンリの血を恐れた、皇帝メディウスの差し金か」

呟くハーディンの脇で、シーダが叫ぶ。「とにかく援護を出さないと、このままではマルスが！」
「見事にしてやられた。まさか、まさかアカネイア宮殿そのものが囮だったとは！」
ハーディンは忌々しげに、拳と拳を打ちつけあう。
「どうしたんです、早く援護を！」
「シーダ様、完敗です。ここから玉座の間に向かうには、敵兵の波を突破するより手がない。いかなる手段を使っても、突破に一刻はかかるでしょう。そしてレナさんの持つ転移の杖も、その力を失った」
「じゃあ!?」
レナは小さく諾き、悲しげな表情をその顔に浮かべた。転移の杖の最後の力を使い、マルスを宮殿の内部に送り届けたのだ。予備などあるはずはない。
「大司祭ガーネフの操る暗黒の魔法〝マフー〟の前には、いかなる武具も、魔法も無力だと聞きます。失策でした。何があっても、王子を一人でいかせるべきではなかった。万策尽きました。王子だけではない。あのガーネフの力を持ってすれば、我々を全滅させることは造作もない。恐らくは真っ先にマルス王子を打ち倒し、次に戦いで疲弊した我々を一掃するつもりなのでしょう……」
「じゃ、マルスを見殺しにするとでも!?」
「そうは言いません。しかし、マルス王子を救う手だては……」
「あります！」叫んだのはパオラだった。「まだ打つ手はあります。これを！」

パオラは背負い袋を肩からはずし、その中から古びた一冊の本を取り出す。ハーディンにはそれが何だかひと目でわかった。魔道書だ。魔導士が魔法を行使するために使う、魔力を封印した書物だ。だが、それがどのような力を持った魔道書かまではわからない。もちろんシーダも同様だ。

「星と光の魔法、スターライト・エクスプロージョン。天空から届く星々の光を一点に集約させ、闇の力を拭う。そしてその力は、暗黒の魔法マフーをも無力にする」解答を口にしたのは、いつの間にかシーダの脇に立っていたマリクだった。マリクは無言でパオラの前にまで進み、彼女の手から魔道書を受け取った。中身を改めるまでもない。手にしただけで、それが本物とわかる。

「老師ウェンデルが捜し求めた伝説の魔道の書。これが、どうして」

「マケドニア城の奥深くに、封印されていたんです。そして王城陥落の際、亡き王妃が、ミネルバ王女に託したのだと聞きます」

パオラの答えに、マリクは納得した風に諾いた。

「そうか。だから帝国軍は、真っ先にマケドニア城を滅ぼしたのか。すでにあの時、ガーネフはメディウスと手を組んでいた。自らの魔法が破られるのを恐れ、メディウスにマケドニアを最初に攻略させたんだ」

「でも、これでマルスを救う糸口が見つかったわけね！」

「しかしスターライトとかいう魔法をマリクが使うにしても、玉座の間に辿り着かないことには」

ハーディンの言葉を押しとどめたのは、シーダだった。「私が行きます。私が宙を駆け抜け、マ

リクを玉座の間に送り届けます」
「無茶だ。敵の中には弓兵もいるんだ。死にに行くようなものだぞ！」
「でも、それじゃあマルスがどうなっても、いいって言うんですか⁉」
「ぬう……」
パオラを先頭に、三姉妹が身を乗り出す。その目には、決意の色がありありと滲んでいる。ハーディンは、これが先ほどの少女たちと同一人物かと我が目を疑った。その体から立ち昇る闘気は、経験を積んだ勇敢な騎士そのものだ。
「その仕事、私たちにも手伝わせて下さい。本当なら、夜明けまでにここに着くはずだったんです。そうすれば、マルス王子も単独行を行わなくて済んだ。その責任があります。行かせてください」
「お願いします。こう見えても、私たち、マケドニア白騎士団の一員です……」
「行きます！　ずぇーったい成功させますから！」
「お願いです、ハーディン公！」
シーダ、パオラ、カチュア、エスト。四人のペガサスナイトが身を乗り出し叫ぶ。八つのつぶらな瞳が、躊躇しているハーディンを射ぬく。このままじっとしていれば、マルス王子は確実にガーネフに抹殺されるだろう。勇者アンリの血を引く者がこの世から消え失せてしまえば、誰がメディウスを討つというのか。しかもファイアーエムブレムを託された勇者が討ち滅ぼされたとなれば、各地の反乱軍の意気も消沈するに違いない。大司祭ガーネフはそれを狙ったのだ。ならば、逆にこ

の状況を利用する好機ではないか。アカネイア宮殿を解放し、同時に大司祭ガーネフを倒す。ドルーア帝国軍の占領下にある人々にとって、これほどの朗報があろうか。

ハーディンは決心した。もともと選択の余地などないのだ。ここまで来て、マルスを見捨てることなど出来るはずはない。アカネイア大陸全土の希望を託された、マルスを見殺しにすることなど。

「わかった。シーダ、君がマリクを運べ。出来るだけ高く、出来るだけ速く。いいな」

「はい！」

「それとマケドニア白騎士団の三人がそれを援護。長旅のすぐ後に、こんなことになって申し訳ないが」

「とんでもありません。マケドニアを代表して、お力添えをいたします」

「頼んだぞ。アカネイア大陸の運命を、君たちに託す」

重く、壮麗な樫の扉を押し開けた途端、マルスの体は恐怖と驚愕で凍り付いた。

部屋の中が鮮血で染め抜かれている。豪奢な絨毯も、漆喰の白い壁も、壁に掲げられた様々な装飾品も、ことごとく真紅の血で染まっていた。血だけではない。手や足だったとおぼしき肉片や骨片、そして臓物が、玉座の間の至るところに散らばっているのだ。

まるで人間が弾け、周囲に四散したかのような有様だ。数々の修羅場をくぐり抜け、多少のことでは動じなくなっていたマルスだったが、さすがにその様相に吐き気を催さずにはいられなかった。

部屋の外の様子も確かにすさまじい。マルスが切り倒した無数の兵の軀が、折り重なるように連なっている。だがこの玉座の間の惨状は、そんな生やさしいものではない。ただ一言、異常だ。
そして部屋の中央、宝玉で飾られた玉座に司祭ボーゼンの首が転がっているのを見た時、マルスは背筋に冷たいものが走るのを感じた。自分が倒そうと思った相手が、部屋に辿り着いた時にはすでにこと切れていた。しかも肉体の残片を周囲に撒き散らして。
椅子の上に置かれたボーゼンの首は、何か呪いの言葉を呟いているようにも見える。
——魔物でもいるのか、この部屋には？
マルスはレイピアを手に、ゆっくりと室内に身を進めた。ともかく、何があったのかを確かめねばならない。だが一歩足を踏み入れた途端、すさまじいまでの邪悪な気配を感知した。反射的に身をかがめ、転がりながら部屋の奥に進む。
そして壁に行き当たったところで跳ね上がるように立ち上がり、青眼の構えで敵影を求めた。
「…………」
何か言おうとしたが、声が出なかった。信じられない。体が震えている。手にしたレイピアの剣先が、体の震えを増幅して揺れる。寒いのか。そんなはずはない。額からは、滝のように汗がこぼれ落ちている。恐怖だ。かつて感じたことのないすさまじい恐怖が、マルスの体を包み込んでいた。
——これは、殺気、殺気ではない。違う。そんな明確なものではない。邪悪な気だ。それしか言えない。ただひたすらに邪悪な生命の波動だ。しかし、これは、本当に人間なのか。人が放つよう

な気じゃないぞ。
天一流を極めたマルスは、周囲に漂う気の流れを感知する技を身に付けた。だからこそ逆に、その膨大な邪悪な気の奔流に押し潰されようとしているのだ。
「誰だ？　何者だ⁉」ようやく声が出た。マルスの強靭な精神力があってこそだ。だてに気を感じることの出来る人間ならば、とうに発狂していておかしくない。
「遅かったな……マルス・ノア・アリティア……」
ぞっとするような響きを持った声だった。冥府の底から届いたような、そんな声だった。
黒いローブを纏った一人の男が、部屋の奥の暗がりの向こうから姿を現した。最初からそこにいたのか、それとも暗闇を通じて瞬間移動して来たのか。マルスにはわからない。だが、初めて見る相手であることに疑う余地はない。これほどの不気味な波動を伴った男を、一度見て忘れるはずはない。
だが初対面でありながら、マルスはこの男を知っていた。確かにその名を知っていた。常に戦慄と畏怖を伴い人々に語られる、その邪悪な名を。
「大司祭……ガーネフ！　貴様が⁉」
「ほほう。なかなか、勉強、熱心だ。私の名を、知って、いるか？」
ぴちゃぴちゃと、唾液を口にためながら男は言葉を紡ぐ。まるで舌なめずりするかのように。
「知っているとも。皇帝メディウスの片腕となり、アカネイアに破滅をもたらした暗黒の大司祭！」

「ク、ク、ク……。そこそこ賢い、男だった、が、いかんせん、無能、過ぎた。だから、殺した」
ガーネフはマルスの眼光を物ともせず、滑るような動きで玉座にまで近付いた。そしてボーゼンの首を取り、子猫をあやすように手の中で弄んだ。
「ガーネフ！」
「ふん、ふん、威勢のいい、坊や、だ。そんなに、怖い、顔をして、どうした」
「貴様は我々の裏をかき、この玉座の間で僕を待ち伏せた。そうだな⁉」
「……ふん、ふん」
「しかし、逆だったな。ここで大司祭ガーネフを打ち倒したとなれば、我々反乱軍の意気は、さらに上がる！」
「ほほう、で、どうするね？」
「ガーネフ、貴様を討つ！」
「ク、ク、ク、ク……」
「何がおかしい⁉」
「いや、アリティアの、男は、みんな、そうなのか、ね？　三年前殺した、男も、同じような、ことを、言った」
「三年前殺した、男だと⁉」
「そうさ、お前さんの、よく、知って、いる」

「貴様……」
「コーネリアス王だぁね」
「ガーネフ!!」
地上に棲むあらゆる動物よりも速く駆けた。そして音の速さに限りなく近い斬撃を繰り出す。下から上へ。ジェイガンすら極めきれなかった天一流最大の奥義、〝斬椿の太刀〟にも似ている。しかし我流だ。戦場の中で極めた必殺の剣だ。
マルスはその刹那、勝利を確信した。これで斬れぬのは悪霊のみだ。ガーネフは決して魔物でも、悪魔の類でもない。れっきとした人間だ。ただ一つ、暗黒の極限に位置する魔道の者である以外。
闇がマルスを押し潰した。闇から伸びた見えない触手がマルスの五臓六腑を締め付け、血管を潰し、神経を打ち砕いた。全身に電撃が走る。それは苦痛という名の耐え難い痛みだ。
手にした剣先がぴたりと止まった。そこから先、振り上げることも、振り降ろすことも出来ない。呼吸が止まる。眼球がこぼれそうなまでに前へつんのめる。関節という関節がきしみ、筋肉が引きちぎれるような感覚を抱いた。幻ではない。現実だ。現実にマルスは派手にもんどりうち、ボーゼンの血で紅く染まった床をのたうつ。
「ごがッ!」体中が焼け付くように痛む。痛みなどという生易しいものではない。だが、不思議と血は流れていない。外傷もない。むき出しになった神経を逆撫でされた、そんな痛みだ。余りの激

痛に、マルスは意識を失いそうになる。

「一撃、で、終わりか？　お前の、父親は、二発まで、耐えた、ぞ……」

薄れる意識の底で、ガーネフの嘲笑に満ちた声が木霊する。自分の身に何が起こったのか。マルスは到底理解出来ない。だがようやく、ガーネフと共に語られる〝マフー〟という魔法の名を思いだした。敵の神経を麻痺させ、すべての攻撃を封じつつ打撃を与える。精神の脆い並の戦士ならば、一撃でその体は粉々に砕けるのだという。今までマルスは、それをただの噂程度にしか考えていなかった。増大された恐怖が生み出した、幻としか思っていなかった。いかに魔法の力が強大とはいえ、剣で勝てないはずはない。そう信じていたのだ。

そうではなかった。絶望の底でマルスは痛感した。自分の剣が、かすりもしなかった。剣を振り抜くことすら出来なかった。ただの噂と思った魔法に父が殺され、そして今、自分が死の淵に立たされている。

だが、そこで絶望するマルスではない。確かに全身が麻痺し、焼け付くような痛みで満ちている。しかし、心の奥に点る怒りの炎だけは消えてはいない。すさまじい戦う意志が、マルスをゆっくりと立ち上がらせた。レイピアを杖代わりに悠然と立つ。胸には、赤い光を放つファイアーエムブレム。発狂しそうな激痛にむせびながら、マルス・ノア・アリティアは果敢に立った。

「ほほう、よく立った。よく。偉いぞ」ガーネフは骨と皮だけの、小枝のような両手で小さな拍手を送った。その体は、絶望的なまでに邪悪な気と、絶対の自信に満ちている。

「貴様……ガーネフ。父の、姉の、仇を、今」もはやマルスに、かつての優雅さは微塵もない。ただよろよろと、にじり寄るようにガーネフに近付く。「姉さんの、エリス姉さんの、仇を……」

「その体で、何が、出来る？」

「ガーネフ！」

最後の賭けだった。天一流瞬撃の剣。瞬間の斬撃を身上とするその剣の冴えは、未だマルスの体に僅かではあるが残されていた。しかし最後の一撃である。マルスはわざと疲弊したふりを見せ、間合いの内にゆっくりと近付いた。そして今、渾身の力を込めた一撃をガーネフに向けて放った。

「覚悟！」

「愚か、な」

ガーネフがその手のひらをマルスにかざした。手から闇があふれ出る。暗黒の魔法マフー。まるで堅牢な闇の壁に突き当たったかのように、マルスの体が再び弾ける。弾けると同時に体中の臓物が、血管が、神経が、引き裂かれるような衝撃を受けた。

マルスのささやかな策略も、ガーネフには通じなかった。耐え難い苦痛の中、天井近くまで吹っ飛んだマルスは、床に向けて真っ逆さまに落ちていく。まるで道ばたの石ころのように。マルスは左肩から床に叩きつけられた。即死ではなかった。だが、虫の息であることに違いはない。強靭な四肢からは力が消え失せ、それにつれて崇高な理念も、不屈の闘志も、徐々にその光を失っていった。



「ほう、まだ、生きて、いるか。まともに、儂のマフーを二度も喰らい、まだ、息をしておるとはお前さんが、初めて、じゃ」

ガーネフの足音が近付くのを感じた。聞いてはいない。耳の神経も麻痺(まひ)している。マルスはガーネフの声を、足音を、体全体で聞いていた。

「しかし、坊やは、間違って、おる。父の仇(かたき)、姉の仇と、言ったが、お前の姉、エリスは、まだ、死んでは、いない」

ぴくり。マルスの体がわずかに震(ふる)えた。自らの意志では、すでに身じろぎ一つ出来なかったが、姉エリスが生きていると聞かされ反射的に震えたのだ。それほどの衝撃を受けた。

「お前の、姉はな、法力の、奥義(おうぎ)、を極めたのじゃ。すなわち、死人を蘇(よみがえ)らすという、伝承、の み、で語られていた、奇跡の、法力〝オーム〟。その、力を、復活させた、のだ。だからこそ、殺されず、に済(す)んだ。メディウスが、その力を、欲してな」

姉は生きている。三年前のあの日、アリティアの城と共に燃えつきたはずの姉が。ならば、ここで倒れている場合ではない。立ち上がり、姉を助け出さねばならない。マルスの心に不屈の精神力が甦(よみがえ)った。だが、肝心(かんじん)の肉体がぴくりとも動かない。いかに力を込めても、身震(みぶる)い一つ出来ない。

「さ、しまいだ。手向(たむ)けだ。再び、マフーで、闇の、底に、落ちるが、いい」

マルスは心の奥底で、かすかに死を予感した。闘志は残っている。執念(しゅうねん)もある。だが体が動かな

ければ、それは宝の持ち腐れにしか過ぎない。ガーネフの左手が、すーっと前に伸びた。
その時――。天窓が砕け、何かが飛び込んで来た。
シーダだ。ペガサスにまたがったシーダと、そしてマリクの二人だ。ガラスの破片が光の飛沫のように周囲に飛び散る。マリクはすぐさまペガサスから飛び降り、ガーネフの眼前に軽やかに着地した。
「マルス！」シーダとマリクが同時に叫ぶ。
しかし答えはない。二人の目には、マルスがすでにこと切れてしまったように見える。
「大司祭ガーネフ！」マリクは怒りの形相でガーネフに向き直った。
「ほう、ほう、仲間が、わざわざ、後を追って、死にに、来たか」
「マルスの無念、そしてカダインの同胞たちと、我が師ウェンデルの仇、今ここで討たせてもらう！」
羽織ったローブを脱ぎ捨て立ちはだかる。それを見てガーネフは、不気味にほくそえんだ。
「魔導士が、ローブを、捨てる、か。それは、すなわち、死の、覚悟を持った時」
「いかにも！　貴様と刺し違えるのなら、この命、惜しくはない！」
「たかが、一介の、魔導士に、何が、出来る。あのウェンデル、さえも、私の、マフーの前には、赤子同然、だったの、だぞ」
「試してみるがいいさ」

「ほう、ほう……」
緊迫した二人のやりとりをよそに、シーダはペガサスを駆け降りマルスのもとに駆けた。そして血の滲んだ腕で、手首の脈を測った。
「大丈夫よ、マリク。まだ生きてる。マルスは生きているわ！」
「わかった。下がっていろ。巻き添えを喰う」
「ええ」シーダは諾き、血にまみれたマルスを引きずるようにして部屋の隅へ移動した。
「巻き添えか。そこまでの、戦いに、なるとは、どうにも、思えんが」
「ほざけ！」
「ほほう？」
「ガーネフ。貴様、自分のしたことがわかっているか。同じアカネイアの人間でありながら、その強大な力で、多くの同胞を殺し、平和なカダインすらも踏みにじった。その意味が！」
「ク、ク、ク……」
「僕は祖国アリティア崩壊の時、駆けつけられないまま終わった。コーネリアス王を、エリス王女を助けられなかった。その無念を晴らそうと、老師ウェンデルに出立の許可を願ったんだ。しかしお前は、その第二の故郷カダインをも焼き払った。二つの国を、二つの国の友人たちを、ともに失ったこの無念、お前にはわかるまい！」
「能書きは、いい」ガーネフはゆっくりと左手をかざす。暗黒の魔法マフーだ。

だが、これこそマリクが待ち望んだ瞬間だった。両手を天にかざし叫ぶ。ガーネフのマフーを打ち破る、唯一無二の魔法の名を。

「天の星々よ、我が身に力を貸し与えよ！　スターライト・エクスプロージョン！」

天にかざした両手をそのまま前へ。ガーネフの顔が驚愕に歪む。とうに表情を無くしたかのような皺にまみれた顔面が、恐怖にひきつる。

「まさか、スターライト⁉　どこで、その力を⁉」

マリクの両手から、青、赤、白、黄の、鮮やかな光芒が放たれた。星の魔法スターライト。昼でもかすかに煌めく星々の輝きを集め、それを集束して放つ閃光の呪文。

「こざかしい！」ガーネフの左手から闇の壁が現れた。

「ガーネフ！」

「小僧！」

それぞれの放った魔法がぶつかり合う。スターライトとマフー。光と闇。二つの力は、共に中空で激突。互いに激しく押しあった。周囲に閃光と暗黒の火花を散らす境界付近では、向こう側の景色が陽炎のごとく揺らいでいる。すさまじい魔力の奔流に、空間そのものが歪んでいるのだ。

ぶつかり合う力は、激突したまま微動だにしない。危険な状態だ。僅かでも力を抜いた方が、一気に敵の魔力に押し潰される。魔力と魔力の鍔迫り合いだ。

「くそ……！」マリクは渾身の力を込める。

「ほ、ははう？」一方のガーネフは、再び不気味な笑みを蘇らせた。「わかったぞ、小僧、スターライト、を、身に付けたはいいが、精神力、自体が、まだ、膨大な魔力を扱える、までに、成長、していない、ようだな。スターライトを、手にして、日が浅いと、見た」
「く、くそっ！」
「無謀、だったな。所詮、付け焼き刃、で、どうにか、なるような、魔法、ではない。一瞬、で、も焦った、私が、愚か、だった。ク、ク、ク。ならば、この、まま、押し切る、のみ」
ガーネフの左手から放たれる闇の奔流が、その勢いを増した。マリクは果敢に光芒を放射し続けているが、じりじりとマフーの力が上回りつつある。スターライトとマフー。押し合う境界が、徐々にマリクの方へと近付いていく。
「……く、く！」
「ク、ク、ク……」
額から玉のような汗がこぼれる。だがその汗は不思議に赤い光を放っている。汗ではない。血だ。膨大な魔力の制御に耐えきれず、毛穴から血液が滲んでいるのだ。マリクの肉体には、地球を取りまく様々な星の輝きが一身に集められている。肉体に変調をきたさないのが不思議というものだ。
「マリク！」シーダが叫ぶ。
苦痛に顔を歪めながら、マリクは押し殺した声で叫び返した。「頼む、シーダ。今のうちにガーネフに止めを！　術に集中している今なら出来るはずだ。早く！」

「わかった！」
シーダは迷うことなく剣を抜き、ガーネフに向かって突き進んだ。しかし。
「甘い、な」
ガーネフは、遊んでいた右手をシーダに向けた。
その手のひらから巨大な闇の壁が現れる。マフーだ。ガーネフは左手でマリクの相手をしつつ、右手でシーダに向けてもう一つのマフーを放った。確かにファイアーやブリザー程度の魔法なら、両手を使った連射も可能だ。だが、まさかマフーという最上位に属する魔法でそれを行うなど。
マリクの驚愕をよそに、シーダは闇に弾かれ中空を舞った。白い手が、足が、そして長い髪が、舞踏を舞うように空中でなびく。やがてシーダは、糸の切れた操り人形のように床に倒れ伏した。
「シーダ！」マリクが叫んでも、シーダはぴくりとも動かない。ただ生気の失せたうつろな瞳で、宙を見つめている。
「今度は、そちら、かな」
ガーネフはシーダを打ち倒した右手を、左手の脇に置いた。そして再び右手のひらから闇が放出される。右手と左手。これが本来のマフーの威力だ。マルスやマリクの相手をしていた時は、その力を抑えていたに過ぎない。
「⁉」
叫ぶ間もなく、マリクの放つスターライトはガーネフのマフーに圧倒された。堰を切ったように

暗黒の波が押し寄せ、マリクの体を洗い流す。二度、三度、空中でマリクの体は回転し、背中から床に叩き付けられた。

「う、く……」

かすかな呻き声を聞き、ガーネフは愉快そうにほくそえんだ。「ほう、ほう。くさっても、カダインの、魔導士、だ。魔法に対する、耐性は、なかなかの、もの、だ、な。しかし……」ガーネフは、倒れ込んだマリクの脇に進む。「魔道書、を、奪い取られて、は、な」

マリクの手にするスターライトの魔道書を、奪い取ろうというのだ。今後、自分の前に立ち塞がるものが現れないよう。

「これで、この私の、恐れる物は、なくなる。そうなれば、あの暗黒龍、メディウスも、ク、ク、ク。いい、いいぞ。ドルーア帝国が、この私の、物になる日も、近い」

ローブの下から細い腕を伸ばし、マリクの懐をまさぐる。だが肝心の魔道書を探り当てたところで、ガーネフの顔は恐怖にひきつった。彼の頭頂に、背後から銀色の剣先が押し当てられている。

マフーを放つことはもちろん、振り返ることも、逃げることも出来ない。少しでも動けば、頭から尻まで、瞬時に剣先が走り抜けるだろう。

「殺したな。シーダを、殺したな!」怒りに打ち震えた声が背後から響く。

誰かは確かめるまでもない。シーダの最後の悲鳴で奇跡の力を呼び起こされた、マルスだ。

「馬鹿、な。何で、立ち、上がれる。何で、気配、を、感じさせず、近寄れる？」
いかなる力を持った魔導士と言えど、こうまで見事に背後を取られてはどうすることも出来ない。
ガーネフは自分の立場をわきまえていた。微動だにせず、背後のマルスに言葉を放つ。
「待て、儂は……」
躊躇も迷いもなかった。マルスは手にしたレイピアを力の限り振り降ろした。その鋭い剣先は頭蓋を断ち割り、脳を分かち、続く臓器を、肉を、正確に左右に両断した。
「！」
ガーネフの体は見事に寸断され、ゆっくりと右と左に分かれていく。その向こうから、血にまみれたマルスが姿を現した。
「シーダ……」
ガーネフをついに打ち倒した。が、今のマルスにその感慨はない。深い悲しみと絶望だけがある。
やがて敵は勢いを失い、アカネイアの宮殿は反乱軍の手に落ちるだろう。
しかしシーダがその目を覚ますことはない。マルスはよろめきながらもシーダの亡骸に近付き、開いたままのその瞼を閉ざした。
そしてうっすらと紅色をたたえたその唇に、血にまみれた自分の唇を重ね合わせた。

# 第7章　悲しみの大地

雷雨の夜だった。
間断なく降り続く雨が、アカネイア宮殿をおぼろな幻影のように見せている。時折瞬く稲妻の閃光がなければ、そのまま宮殿は本物の幻影となり、闇の中に溶けていってしまうようにも思えた。
そんな宮殿の渡り廊下を、ジュリアンがそろそろと進む。何かを探すように、左右に視線をめぐらせながら。通路の至るところには亀裂が走り、折れた鏃や剣戟の跡、血痕や崩れた壁土が散らばっていた。また、ほとんどのガラス窓は割れ、壁布は引き裂かれ、通路をうがつ風穴も珍しくはない。
先の戦いから一週間。外壁の補修に全力が注がれ、未だ内部の修理は手つかずの状態だった。
「やれやれ、これで兵の死体でも転がってた日にゃあ……」
手にしたランタンと、壁の燭台の明かりを頼りに進む。名うての盗賊とはいえ、さすがにこのような場所には慣れていないらしい。ましてや外は漆黒の闇と雷雨。どのような強者でも、背筋にうすら寒いものを覚えるだろう。だから通路の窪みから現れた人影を目にした時、ジュリアンはそれこそ飛びあがらんばかりに慌てふためいた。

「う、うわわわわっ⁉　わわっ！」
とっさに手近な柱にしがみつく。人には見られたくない醜態だ。だが驚かせた張本人は、柱にへばり付くジュリアンを、まじまじと覗き込む。
「あら？　ら？　ジュリアンさん⁉」
「あ？　あ、こりゃどうも……。あんた、マケドニアからやって来た……」
「エストだよ！」
「あ、そ、そうか。そうか。はは、は……」
慌てて平静を装い、柱から身を離すがもう遅い。エストはジュリアンの無様な姿を思い返し、くっくと必死に笑いをかみ殺している。
「失礼よエスト。そんなに笑っちゃ！」
「そうよ、いくら、おかしかったと、いっても……」
エストの背後に広がる闇の中から、パオラ、カチュアの二人が姿を現した。
「でも、でも！　うくッ！　おっかしいんだもん！」
ジュリアンはふてくされて、腕組みしながら苦虫をかみつぶす。パオラはエストを押し退け、さもとって付けたように話しかけた。
「ど、どうしたんですか。こんな夜更けに。この南側の見張りは、今夜は私たちの番ですけど」
「あ、ああ。いや、ニーナ王女がマルス王子と、緊急の軍議を開きたいそうなんだ。呼んでくる！」

うに言われたんだけど、さ」
「マルス王子、か。カチュア、知らない？」
「見てない、わね……」
「うくっ！　あ、あたし、見た見た！」未だに笑いの収まらぬエストが手を上げた。
「本当？」
「うん。ナバール様が見張りに立ってる、北の庭園に向かったみたい。……あは、あはははっ！　あはははっ！」たまらず、エストは堰を切ったように笑いだした。
「まったく。同じペガサスナイトだってのに、シーダ様とはえらい違いだぜ」
　単なる皮肉のつもりだったのだが、口にしたジュリアン自身も、それを耳にした三姉妹も、同じように黙りこくってしまった。エストの笑いも消え去った。気まずい沈黙がその場に残る。かすかに、遠方の落雷の音が響いた。
「ごめんなさい……」うってかわって、今にも泣き出しそうな顔をしたエストが呟く。
　ジュリアンは頭を掻きながら、消え入りそうな声で応じた。
「いや、別に、そんな意味じゃ……」
「いいえ、いいんです。私たちがもう少し早くこのアカネイアに着いていれば、マルス様もマリク様も無傷で、そしてシーダさんも……」
「いや、その、そうじゃないんだ。そうじゃ。と、とにかく、北のバルコニーだな。すまなかった。

行ってみるよ！」
うつむくパオラを尻目に、ジュリアンは慌てて踵を返した。どこかで、再び落雷の音が響いた。

マルスとナバールは、雨に煙る庭園で対峙していた。
数年前、この北の庭園では満月の夜ごとに晩餐が催され、王宮楽団が壮麗な交響楽を奏でていた。しかし今は、瓦礫が散乱する広大な空き地にしか過ぎない。伝説の勇者をかたどったブロンズ像は無残に手足をもがれ、水瓶を持った女神像が清水をはぐくむ泉は、乾ききって久しい。
そして庭園を仕切る城壁は無残に崩れ、切り立った断崖の向こうに広がる黒い海を垣間見せていた。その様は、あたかも冥府への入口が開いてしまったかのように見える。
三年前のドルーア軍の侵攻と、一週間前の解放軍の奪回劇。その二つの戦いにより、アカネイア宮殿はかつての壮麗な面影を失っていた。
「本当に、行くつもりか……」ナバールが口を開く。
対するマルスは、何も言わずに黙って諾いた。「だろうな。多分、そうだろうと思った。しかしそれは、このアカネイア大陸のことを思ってではない。皇帝メディウスのもとで生きている、アリティアのエリス王女。つまりはお前の姉だ。その王女が復活させたという、蘇生の法力〝オーム〟。それを求めて」
不意に、閃光が二人を照らしだした。わずかに遅れて轟音が響く。

「お前はその法力で、シーダを蘇らそうとしている。アカネイア大陸解放、祖国アリティア奪還。そんな崇高な使命をかなぐり捨て、ただ、自分の愛する者の命を蘇らせるためだけに、メディウスを討つ。違うか、マルス王子?」

ナバールの言葉は鋭い剣先だった。多くの敵をなぎ払った必殺の剣技よりも、なお鋭利な一撃の白刃だった。再び閃光が瞬いた。続けて轟音。先ほどよりも間隔は短い。稲妻は、ゆっくりとこちらに向かって近付いているようだった。

「……その通りだ」マルスはうつむいたまま話しだした。「タリスを旅立って以来、祖国アリティア解放のためにひたすら戦ってきた。もちろん今でも、その情熱は失せてはいない。けど、それ以上に、今はシーダを助けたいんだ」

降りしきる雨が、青い甲冑を滝のように伝う。そして再び滴となって、ぽつぽつと、枯れきった芝生の上にこぼれた。

「メディウスを討つことの出来る唯一の剣、神剣ファルシオンの行方は判らないままだ。いや、それ以前に、敵地のど真ん中に乗り込むんだ。勝算はないに等しい。でも、僕はどうしても行きたいんだ」

「しかしな、マルス。それが許されると思うのか。俺を含めた誰もが、お前の言うアカネイア大陸解放を夢みて戦ってきた。ジェイガンや、死んでいった多くの仲間のことを思い出せ。お前は今や、お前であってお前でない。胸に輝く赤い紋章は、ただの飾りか。違うだろう。多くの戦士の想

いが込められた、救世の勇者の証、ファイアーエムブレムだ。その重さを思い出せ。お前は勇者アンリの血を引く、アリティアの第一王子なんだぞ」

その言葉に、マルスはがくりと膝を折った。力なく両手をだらりと下げ、うつむいたまま膝を地に付けた。

「判っているさ。けど、どうにも出来ない。行くしかない。そんな考えが頭にこびり付いて、離れないんだ。ファイアーエムブレムか」マルスは胸に輝く赤い紋章を握り、言葉を繋ぐ。

「僕はもう、これを持つ理由も、資格もないんだ」

雨が二人を包み込む。泣いているのか、マルスの肩が小刻みに震えていた。

「立て、マルス」

「え?」

「もしもこの俺が、そのような腑抜けに成り下がったお前を斬ると言ったら?」

ナバールは腰からすらりと剣を抜いた。今まで数え切れぬほどの敵を寸断した剣が、不気味な光彩を放つ。マルスは立ちふさがるナバールを、ただ呆然と見つめた。

「どうする!」

有無を言わさぬ口調だった。すさまじい殺意をたたえた瞳で、マルスを射抜くように見据える。

戦いで培われた本能が、マルスをとっさに立ち上がらせた。ナバールは本気だ。本気で自分を殺そうとしている。問い返すまでもない。身を包む威圧感が、剣先から放たれる殺気が、何よりも雄弁

に物語っている。マルスはわずかに躊躇したが、すぐに明確な意志を持って腰のレイピアに手をかけた。最初は殺されても仕方ない、皆の期待を裏切ったのだから、ここで白刃にかかっても当然だという風に思えた。が、すぐにその考えを打ち消した。

——ここで諦めてどうする。僕の決意は、その程度のものだったのか。仲間の死に背を向けてまで、崇高な使命をかなぐり捨ててまで、シーダを生き返らせたいと願った。それを簡単に諦めてどうする。一時の気の迷いだったと、自分から証明するようなものではないか。仲間の死、祖国奪回、アカネイア解放。それらと引き換えに望んだものを、簡単に諦められるものか！

マルスは心を引き締め、その瞳を凝らした。ナバールは剣先をやや下に降ろし、殺意、闘志、憤怒、寂寞、それらが渾然となった不可思議な色の瞳でマルスを見つめている。

対するマルスは、青眼の構え、すなわちすべての剣技の基本である中段の構えで、相手の出方をじっと待った。先に動いても得はない。石のように凝固し、黙してナバールの瞳を睨む。

両者の脳裏では、互いに相手の最初の一撃を推し量る思索がめぐらされているのか。

そうではない。ただ虚無しか有り得ない。共に最初の一撃が、最後の一撃になることを理解している。この広大なアカネイア大陸で、それぞれ十指に入ろうという剣士が相対しているのだ。余計な推量は、単なる邪推にしかならない。相手が打ち込んで来たら、自分の本能の命じるままに剣を振るうのみ。それこそが唯一の策だ。だからこそ、二人は動けないままでいた。

閃光が煌めく。ほぼ同時に轟音。稲妻は、二人の頭上にまで迫っていた。

その時、ナバールの体から殺気が消え失せた。殺意の滲んだ面もちから一転し、柔らかな笑みをその顔に浮かべる。そしてゆっくりと、手にした剣を鞘に収めた。「もういい、マルス」

そう言われても、何のことだか皆目見当が付かない。ただ張りつめた糸が切れたように、マルスは力なく剣先を下げた。

「どういうつもりなんだ、ナバール」

「済まない。しかし、二つのことを確かめたかった」

「二つの、こと？」

「一つは、神剣ファルシオンなくして皇帝メディウス、いや、暗黒龍のメディウスと戦えるかどうか。その実力のほどを確かめたかった」

ようやく気を取り直したマルスは、レイピアを鞘に収めながら問う。「で、どうだったんだ？」

「合格だ。あのまま互いに剣を繰り出し合っていれば、どちらも無傷では済まなかったろう。僅か一年で、よくここまで成長した」

「もう一つは？」

「お前の決意だ。愛する者のためにメディウスを討つ。それはそれでいい。だが、一時の感情の高ぶりで成せるほど、安易なことじゃない。熾烈なまでの意志の力が必要だ。そして、お前はそれだけの決意を持っていると知った。充分だ」

「……ナバール」

「勘違いするな。お前の決意に心打たれた、そんな安易な理由ではない。俺はただ、常に事実を見つめているだけだ。結果的に、メディウスを倒せばドルーア帝国は瓦解する。当初の目的は果たせるだろう」ナバールは天を仰いだ。降りしきる雨粒が頬を叩くのを気にもとめず、逆に心地よさそうに豪雨に顔を晒している。「しかし、しかしなマルス。所詮、国のため、アカネイアのためなどとは言っても、戦士たちは皆、戦場にあっては愛する女や、子どもたちの面影しか思い浮かべない」

「そう、だろうか……」

「俺にもそうだとは断言は出来ん。だが確実なのは、国などというものには常に実体がない、ということだ。城は焼けても人は残る、か。どこかで聞いた台詞だが」

忘れはしない。それはかつて、マルスがシーダに向かって叫んだ言葉だった。そして自らの命を断とうとしたナバールに対し、シーダが口にした言葉だ。

「マルス。お前の父コーネリアス王が、どんな人物だったかはよく知らない。だが神剣ファルシオンを手に先陣を切った時、その心の中には、自分の国アリティアへの想いだけがあったのだろうか。俺はそうは思わない。お前や、お前の姉の姿があったに違いない」ゆっくりと、ナバールはマルスに向き直った。不敗の剣皇ナバール。一撃必殺の剣士ナバール。その名からは思い浮かべられない、屈託のない笑みを浮かべて。「どうも、これ以上うまい言い方は思いつかない。だが、国という目に見えないものに縛られて死ぬ男よりは、目の前にいる女を守って死ぬ男の方が、俺は信用出来る。

忘れるなよ、マルス。ジェイガンも、シーダも、お前を守ろうとして命を落としたんだ。決してアカネイアのために死んだんじゃない」

マルスは、降り注ぐ雨が心の奥にこびり付いていた〝何か〟を、洗い流してくれるような感覚を抱いた。今までは、ただ闇雲にアリティア再興のためと戦い続けてきた。だがそれも今にして思えば、父の、姉の復讐のためだったのではないか。その感情を、祖国復興にすり替えていただけではなかったのか。「国のためでなく、人のために生きなさい」姉エリスの言った最後の言葉が鮮明に蘇る。

――国のために、でなく、人のために……。

国があって人が住むのではない。人がいてこそ、国が出来るのだ。

「判ったよ、ナバール」

そう言いながら向き直った時、バルコニーの片隅からジュリアンの声が響いた。雨と落雷の音にかき消されまいと、なかば怒声に近い声を張り上げている。「マルス様！　雨の中、何やってんすか！　ニーナ王女がお呼びです！　話したいことがあるって！　緊急の軍議だそうです！」

「ニーナ王女が？」

怪訝な顔のマルスの肩に、ナバールが手を置く。「いい機会だ。王女にすべてを話すんだな。今の自分の心情を。それでも駄目なら、自分の信じるままにしろ」

「ありがとう。ナバール」それだけ言うと、マルスは小走りで宮殿の奥へと姿を消した。

「後悔はするなよ、マルス。俺のようにな」誰に言うともなく、ナバールは低い声で呟いた。
またしても閃光。間髪いれずに轟音が響きわたる。風の流れが変わった。かすかな、皮膚だけでは感知出来ないささやかな空気の乱れがあった。おもむろにナバールは背後を向き直った。
広大な庭園の遥か向こうに、枯れた木々と、伸びきった雑草が連なっている。そのさらに向こう、雨と闇に隠された城壁の辺りに、野獣よりも獰猛で、人よりも狡知な生き物の気配を感じた。
いや、確かに人だ。思い直し、抱いた感触を素直に口にしてみる。
「ただの残敵では、ない」
ナバールは生まれて初めて、自分が敗れるかも知れないという不吉な感覚を覚えた。

「いいな、目的はあくまでマルス王子一人。他には目をくれるな。それでメディウスに対する義理は果たせる」漆黒の鎧を纏った戦士が、背後の闇に囁く。
その顔は、妖美と言っていいほど端正で、肩まで届く長い金色の髪は、白金よりもさらに輝いて見えた。その背後の闇に、同じように漆黒の鎧で身を固めた戦士が三人、影となって伏せている。こちらは開閉式の被いの付いた兜を被っており、顔は見えない。
漆黒の戦士たち。彼らはアカネイア宮殿の城壁を越えた闇の中で、息を殺して周囲の様子を窺っている。
「見張りは、正面の庭園の中央に一人だけか。よかろう。最短距離を行く。正面突破だ」

感情のない声で、先頭の金髪の男がぼそぼそと呟く。その声は豪雨と落雷の轟音にかき消され、わずか一寸先にも届いてはいない。しかし背後の戦士は、同時に小さく諾(うなず)いた。唇(くちびる)を読んだのだ。

「次の落雷と同時に走る」

男たちは、雨に打たれながらじっとその時を待った。

その間、金髪の男は油断なく周囲の状況を確認し続けた。前方に広がる庭園の中央に立つ男は、その背をこちらに向けている。好機だ。次に稲妻が閃(ひらめ)いたら、背後の三人の部下があの男を斬り倒す。そして自分はそのまま部下を引き連れ、宮廷内に乗り込みマルス王子を両断すればいい。造作もないことだ。今までも、同じような手順で敵将を葬(ほうむ)ってきた。僅(わず)か数人の部下で敵城に侵入し、その中枢(ちゅうすう)を叩く。鬼神(きしん)の速さと魔物の猛々(たけだけ)しさ、そして悪魔の知略(ちりゃく)があれば、数万の守備兵も単なる飾りでしかない。ましてこのアカネイア宮殿に潜入するのは、これで二度目。慣れたものだ。失敗は有り得ない。絶対の自信を胸に秘め、金髪の男は無言でその時を待ち続けた。

やがて天地を貫く閃光が走る。合図はない。背後の闇から、三人の男が音もなく飛び出した。続く轟音が周囲に響きわたる頃には、すでに庭園の中央にまで突き進んでいる。だが、

――消えた？

先ほどまで立っていた見張りの男が消えた。稲妻の閃光が瞬(また)いている間に、姿をくらませたとしか考えられない。それしか考えられないが、信じられなくもある。――まさか神速(しんそく)を誇る彼の部下――

も、なお速く行動出来るなど。しかし現に、部下は獲物を見失いたじろぐばかり
閃光が走る。稲妻ではない。瞬間の剣戟の閃きだ。一回、二回。閃光は三日月のごとき半円を描いた。そして次の瞬間には、黒い兜を割られ、二人の部下が同時に斬り捨てられている。
残った一人が果敢に応戦したが、いかんせん、相手は目に見えない光の連なりである。闇雲に放った斬撃は、虚しく空をかすめた。
「グッ！」断末魔の叫びと共に、漆黒の鎧を纏った最後の一人が倒れ伏した。
ことごとく打ち倒された三人の男は、相手の顔をまともに見てもいないだろう。しかし金髪の男は違った。確実に相手の動きを、その太刀筋を見切っていた。だからこそ、あえて剣を交わせてみたいと思ったのだ。
「見事。その閃光の剣、剣皇の技と見受ける」
闇と雨の中に溶け込んでいたナバールが、その姿を露にした。抜刀はしていない。しかし手は柄にかけたまま、じっと金髪の男を凝視する。底知れぬ黒さをたたえた鎧。その胸に刻まれた紋章。それで充分だった。闇と雨にまぎれて放たれた自分の剣を、そうそう見破れる男がいるはずはない。
「私はグルニア黒騎士団の将軍カミュ。故あって、マルス・ノア・アリティア王子の命を貰い受けに参った」
やはりか。ナバールは心の底で呟いた。少数精鋭を身上とするグルニア黒騎士団。そして、それを率いる智将カミュ。大司祭ガーネフと並ぶ、皇帝メディウスの有能な片腕。その男が、今、自分

の目の前に立ちふさがっている。
「我が名はナバール。人は剣皇と呼ぶ」
「そこを、通してもらいたい」
「貴公も戦士ならば、自らの剣で道を切り開くがいい」
「……だろうな。ならば我が祖国のため、力ずくでも道を開けてもらう」
金髪の男、カミュは、ひどくゆっくりとした動作で腰から剣を抜いた。
その瞬間、ナバールの表情が驚愕のあまり歪む。
「まさか、その剣!?」
「いかにも!」カミュは抜いた剣を、天高くかざした。
細身の剣だった。一見、何の変哲もないレイピアのようにも見えた。だがその刀身は、闇の中にあって不思議な光芒を放ち続けている。鋭く尖った切っ先からは、霧のような霞が立ち昇っていた。
「まさか、伝説の、神剣ファルシオンが、何故ここに!?」
ファルシオン。ナバールが呻くようにその剣の名を呟いた。勇者アンリが愛用し、暗黒龍メディウスを封じ込めたという聖剣。そして代々アリティア王家に伝わり、コーネリアス王の死と共に行方知れずとなっていた伝承の剣。それが今、ナバールの眼前で鮮やかな光芒を放ち続けていた。

勢い込んで玉座の間に向かったマルスだったが、そこには、ニーナ王女とハーディンの二人がい

るだけだった。緊急の軍議。どうやら、そのような雰囲気でもなさそうだ。マルスは自分から申し出
った格好になった。皆の居合わせた場所で、自らの決意を述べるつもりだったのだが……。
「すみません、マルス王子。急に呼びつけたりして。怪我は、いいのですか？」
「あ、いえ。もう、大丈夫です。自分でも不思議なほどです。あれほどの傷を負いながら、生活には支障ありません。剣を振ると、まだ僅かに腕がきしみますが」
「そう、良かった」言いながらニーナは、薬湯の注がれたカップに手を伸ばした。
本当ならばマルスは、あまりこの玉座の間に足を踏み入れたくはなかった。つい一週間ほど前、ここでシーダを失ったのだ。修繕されてはいるが、あの死闘を偲ばせる小さな傷や赤茶けた染みが、そこかしこに点在している。その一つ一つが目に止まるたびに、自分の体に刻まれたマフーの痛みが、マリクの悲痛な叫びが、そしてシーダの蒼白な顔が、次々と蘇る。
「マリクもそろそろ、立って歩けるようになるとか。でも、本当に良かった。アカネイアの運命を担うあなたが無事で」どこか寂しそうな表情を浮かべ、ニーナはじっとマルスを見つめる。
脇に立つハーディンは、ただ無言で小さく諾いた。マルスは決心を固めた。どのみち、話さねばならないことだ。ファイアーエムブレムを返上し、しばし、自らの戦いに赴くと。それを告げようと口を開きかけた矢先、王女はまったく別の話を切り出した。
「マルス、そしてハーディン隊長も、私がなぜ、一度は捕らえられたドルーア軍の手から逃れられたか、その経緯を知りませんでしたね」

「はい」マルスとハーディン。二人は同時に諾く。
「それを、お話しましょう」
「しかし王女……」マルスは口ごもった。
今さら、それを聞いてどうなるものではない。それよりもまず、自分の意志を話すのが先だ。そう考えた。だがニーナは、一歩前に身を乗りだしたマルスを押しとどめた。
「いいえ、聞いてほしいのです。特にマルス王子、あなたに」
「判りました」素直にマルスは応じた。
やがてニーナは、遥か彼方を見つめるような、遠い眼差しで語りだした。
「アカネイア王国軍がドルーア軍の侵攻の前に敗れ、この宮殿が陥落した後のことです。この地の統制を委任された大司祭ガーネフは、皇帝メディウスの命に従い、正アカネイア王家の血を根絶やしにするため、父と母を初めとした王族をその手にかけました。やがてただ一人残ったこの私にも、いつしかその順番がめぐって来たのです……」感情はこもっていない。単に事実を述べる、ひどく乾いた口調だった。「私は塔に幽閉され、食物も水も与えられず、そこで朽ち果てるよう仕向けられました。でもある夜、扉を打ち破り、一人の戦士が私のもとに現れました。黒い、漆黒の鎧で身を固めた金色の髪の戦士。そう、それはこのアカネイア王国を攻め滅ぼした張本人。グルニアの黒騎士団を率いる智将、カミュ将軍その人だったのです」
「まさか……」ハーディンはカミュの名を聞き、唖然とした顔で呟く。

「ドルーア帝国の基盤として吸収されたグルニア王国。その将軍カミュ。なるほど、あの男が指揮を取っていたのですか。アカネイアほどの大国が、わずかな期間で攻略された訳が、やっと判りました」

「カミュ将軍は、戦場での情けを知った真の武人でした。このアカネイアを攻略する時も、虜囚の身の安全を保証するというメディウスの言葉を信じたのです」

「それが、裏切られた」これはマルスだ。

「ええ。約束を踏みにじられたカミュ将軍は、自分の信念を全うするため私を解放してくれたのです。皇帝は怒り狂い、私を再度捕らえるため選り抜きの親衛隊を派遣しました。カミュ将軍は自らの部下を率いて親衛隊と剣を交え、数人の部下とともに私をオレルアンへと逃がしてくれたのです」

「そうでしたか。そのようなことが……」ハーディンは大きく吐息をついた。今まで知らされていなかった、ニーナ王女脱出の経緯。それがこのような形のものだったとは。

「それでも私は最初、カミュ将軍をひたすら憎み続けていました。だって、そうでしょう。自分の国を滅ぼした将軍です。今さら、何で私の命を救うのか、そう思っていました。しかしカミュ将軍は、私をオレルアンに逃がす時、こう言いました。――信じる祖国がメディウスに加担しドルーア帝国の一部となった以上、この私も、誇りある黒騎士団の将軍として最後まで戦う義務がある。軍人は最後の瞬間まで国に従う。私は自分のしたことを悔いてはいない。だが、それ以前に一個の武人として、戦いを放棄した虜囚をも手にかけることはしたくない。それだけだ――。その言葉を聞

いて以来、私のカミュ将軍に対する憎しみは消え失せました。そして今度は逆に、この戦乱そのものを憎んだのです」
　それはかつて、レナが口にしたのとまったく同じ言葉だった。戦争という、巨大な流れそのものと対峙する。その根源を憎む。そしてマルスは、カミュに対して悲愴な思いを抱いた。軍人は、最後の瞬間まで国に従う。それが何になるのだろう。目に見えない国という拘束に捕らわれ、その先に希望はあるのだろうか。そう思ったからこそ、マルスは旅立つ決意を固めたのだ。
　胸のファイアーエムブレムに手を添える。そして大きく息を吸い込んだ。ニーナに対して、決意の言葉を述べようと。

　その戦いは豪雨と落雷に覆い隠され、誰に気付かれることもないまま果てしなく繰り広げられていた。ナバールほどの剣士が、闇雲に斬撃を放つ。それは一撃必殺を身上とする、剣皇本来の剣ではない。だが放ち続けなければ、敵の猛攻の前に即座に両断されてしまうだろう。斬撃の障壁だ。ナバールにそのような戦い方をさせるほど、相手の力量はすさまじかった。
「どうした！　それが剣皇と呼ばれた男の剣か！」剣を振るうたび、カミュの金色の髪が左右に揺れる。
「よく言う。神剣の力を借りながら」ナバールは寸前で、敵の斬撃のことごとくを躱している。迂闊に剣で受け、体勢を崩してはまずいと考えてだ。

「ふん、知っているだろう。このファルシオンは、勇者アンリの血に連なる者が手にして初めてその本来の力を発揮する。今は僅かな光を放つのみ。貴様が押されているのは、我が実力によるもの。それを、認めるがいい！」

「この程度で！」

カミュとナバールは、互いにすさまじい斬撃を放ち続ける。光条が幾重にも連なり、そして剣圧に煽られ、地に淀んだ雨水が霧となって舞い上がった。ナバールが渾身の一撃を放てば、カミュは眼前でそれを受け、カミュが剣先を走らせると、ナバールは紙一重の差でそれを躱す。一進一退。互いに一歩も譲らぬ激烈な戦いが、アカネイア宮殿の庭園で繰り広げられていた。

やがて二人の死闘は、じりじりとその場を移していく。庭園をつっきり、砕かれた城壁の方へ。ナバールが少しずつ押されているのだ。

「ぬんッ！」ナバールは数歩飛びずさり、体勢と呼吸を整えた。息が荒い。今まで数百の敵を切りながら、寸分も乱れることのなかった呼吸のリズムが、不規則な不協和音を奏でている。

――強い！

ナバールは相対するカミュを凝視しながら吐き捨てるように呟いた。一方のカミュも、同じ思いでいた。

――我が斬撃のことごとくを受け、そして躱した。剣皇ナバール。噂通りの、いや、噂以上の強者。

それぞれ、次の相手の出方を窺いながら剣を構える。ナバールは斜め中段の構えを取り、カミュは不敵にも、大上段に剣をかざして。すでに稲妻は遠方に去り、雨足も弱まりつつある。だが、二人は微動だにしなかった。
「……では、そろそろ片を付けるか」
「よかろう」
カミュの手にしたファルシオンが不吉な光彩を放った。光の筋を引きずりながら、ナバールの脳天めがけて迫る。しかしそれは予測出来た一撃だった。ナバールは自らの剣で受け止める。
眼前、わずか一寸のところで、二人の剣は火花を散らしてぶつかり合った。
「最後に聞く！」鍔迫り合いになりながら、ナバールは低い声で言葉を投げた。「何故に貴様はファルシオンを持ちだした。メディウスが忌み嫌い、この世から消失することを望んだ剣を！」
「答えはない。いや、アリティアの王子を、せめてこの神剣で貫こうと考えてだ。それがせめてもの情け！」
「違うな！」
「何⁉」
「別の理由があってだ！」
「ふふんッ！」
カミュの口元が歪んだ。無表情だったその美しい顔に、残忍な笑みが宿ったのだ。それは、一々

しく悪魔の微笑みだった。音にも等しい速さで、自らの剣ファルシオンを引き寄せる、鍔迫り合いに渾身の力を込めていたナバールは、突然相手の剣が失せたため、その体勢を崩した。もちろん剣皇である。崩したと言っても、ほんの僅かに体が傾いただけだ。だが、この筆舌に尽くしがたい戦いの中では、その僅かな隙が致命傷となる。

「覚悟、剣皇！」カミュは悪鬼の形相で剣を振り降ろした。

しかしこの瞬間、カミュの敗北は決定付けられた。ナバールがやすやすと体勢を崩すはずはない。油断を誘う罠だった。

「もらった！」ナバールの閃光の剣が、カミュの首筋めがけて放たれた。

本来なら、ここで決着は付いている。だがナバールは唯一の誤算を犯した。カミュの剣が、神剣ファルシオンだということを計算に入れ忘れたのだ。

「馬鹿な！」

「罠の向こうに罠ありき！」

カミュはファルシオンで、ナバールの剣を受けている。神剣ファルシオン。それは閃光の輝きを伴い、敵の猛撃を確実に受け止める。手にする者の意志を超越し、相手の太刀筋のすべてを読みとるのだ。そしてナバールの剣が、かすかな音と共に二つに折れた。渾身の力の込もった一撃に、神剣ファルシオンの輝きに、耐えきれずに砕け折れたのだ。

「信じられん。これが、ファルシオンの力……」

「いかにも。暗黒龍メディウスの恐れる神剣の威力。しかし、これでもまだ僅かな力しか放っていない。だが互角の者同士の戦いでは、その僅かな差が命取りになる」カミュはファルシオンの切っ先をナバールに向けた。「これで、剣皇の最後という訳だ」

神剣ファルシオンと折れた剣とでは、もはや勝負にはならない。それを認めたのか、身じろぎもせず、ただカミュの冷ややかな瞳を見据えるだけだ。

城壁の遥か向こう、広がる水平線の彼方で、乳白色の光が滲み始めた。夜明けだ。

マルスは、ニーナに対して決意の言葉を述べようとした。

自らの意志で、皇帝メディウスを討つと。だが、その必要はなかった。

「お行きなさい、マルス王子」

「ニーナ王女?」

「私たちがここまで来れたのも、すべてはあなたのおかげです。止めることは出来ません」

「ニーナ王女、僕は、その……」

完全に機先を制された。さすがにマルスは戸惑い、そこから先は何も言えなくなる。何故、ニーナ王女は自分の決意を知っているのか。理由は一つしかない。

「ジュリアン!」マルスが叫ぶと、扉の陰から、ばつの悪そうな顔をしたジュリアンが姿を現した。

「財宝だけでなく、人の話まで盗むのか?」

「へへ、いやいや、つい聞こえたんですよ。マルス様とナバールさんの会話が」
「やれやれ……」
「ジュリアンを責めないであげて。どのみち私とハーディン隊長の間でも、同じような話し合いが行われていたのです」
「同じような話？」
ニーナは、緩(ゆる)やかな微笑みで応じた。「あなたにカミュ将軍の話をしたのも、戦いの中で自分の信念を貫こうとする、一人の武人がいることを知ってもらいたかったからです。彼らは純粋です。純粋さ故に、戦乱という流れに逆らえないでいるのです。もうこれ以上、同じアカネイアの同胞を手にかけるわけにも、また、失うわけにもいきません。そのためには、すべての根源を、悪の中枢(ちゅうすう)を叩くしかないのです」
「すなわち、敵の皇帝メディウス。暗黒龍メディウスを！」
「そうです。ガーネフと、このアカネイア宮殿を同時に失った敵軍は、再編成を果たすべく各地で集結を開始しています。機会は今しかありません。密(ひそ)かに敵の中枢、龍人の国ドルーアに潜入し、メディウスを倒す。それしか手段はないのです！」
ニーナは、いつになく激しい口調で言いきった。その勢いにマルスはたじろぐ。自分の心に、後ろめたいところがあるからだ。
「しかしニーナ王女。僕は……」

「判っています。シーダのため、でしょう。でも、だからこそ、あなたはそれを成し遂げてくれると信じています。最も身近なものすら守れない人に、多くの人々を救えるはずがない。そう信じます」
「ありがとう、ございます。王女」
マルスは古式ゆかしい典礼に従って、王女に忠誠と敬意の一礼を送った。
その時。ニーナの背後の大窓から、一筋の光が差し込む。乳白色の柔らかな光。朝陽だ。いつの間にか稲妻はやみ、雨も夜の闇と共に過ぎ去っていた。
「一刻も早く、この戦いが終わることを祈って……」
そして目映い大窓を背に、ニーナ王女は朝陽にも負けぬ輝かしい笑顔をマルスに向けた。

剣皇ナバール。智将カミュ。二人の猛者は、崩れた城壁と朝陽を背に向かい合う。
「言い残すことは、ないか」
「死にもしないのに、最後の言葉はない」
「負け惜しみか」
「事実だ」
「なるほど」
カミュはじりじりと間合いを詰めた。折れた剣しか持たないとは言え、相手は剣皇ナバール。な

めてかかれば、一矢報いられることにもなりかねない。あくまで用心深く、しかし俊敏に間合いを詰める。

「さらばだ！」

カミュは大きくファルシオンを振り上げた。その顔には、絶対の自信が浮かんでいる。

——今しかない。最後の勝機を掴み取るのは！

心中で叫び、ナバールは憤怒の形相で身を翻した。そして手にした剣を、閃光の速さでカミュに放つ。振ったのではない。投げつけたのだ。さすがにカミュも、そして神秘の力を秘めたファルシオンも、ナバールのその攻撃を予期出来なかった。打ち落とすこともままならず、折れた剣はカミュの喉元に深々と突き刺さる。

「!?」

鮮血のしぶきが噴き上がった。カミュの表情が苦悶に歪む。引きつった口が何かを呟いた。だが声にならない。折れた剣先は、気管をも寸断していた。しかしそれでもカミュは、苦悶に耐えながら一語一語、絞り出すように言葉を紡いだ。

「……まだだ、まだ……」

その言葉通り、カミュの手にしたファルシオンが唸った。それは今までの攻撃を遥かに上回る、激烈な一撃だった。ナバールは避けなかった。いや、避けようがなかった。カミュの最後の一撃は、まさしく最後を予期した者だけが放てる、圧倒的なまでの強圧に満ちていた。たとえ魔神だろうと、

その一撃を躱せるはずはない。光彩を放つファルシオンは、深々とナバールの胸に突き刺さり、背中から剣先をのぞかせている。輝く刃先を伝わり、ぽたぽたと真紅の血が伝わり落ちた。

共に全力を尽くした二人の剣豪は、抱き合うような形で向かい合っていた。カミュは喉元に折れた剣を。ナバールは胸にファルシオンを。それぞれ突き立てたまま。

「……最後の、最後で、な。まさか、剣皇が、剣を、投げる、とは……」

「ある男から、教えられた。型に、こだわるだけが、剣技ではないと。しかし、その男も、今は、ない」

「……なるほど、な……」

カミュはそのまま、ふらつく足で歩き出した。崩れた城壁をまたぎ、よろめきながら歩を進める。血が喉に詰まったのか、途中、幾度となく咽びながら。だが彼の歩みが止まることはない。ただひたすらに歩き続ける。その行く手には、奈落の底に落ち込むような断崖絶壁しかない。真下は荒れ狂う海だ。そう、カミュ将軍は、まさしくその海を目指していた。

「……兵は、死して、屍を、さらさず……」切り立った断崖を見おろしながら、カミュは喉元の剣を引き抜いた。真紅の血が、まるで火花のように飛び散った。

「ニーナ。私は……」カミュの言葉はそこで途切れた。白濁した瞳で宙を見上げ、崩れるように倒れる。その僅か一寸先は、切り立った断崖だった。

陽光を浴びながら、カミュは遥か眼下の海面へと落ちていく。その様は、まるで花びらが宙を舞

い降りるようにも見えた。
後にはただ、おびただしい鮮血と、折れた剣、そして胸にファルシオンを突き立てたままの、ナバールが残された。
「智将の、最後か……」
呟くナバールは、ただ石像のように立ち尽くしている。その目から生気は消え失せ、額からは滝のように脂汗が流れ落ち、そして顔は蠟細工のように白い。足元では雨水の流れに混じり、血液の奔流が真っ赤な大河を形づくっている。
——カミュ自身も、気付いていなかった。しかし、あの男は、確かにこの剣を、この神剣を、マルス王子に届けたのだ。
機械人形のような動きで、胸に刺さったファルシオンの柄に手をかけた。その瞬間、ナバールの瞳に生気が蘇る。そして最後の力を振り絞り、ファルシオンを自分の胸から引き抜いた。飛び散った鮮血が飛沫となり、朝陽に照らされ虹を描いた。
ナバールは引き抜いたファルシオンを、すぐ脇の大地に突き刺す。そして再び生気の失われた瞳で天を仰いだ。夜の濃紺が朝の白に変わり行く、アカネイアの空を。
——あの日の空も、こんな色合いだったような気がする。故郷の村で結婚式を挙げた、あの日も。
剣皇ナバールは、そのまま倒れることもなく、天を見上げたままの姿勢で尽き果てた。
すでに夜は明けきった。間もなく、ナバールの壮烈な最期がマルスらに報されるだろう。神剣フ

アルシオンの帰還と共に。

だがあの雷雨の夜、誰と、どのような死闘が演じられたのか。それが明らかにされることは、ついになかったのである。

「先ほどの村とまったく同じです。動くものは何一つ見当たりません」
「外周部も同様です。ただ、無残（むざん）に白骨が連なるだけ。見るに堪（た）えない惨状（さんじょう）です。まるで、まるで街全体が、完全に死に絶えてしまったかのように……」
　カインとアベル、二人は周囲の景色から顔をそむけるようにマルスに告げた。報告を受けたマルスも、ただ茫然（ぼうぜん）とその場に立ち尽くす。信じ難い状況に直面し、思考が停止しているのだ。
「しかし、どうにも信じられない。朽ち果てた亡骸（なきがら）とおびただしい白骨。もしかしたら、これは何かの罠（わな）じゃないのか。例えば、僕たちを混乱させるための」
　マリクの言うことにも一理ある。だが、罠にしてはあまりに生々（なまなま）しく、そして数が多すぎた。まさか王城近くの街が、丸まる墓場と化しているなど。
「判らない。判らないことだらけだ。しかも死体は昨日今日のものではない。かなり経（た）っているようだ。見ろ、マリク、カイン、アベル」
　マルスは足元の小さな骨片を拾い上げた。そして指にわずかに力を加える。その途端、骨片は砕（くだ）けて白い粉となった。

「陽の光と空気にさらされ、こんなに脆くなっている」指の隙間から粉がぱらぱらとこぼれ落ちた。
「ともかく、状況を把握するまでは迂闊に動き回らない方がいい。パオラたちとの合流場所に戻ろう。そろそろ向こうも、偵察を終える頃だろうからね」
「やれやれ。パオラにゃ、こんな風景は見せたくないもんだ」言いながら、アベルは愛馬にまたがった。
「一月足らずで、ずいぶん親しくなったもんだな。……なんて、冷やかしてやりたいところなんだが」
カインの表情は重い。その言葉に、アベルも大きく諾いた。
「ああ。この惨状じゃあな。それにしても、この国はどうなってんだ。これでも本当に敵の本拠地なのか？」
「ともかく、監視だけは怠らないようにしよう。何が起こるか分からん」
「まったくだ。しかし、敵が現れたらキスでもしてやりたい心境だよ。国境からこっち、ここまで動くものを見ないとな」
カインとアベルの二人は、鋭い視線で周囲の監視を始める。その後に続くマルスは、僅かに馬足を落として殿のマリクに近付いた。見ると、マリクは右腕の包帯を巻き直していた。馬に揺られるうちに緩んでしまったのだろう。
「あの時の怪我が、まだ痛むのかマリク？」

「いいや、それほどでもない。念のためにね。もっとも、君ほどの回復力はないけど、驚くじゃないか。あのマフーを二発も喰らって、一週間もしないうちに全快してしまうんだから。ひょっとしたら、首を落とされてもまた生えてくるんじゃないのかい？」
「おいおい、人を化け物みたいに言うなよ」
「冗談さ。……ところでな、マルス」不意に表情が曇る。
　マルスはそれを見て、マリクが次に何を言うかを察知した。
「詫びの言葉なら、いい加減聞きあきたよ。僕の力が未熟だったばかりに、だろ？」
「事実だから、ね。現にシーダは……」
「そこまでだ。今度言ったら本当に絶交だぞ、マリク。逆に詫びなきゃならないのは僕の方さ。まだ全快しきっていない君に、付いてきてもらってさ。今回の強行軍では、本当に何度となく助けられたもんな」
「いいや、罪滅ぼしの意味もあったし、それに……」
「それに？」
「どうしても、僕の手でエリス様を助けたくてね」
「そういえば昔からマリクは、姉上を僕以上に慕ってたもんな」
「そ、そうかなあ」
「そうじゃないか。いつだったか忘れたけど、姉上がターメネック（野鼠の一種）に噛まれた時だ。

城に山のような薬草を届けたのは、誰だったっけ？」
「ああ、思いだしたよ。そういえば僕の薬草のせいで、城のみんなが野良猫狩りに忙殺(ぼうさつ)されたんだっけ」
「そうそう。薬草の中に、マタタビが大量に紛(まぎ)れ込んでたんだ」
「……まったく、よくそんな昔のことを覚えているなあ。つまらない人の失敗をさ」マリクはわざと怒ったような顔をしてみせたが、その目は笑っている。
「実はあの話には後日談があるんだよ。野良猫にくっついていた蚤(のみ)が城中に散らばっちゃってさ、みんな大騒ぎ。姉上も体中を噛(か)まれて、しばらくぽりぽりやってたよ」
「う、嘘(うそ)だろ!?」
「本当さ。でも、マリクが善意でしてくれたことが発端(ほったん)だろ。僕にそっと耳打ちしてさ、このことは、未来永劫(えいごう)アリティア王家だけの秘密ですよ、だってさ」
　さすがにこれにはマリクも衝撃(しょうげき)を受けたらしい。頭を抱(かか)え、顔をしかめている。
「蚤にやられたのは王家のものだけじゃないさ。城のみんなが噛まれて、特にジェイガンなんか……」
　ジェイガンの名を口にしたところでマルスの言葉は途切れた。陽の光が雲に覆(おお)い隠されたように、明るかった表情が暗く沈み込む。マリクにしても、声のかけようがなかった。慰(なぐさ)め、いたわり、励まし。どんな言葉をかけても、単なるごまかしになりそうな気がしたからだ。

「なあ、マリク」
「ん？」
「僕たち、何でこんな風になったんだろう。いつの間にか剣を手にして、いつの間にか人を殺すことにも慣れて、いつの間にか戦争の真っ直中にいて。いったい、いつからこんな血生臭い日々を送るようになったんだろう」
「でも、それももうすぐ終わるさ。だからこそ、ここまで来たんじゃないか。龍人族の王国ドルーア。暗黒龍、メディウスの喉元へと」
「しかし……」マルスは馬上から、周囲の景色を見渡した。
灰色に淀んだ空。枯れた草木。乾ききった大地。そして、そこらに点在する白骨。空を舞う鳥の姿もなく、地を這う虫すらいない。動くものといえば、吹きすさぶ風に転がる枯れ草の塊くらいだ。
「ここは、まるで墓場だ。死の静寂が支配する、墓場そのものだ」
そして目を伏せ、腰に差した神剣ファルシオンに手をあてた。

ドルーア帝国皇帝、暗黒龍メディウスを討つ。マルスは、ナバールの命そのものとも言える神剣ファルシオンを手に、アカネイア宮殿を出発した。敵国の中枢深くに潜入し、一気に目的を果たそうという隠密作戦である。まさか反乱軍全員でぞろぞろと行く訳にはいかない。しかもアカネイア

宮殿を解放したとはいえ、近隣には多くの残敵が潜んでいる。再び宮殿が敵の手に落ちては、国民の意気が以前にも増して消沈することにもなりかねない。

そのためマルスに随伴する兵士は、必要最低限の数に絞られた。

ジェイガンの無念を晴らそうという、アリティア宮廷騎士団の最後の二人、カインとアベル。メディウス率いる龍人族の群れに、祖国マケドニアを蹂躙されたパオラ、カチュア、エストの三姉妹。そして周囲の反対を押し切り、傷の癒えていない体で同行を志願したマリク。この六人が、マルスと共にドルーア王国へ足を踏み入れることとなった。

「御安心を、王子。このアカネイア宮殿解放後、噂を聞きつけた数多くの残党軍が馳せ参じてくれました。そして近日中に、ロレンス将軍率いる数十名の反乱勢力と邂逅する予定もあります。おまかせを。アカネイア宮殿を確保しつつ、さらにじりじりと、敵勢力を掃討していくつもりです」

今まさに旅立とうとするマルスに、ハーディンは力強く決意のほどを述べた。そして一拍間をあけてから、「それより、心配なのは王子の方です。僅か数人で敵地に乗り込もうというのですから。しかも龍人族の王国ドルーアは、謎に包まれた神秘の地。いったい何が待ち受けているのか、皆目見当が付きません……」と、不安な面もちで、ドルーア王国の位置する西の空を見やった。

ハーディンの不安は的中した。アカネイアを旅だってしばらくは、それこそ森を一つ抜けるごとに、山を一つ越えるたびに、敵の斥候部隊や別動隊と出くわし、否応なく剣を打ち合わす羽目になった。だがマルスらは、この隠密行が成功すれば、長きに渡る戦いに終止符が打てる、同じアクト

イアの住人同士で殺し合うこともなくなる。それをひたすらに信じて、ようやくドルーア王国の国境にまで辿り着いた。ここから先は敵陣真っ直中。まさしく災禍の渦中に身を投じることになる。当然、今まで以上の死闘が展開されることになるだろう。相手は自由に龍に化身することの出来る龍人族。かつて相手にしてきたドルーア軍兵士とは訳が違う。もしかしたら、七人のうちの誰かが、いや、全員が帰らぬ人になるかも知れない。

「みんな僕のわがままに、よく付き合ってくれた。有難う。ここからは、僕ひとりで行く。反乱軍の指導者としての最後の命令だ。みんな引き返してくれ。頼む」

国境を前に、マルスは皆にそう言った。だが、誰ひとりとして引き返す者はいない。

「冗談じゃない。王子ひとりに、手柄を横取りされてたまりますか!」

「アベルの言う通り。それに、これはジェイガン様の弔い合戦でもあります。いくら王子の御命令でも聞けません。アリティア宮廷騎士団の生き残りとして、お供させてもらいます」

「マルス。子どもの頃から僕の性格は知ってるだろ? 中途半端が大嫌いっていう、さ」

「私たちも同じです。それに王子を見捨てて逃げだしたりなんかしたら、後でミネルバ様に大目玉をいただいてしまいます。付いて行きます。たとえそこが、冥府の深淵だろうと」

「……ここまで来て、引き返す、なんて、そんなこと……」

「やっだーマルス王子、カッコつけちゃって。こんなワクワクする戦いを前にして、おめおめ引き返せる訳ないじゃない! あたし、絶対行くもん! 行くったら、行くんだもん!」

皆の決意の言葉を受け、マルスはもう何も言わなかった。ただ前方を凝視し、腰からすらりと、眩惑的な光芒を放つ剣を抜く。神剣ファルシオン。百年の昔、勇者アンリはこの剣でメディウスを葬ったという。アンリの血に連なるアリティアのマルス王子は、そのファルシオンで前方を指した。それは、一同に前進を告げる合図だった。

ドルーア。神秘のヴェールに覆われた龍人族の王国。蛮行を繰り返す、ドルーア帝国の中心。すべてはこの国に、暗黒龍メディウスが復活したことから始まった。アカネイア大陸は長い長い戦乱に荒れ果て、幾多の悲しい物語が、生まれては消えて行った。だが、それも間もなく終わる。

霧深い山脈を突破し、行く手を阻む広大な荒地を踏み越え、マルスらは、ついにドルーア王国へと足を踏み入れたのだ。百年前の戦災以来、禁断の地とされた魔の王国へ。

が、しかし……。奇妙なことに、王国に足を踏み入れて以来、敵との遭遇は皆無となった。関所を通過しても、要所要所に設けられた城塞の防衛線を通過しても、猫の子一匹現れないのだ。

それだけではない、空を舞う鳥も、野を駆ける獣も、王国の奥に向かえば向かうほど見当たらなくなっていく。それは草木にしても同様で、徐々にその数はまばらとなり、さらに進むと、ついに茶褐色の枯木と枯草だけになってしまった。マルスらは、言葉に出来ない不気味な感覚を覚えつつも、さらに王国の奥へと足を踏み入れた。そしてそこで、さらに驚くべき光景に出会った。

もはや王城まで数日の距離にまで迫った頃、小さな村落を発見した。マルスらは用心深く、外周から様子を窺う。が、例によって人の気配はない。意を決し、旅人を装い村に足を踏み入れたのだ

が。「これは、何だ、何があったんだ⁉」
　無数の白骨が、道や、広場や、家の中に散らばっている。老若男女、性別、世代の区別なく、大量の人骨が折り重なるように散らばっていたのだ。それらが、この国の住人の骨であることは明白だった。人骨に交じって巨大な龍の骨が、あるいは、龍と人を掛け合わせたような骨が、そこかしこに点在していたからだ。龍人族は、火龍石、神龍石、などの名で呼ばれる、魔の石の力を借りて本来の姿を現す。すなわち、神獣〝龍〟の姿を。

「間違いない。カダインで、多少だが医術も学んだ。これは紛い物や別の生き物の骨じゃない。間違いなく、龍人族の骨そのものだ」

　マリクは骨の一つ一つを手に取ってから結論付けた。だがそれが事実なら、この惨状はいったい何なのか。その答えを見つけるには、ただ前進するよりなかった。しかし前進しても、見つかるのは人骨の連なる村や街ばかりだった。

　やがて彼らは、何の妨害も受けないまま王城を間近に臨む地にまで到達した。とめどもない恐怖と不安を伴う、連なる人骨の謎を残したまま。

「ここから王城まで、一刻もかからないでしょう。平坦な道が続くだけです。見たところ、待ち伏せ出来そうな場所もないですし、ところどころに設けられた陣地も、無残に崩れ果てています。それに……」

マルスらは、偵察行を終えたパオラたち三姉妹と合流を果たした。さっそく報告を受けはじめた矢先、不意にパオラが口ごもる。
「どうした？　王城が、ドルーア城がどうかしたのか？」
マルスが先を促すと、パオラに代わってエストが口を開いた。「それがねえ、お城もボロボロなの！　それも戦災や火事って感じじゃなくて、長い間、ほっぽっとかれたみたい。人の気配もないし、あちこち崩れてるし、なーんか埃まみれってカンジ！」
「でも、遠くから、見ただけ、だから、そうだと、言い切れないですけど……」
「でもカチュア姉さん、あたし、三人の中でいちばん目がいいんだよ？」
「憶測だけで、物を言うなって、こと……」
「ぶーぶーっ！」
パオラが口ごもったのは、必ずしもそうだと言い切れないからだろう。憶測に基づく報告は、自軍を壊滅させることにもなりかねない。それを承知しているからこそ躊躇したのだ。
「どうします、王子？」
マルスは、次の指示を促すカインを手で制した。そして腕を組み思索にふける。
巨大な罠か、別の何かか。それとも皇帝メディウスは、すでにこの地にいないのか。あらゆる可能性を考慮し、今後の行動を一つ一つ思い浮かべては吟味する。他の者も、マルスと同様に思案に暮れた。唯一エストだけが、馬上でつまらなそうに足をぶらぶらさせている。ややあって、マルス

は短く一同に告げた。ただ一言、「行こう」と。
「でも、マルス。もう少し情報を集めた方がいいんじゃないか？　夜になれば、闇にまぎれて城に近付けるだろうし……」
「いや。情報を集めようにも、敵兵も、住民もいないんじゃどうしようもない。それに夜まで待っても同じだろう。もしもこの地が完全に放棄されたというなら、一刻も早くその確証を得て、アカネイアに戻らないといけない」
　確かにその通りだ。このまま結論の出ないまま、廃墟と化した国で無駄足を喰っている訳にはいかない。ニーナ王女やハーディンたちのことも気がかりだし、もしかしたら、敵の討伐軍が国境で手ぐすねを引いている場合も考えられる。
「しかし王子。王子の当初の目的は、エリス様を救出し、そして……」
「言うなよ、アベル。姉上のことも気がかりだけど、とにかく今は皇帝の所在を確かめることが先決だ。姉上はメディウスの下にいる。もし奴がここにいなければ、姉上もいないということだ」
「判りました」
「よし。みんな、正面切って王城に乗り込む。何が起こるか判らない。決して気を抜くな。ここまで来たら待ち伏せは考えられないが、罠の一つや二つはあるかも知れない。全員、心してくれ！」
　マルスのその言葉に、選ばれた六人の戦士たちは、全員、力強く諾いた。

エストの言ったことは正しかった。王城は朽ち果て、まるで何百年も忘れ去られたかのような無残な姿を晒していた。城を幾重にも取りまく堀は、吹き淀んだ土砂に埋まり、正面の門は開け放たれ、周囲の城壁もいたるところが崩れている。中庭にははげ落ちた城壁の破片が散乱し、そしてまた、今まで見てきた街や村と同様、人と龍の骨が折り重なるように連なっていた。

静寂の廃墟。死滅した王城。ドルーア城は、まさに巨大な墳墓と化していた。

「中庭もこの有様か。とても人がいそうには見えない。何の仕掛けもなさそうだ。ただの廃墟だな」

「でしょ。あたしの言った通りじゃないよ!」

「東側も、同じような、感じだわ。崩れた瓦礫の山があるだけ、それと、人骨と……」

「どうします王子。もはや結論は出ました。すぐに引き返しますか。それとも、さすがに今夜は一息いれますか」マルスは、ぐるりと周囲を見てからカインに向き直った。

「いや、せめて玉座の間だけでも見ておきたい。ひょっとしたら、何か手がかりになるものがあるかも知れないし」

「判りました。この城の構造から察するに、恐らく王の間は、中央の塔にあると思われます」

カインは、頭上で周囲の様子を窺っているパオラに合図を送った。

「どうしたの?」

「中央に塔があるはずなんだが、どう行けばいいだろう。ここからだと、瓦礫に阻まれて良く見えないんだ。上空から確かめてくれないか」

「ないわ」
「え?」
「さっき見たの。この城の中央の塔、いちばん大きな塔は、根元から崩れ落ちている。完全に崩壊しているのよ。まるで小枝みたいに、きれいにぽっきりと」
沈黙が横切った。少しして、アベルが大きなため息をつく。
「やれやれ。龍人族の王城、王の間も、今はなしか。どうしようもないな。何があったか知らないが、ここは単なる瓦礫の山だ。とてもドルーア帝国の中心、ドルーア王国の王城とは思えない」
その時、不意に一陣の風が吹いた。その風は土埃を舞い上げ、瓦礫の積み重なった中庭を駆け抜ける。マルスにはその風が、不思議と生き物の呼吸のように思えた。何か、ひどく巨大で、荒々しい生き物の吐息。人でも、獣でもない、次元の違う別の生物の呼吸のように。
「感じたか、マルス」マリクは周囲を不安な面もちで見つめながら、マルスに尋ねた。
「マリクも、か?」
「ああ。何かが潜んでいる。僕は風の魔導士だ。判る。さっきの風が教えてくれた。ここに、この瓦礫の山の中に、何かが潜んでいる」
「らしいな……」
マルスとマリク、二人のやりとりの意味を摑みかねたカインは、怪訝な顔つきで問いかけた。
「いったい、どうしたんですか。さっきの風が、何だっていうんですか?」

「みんな気を付けろ。どうやらここは、単なる廃墟という訳ではなさそうだ。何かが潜んでいる。恐ろしく邪悪で、恐ろしく狡猾な何かだ」
マルスの言葉に、全員が一斉に身構える。パオラたちは空中で三角形を描く布陣を敷き、カインとアベルは背を向け合うようにして槍を構えた。そしてマリクは素早く馬から降り、マルスは腰のファルシオンに手をかけた。
と、次の瞬間。どこからか、低く、唸るような音が聞こえてきた。蜂の羽ばたきにも似た、かすかな響きだ。
「僕の、腰から？　まさかファルシオンか？」
マルスは戸惑いながらも、ファルシオンの柄を握りしめる。間違いない。唸るような音は、確かに腰のファルシオンから発せられていた。剣全体が小さく、しかし激しく震動しているのだ。そのまま鞘から引き抜く。震動は目に見えない。だが唸りは、いっそう音量を増して周囲に響いた。
「神剣ファルシオンが、何かに反応しているんだ」
「何かって、何だ？」
「そんなこと、俺に判る訳ないだろう」
マルスは震える剣先を、そのまま瓦礫の山に向けた。何故そうしたのかは判らない。ただ、体が自然にそのように動いたのだ。
低い唸りがさらに激しくなった。ファルシオンが何かを捜し当てたのだ。

「瓦礫の山と化した城の中だ。そこで、僕らを何者かが待っている。神剣ファルシオンは、それを教えてくれているんだ」

マルスは、皆の返事を待たずに進み出した。入口を探すまでもない。城の壁面は至るところが崩れており、どこからでも容易に潜り込める。

「王子、待って下さい。危険です。罠でもあったら」

背後からのカインの叫びに、マルスは一瞬歩を止めた。この崩れた城の中で何が待ち受けているのか。少なくとも、危険な何かであることに疑いの余地はない。このまま無防備に踏み込んで行っていいものか。

恐らく城の内部は、惨憺たる有様だろう。瓦礫や崩れた石材が行く手を阻み、太陽の光も届かない。当然、カインやアベル、パオラたちは徒歩で行かざるをえない。機動力は半減し、戦闘力も著しく低下する。だが、

「向こうの方から出てくる気があるんなら、とうに姿を見せているさ。こちらから行くしかなさそうだ」

そう言ってマルスは崩れた壁をくぐり抜け、力強い足取りで城内へ進んだ。続いてマリクが、そしてカインとアベルが、最後に三姉妹が城内へと歩を進めた。それぞれの武器を手に、四方八方に鋭い視線を向けながら。そして四頭の馬と三頭のペガサスは、不安そうな瞳でそれぞれの主人を見送った。

　城の中は意外に原型を保っており、また採光用の窓が多いせいか、周囲を見渡せるくらいの明るさもあった。もっとも荒れ果てていることに変わりはなかったし、床には、外と同じように無数の白骨が散らばっていた。一歩前に進むごとに、ぱきぱきと音をたてて骨が踏みしだかれていく。靴底から伝わるその一種独特の感触は、いかに歴戦の勇者たちといっても気持ちのいいものではない。

　彼らの進む広い通廊は、やがて巨大な大扉に行き当たった。高さ四十尺はあろうかという大扉は、頑強そうな樫の木で出来ていた。

「どうやら大聖堂らしいな。龍人族といえ、我々と同じ神を崇拝するのか。何となく、奇妙な気分だけど……」マリクは人差し指で扉をつついた。まとわりついていた埃が、かすかな煙となって宙を漂う。

「マルス王子、ファルシオンの唸りは、まだ続いていますか？」

「いいや、さっき途切れたままだ。ともかく、この大扉を開けてみよう。この人数なら、何とかなるだろう」

「蝶番が錆び付いていないことを祈りますよ。その前に蝶番が原型をとどめていれば、の話ですが」

　カインの言葉にマルスは諾き、抜いたままだったファルシオンを鞘に収めた。他の者も武器を収め、横一列になって扉に取り付く。

「何だか、ジュリアンみたいに城に泥棒に入っているみたいだね！」
「……どちらかと、言うと、墓泥棒じゃ、ないかしら」
「ほらほら、エスト、カチュア。女の子の底力ってのを、見せてあげなさい」
「はーい！」
「よし、押すぞ！」
マルスの号令の下、全員が思い思いの格好で大扉に力を加えた。それぞれ渾身の力で扉を押すものの、開くどころか、ぴくりとも動かない。まるで岩を押しているような感覚だった。
「くそったれが！」猛牛の異名を持つカインが、さらに力を加えると、きしむような音と共に扉が僅かに動いた。それが呼び水となり、そのまま大扉はゆっくりと押し開けられた。
「もう、これぐらいでいいだろう」
充分な隙間が開いたところで、マルスは皆に告げた。全員が一斉に大きなため息をつく。一拍置いてから、彼らは扉の隙間から大聖堂の中へと潜り込んだ。
「こ、これは……」最初に足を踏み入れたマリクは、その光景に思わず息を飲んだ。
円形の広大な大聖堂。ドーム状の天井。壁に描かれた壮麗なフレスコ画。そして周囲をめぐる、明かり取りの窓にはめ込まれた、荘厳にして優美なステンドグラス。それによって差し込む、色とりどりの艶やかな光彩。アカネイア宮殿のそれに勝るとも劣らぬ、芸術品と言っていい美しき大聖堂だ。

しかしマリクが息を飲んだのは、その美しさに陶酔してではない。床一面に、敷き詰められたように散らばる人骨を目にしてだ。ここに来るまでに目撃した光景の比ではない。まるで礼拝堂自体が、一個の骨壺のように思えてくる。それほどの数の人骨だった。中には、幼い赤子の骨も見受けられる。それを抱いているのは、恐らく母親の遺骸だろう。

「ここは、礼拝堂でも何でもない。ただの、納骨所だ」立ち尽くし、呆然と呟くマリク。

「むごすぎる。あまりに」カインは思わず顔をそむけた。

「何てこと。いったい何があったの、ここで」

「……ひどい……」

気丈なパオラも、いつもは無表情なカチュアも、さすがに驚愕のあまり顔をひきつらせ、身を震わせる。エストにいたっては、今にも気を失いそうに顔をひきつらせている。

「これ以上、見るんじゃない、パオラ！」アベルはとっさに、パオラを扉の向こうに押し戻した。

　ステンドグラスを通過した光によって、骨は不気味な色合いに染まり、天界を描いたとおぼしき壁画は、逆に寒々しい印象を見るものに与えた。

「行こう、マルス。一刻も早く、この場を立ち去ろう」マリクは、ただ無言で前方を凝視するマルスの肩に手を置いた。

「いや……」置かれた手を払いのけ、ただ茫然と前方を凝視する。最初マリクは、自分と同じく凄惨な光景に茫然としているだけと思った。しかし、そうではなかった。マルスの視線は積み重なる

白骨の山を越え、さらにその奥、闇のわだかまる祭壇へと向けられている。
マリクも同じく祭壇を注視した。祭壇の辺りは薄暗く、ここからだと、幾重にも連なる影の塊にしか見えない。目を凝らし、闇の中に浮かぶかすかな輪郭をたどる。大小、様々な形の燭台。向かい合う二つの女神像。教典の刻まれた石版。白銀で作られたとおぼしき供物受け。そして祭壇の中央に置かれた、さっきとは別の女神像……。
——違う！
マリクは驚きのあまり、声にならない悲痛な叫びを上げた。
あれは女神像ではない。人だ。生身の肉体を持った女の人だ。腰まで届く、長い紫の髪。確かに女神像と見間違えてもおかしくない、美しい白い顔。長く伸びた細い腕。
忘れるはずはない。懐かしき思い出と共に心の奥底に刻まれた、その顔を忘れるはずがない。
「エリス様！」
「姉上！」
マリクとマルスは、ほぼ同時に叫んだ。
「エリス、様？　王女が？　エリス王女がこのようなところに⁉」
「あれだ。あの祭壇の中央。確かに、確かにエリス様だ！」
カインとアベルがその姿を確認した時、すでにマルスとマリクの二人は、敷き詰められた白骨の絨毯を踏み越えて祭壇へと向かっている。驚きと焦りのあまり、途中何度も白骨の山に転げそうに

なりながら、二人はエリスのもとへ辿り着いた。
「姉上！　姉さん！」
「何で、こんなところに。こんな場所に」
が、ひざまずくような姿で佇むエリスは、その目を固く閉ざしたままぴくりとも動かない。マルスは姉がすでにこと切れているものと思い、深い悲しみの表情を浮かべた。
「大丈夫だ。脈はある。体温も」腕を取り、脈を測ったマリクが満面に笑みをたたえながら告げる。
マルスの表情は一転、悲しみから喜びへと変わった。
「マルス王子、エリス様は⁉」
「大丈夫なのですか？」
駆けつけたカインらが不安げな表情で問う。
「命に別状はなさそうだ。しかし……」
しかし、エリスはその目を開けようとはしない。確かに脈拍も、心臓の鼓動も規則正しく刻まれている。呼吸もしている。顔の色も蒼白というわけではない。だがそれでも、エリスは身じろぎ一つしない。この大聖堂の生きた女神像と化しているのだ。
「……何だか、エリス様の、周りの時間が、止まっている、みたい」カチュアがぼそりと呟いた。
それを聞いたマリクは両目を見開き、おもむろに叫ぶ。「僧侶の自己暗示だ。意識だけを、閉ざ

された永遠の時間の檻に封じ込めている！」
マルスは呆然とした顔でマリクに問い返す。「僧侶の、自己、暗示？　意識だけを封じ込めている？　じゃあ姉上は、自分の意志で、心を封じ込めてしまったというのか？」
「多分そうだろう。もともとは麻酔として用いるための力だ。怪我人に暗示をかけ、その間に苦痛を伴う治療を行うための。それを自分自身にかけているんだろう」
「それで、その暗示を解く方法は？」
「駄目だ。かけた本人自身でないと。多分、レナさんやその他の僧侶を連れてきても無意味だろう」
「じゃあ、じゃあ姉上は、このまま永遠の眠りについたままなのか!?　目を覚まさせる手段はないのか!?　どうなんだ、マリク！」
「……暗示を行う際には、普通、何らかの解除の符号を決めておく。例えば、誰かがある単語を口にしたら。何か、ある状況に直面したら。意識が解放されるように決めておくものなんだ」
聞いていたマルスの顔がわずかに明るくなったが、すぐにまた元の暗い表情に戻る。
「しかし、その符号を知っているのは……」
「そうなんだ。そうなんだよ、マルス。暗示を施した本人だけなんだ。誰かが聞いていない限り、永遠の眠りを解く手段はない。どんな符号かいちいち試す手もあるが、あまりに現実味は乏しい」
マリクは重苦に喘ぎながらも、冷静に事実を述べた。それはあまりに惨たらしく、そして堪え難い事実だった。ようやく出会えたエリスは、自らの意志で心を封印してしまっていた。そしてその

眠りを醒ます手段もない。
「何でこんなことに。何で……」マルスはただ茫然と、その場にへたり込むように膝を折る。
居合わせた一同も、悲しげに顔を伏せるだけだった。誰もマルスに声をかけられないままでいた。
だが、その沈黙と静寂を破って、扉がきしむような、雑音にも似た奇妙な声がどこからか届いた。
「よく来た。選ばれし、アカネイアの戦士たちよ……」
マルスはとっさに立ち上がり、すぐに声の主を探した。他の者も、同じように周囲に鋭い視線を走らせる。いつの間に現れたのか、大聖堂のど真ん中に一人の年老いた男が立っていた。
全身をすっぽり包む真紅のローブ。顔中に深く刻まれた無数の皺。銀色の、太い眉と顎髭。鋭い嘴のように突き出た鼻。爬虫類を連想させる瞳は、射ぬくような眼光でこちらを凝視している。
殺気、威圧感、恐怖、戦慄。そんな単純な言葉では言い表せない不気味な感覚が、マルス以下、全員の心と体を小刻みに震わせた。その震えは、半ば本能的なものだった。蛇に睨まれた蛙。鷲に凝視された小鳥。それらが抱くのとまったく同じ感覚に、皆がうち震えていた。
天敵。天が定めた生まれながらの敵。皆を押しつぶす恐怖感は、まさしくその天敵と相対した時のものだった。マルスの腰に差された神剣ファルシオンが再び低く唸りはじめた。問いただす必要はない。その年老いた男が何者か、誰もが正確に理解していた。
マルスは以前、同じような感覚を抱いたことがある。アカネイア宮殿で、大司祭ガーネフと相対した時だ。あの時も同じような威圧感を抱いた。だが、似て非なるものだ。同じ恐怖を呼び覚ます

感覚とはいえ、あの時はまだ相手に言葉を放つだけの余裕もあった。しかし今は違う。相手が誰か判っていながら、その名を口にすることも出来ない。

カインとアベルも、押し潰されそうな重圧に耐えるので精一杯だった。マリクは息を飲み、何とか体を動かそうとあがいている。パオラ、カチュア、エストの三姉妹は、巨大な暗黒龍が祖国マケドニアの王城を一瞬で崩壊させた情景を想起し、絶望のどん底にたたき込まれていた。

パオラたちが、何故そのような情景を思い浮かべたか。理由は簡単だ。彼らの前に立つ年老いた男こそが、龍人族の長メディウス、ドルーア帝国の皇帝、暗黒龍メディウスなのだから。

マルスらの前にその姿を現した皇帝メディウスが、ゆっくりと口を開く。

「計算違いだったな。実の弟ならば、姉の眠りを醒ます符号を知っていると、思ったのだが……」

その言葉がマルスの心に火を付けた。やはり我が姉エリスが自らの意志を閉ざしたのは、この男の仕業だったのだ。このメディウスが、何らかの形で関与していたのだ。

「貴様！」腕の震えを強靭な意志で押え、震動を放つファルシオンを抜く。

鞘から放たれた途端、神剣ファルシオンは目映い閃光を周囲に放った。同時に、発せられていた低い唸りがぴたりと止む。変わってマルスの四肢に、熱い、しびれるような〝何か〟がみなぎった。

体をめぐる血液が沸騰するかのような、全身の筋肉が膨れ上がるかのような、目もくらむ熱い〝何か〟。

力だ。神剣ファルシオンを握る右手から、熱い力が体中に流れ込んで来る。それがマルスには、ファルシオンが〝敵を討て〟と言っているように感じられる。
マルスの体から、恐怖が、震えが消え失せた。毅然とした声で、メディウスに言葉を放つ。嚙みしめるように、一語一語、怒りのこもった言葉を紡ぐ。
「皇帝メディウス。我が姉エリスに、いったい何をした！」
「貴様の姉は、儂への協力を拒んだ。そして、自ら深い眠りに落ちた。しかし、死者を蘇らせる、あのオームの力は欲しい。眠りを醒ます符号。それを知るため、儂はお前が来るのを待った。だが、それも無駄だった」
「それで貴様は、わざと我々をこの城に招いた。全ての障壁を取り払い、兵を退らせ、我々をおびき寄せた！」
「いかにも。そして目障りな、アンリの血に連なる者を消し去るために」
「ほざけ！」ファルシオンの切っ先を、メディウスの眉間に向ける。「父の仇。姉の仇。そして散っていった、多くのアカネイアの民の仇。今ここで、討たせてもらう！」
「神剣ファルシオンか。この儂が、百年前と同じ失策を犯すとおもうか？」
「試してみるまで！」
「よかろう」
メディウスは、ローブの裾から小石を取り出した。細い銀の鎖の付いた、黒い小さな石。その石

を見た瞬間、マルスはとっさに皆に向かって叫んだ。これから何が起こるのか。それを正確に理解したのだ。

「姉さんを連れて、早く外へ！　外へ逃げるんだ！」

その叫びに、マリクは恐怖の呪縛から解き放たれた。身動き一つ出来なかった体に、僅かではあるが力が甦った。震えの収まらぬ四肢に鞭打ち、ひざまずいたままのエリスを抱き上げた。カイン、アベル、パオラ、カチュア、エスト。彼らも同様に恐怖を払いのけ、マリクに手を貸す。

「早く出るんだ。この大聖堂は崩れ落ちる。急ぐんだ！」

「いったい、何が始まろうというんです！」

「見ろ、メディウスを！」

大聖堂の中央、メディウスは取り出した黒い小石を天高く掲げ、何やら呪文めいた言葉を呟く。小石から、血の色を思わせる真紅の光が放たれた。その光はメディウスの体を包み込み、周囲の景色を朱に染めた。足元に連なる人骨が、大聖堂の壁が、マルスらの顔が、ただ赤一色で塗り固められていく。

「地龍石。暗黒龍メディウスが、その真の姿を解放させるために使う魔石！」パオラが叫ぶ。

「みんな急げ、急ぐんだ！　早く！」

「王子は!?」

「僕もすぐに脱出する。とにかく、姉さんを連れて外へ逃げろ。もう時間がない。間もなくメディ

ウスは変幻を終える。神剣ファルシオンを持つ、僕以外の者が残っても無意味だ。奴には傷一つ負わせられないだろう。頼むから、早く外へ！」

何の前触れもなく大聖堂の天井が崩れはじめた。メディウスを包み込む赤い光の繭が膨れ上がり、ついに天井にまで達したのだ。真紅の光の中で、巨大な何かが脈動している。生き物だ。信じ難い威容を誇る〝それ〟は、まるで産声のような咆哮を上げた。

暗黒龍だ。皇帝メディウスが、ついにその実体を露にしようとしている。たった一匹で数万の兵士を殺戮した、脅威の生物が、今まさに目覚めようとしているのだ。

折り重なる白骨をかき分けるようにして、マリクらは通路をひた走った。

その背後で轟音が響く。大聖堂が、城の通路が、彼らの後を追うように崩れているのだ。

あの場に残っても、ただマルスの足手まといになるだけだ。そう判断し、彼らは言われたままに元来た通路を引き返し始めた。その矢先、大聖堂の崩壊が城全体に伝播したのだ。

もともと崩壊寸前だった古の城だ。ひとたび崩れ出せば、それを止める手だてはない。ただ生き埋めにならないよう、ひたすらに逃げる以外に手段はない。

「急げマリク。このままじゃ、瓦礫に押しつぶされてあの世行きだ！」

カインは、エリスをかばいつつ、懸命に走るマリクを脇から支えた。

「判ってる！」

「早くしないと、後ろがどんどん崩れていってるよ。これじゃあ、まるで追いかけっこだよ！」
泣き叫びそうな声で、エストが背後を振り返る。崩壊の波は、すぐ後ろにまで迫っていた。ほんの少しでも歩みを止めれば、あっという間に瓦礫の下敷きになってしまうだろう。
「大丈夫か、パオラ！」アベルは殿のパオラの身を案じた。
だがパオラはただの少女ではない。幾多の戦場を駆け抜けた、マケドニア白騎士団のペガサスナイトだ。気丈にアベルに笑いかけてみせる。
「大丈夫、見て、もうすぐ出口よ！」
前方に、かすかな光が浮かび上がった。出口だ。城の裂け目が目前にある。激しく鼓動を刻む心臓が、今にも口から飛び出しそうだ。だが、ここで立ち止まる訳に行かない。彼らは息を継ぐのももどかしく、一気に城の外へと躍り出た。そして陽光に眩む目で、背後を振り返る。
「駄目だ。城から離れないと、ここも危ない。すぐに瓦礫と土砂の波が押し寄せて来るぞ」
カインの言う通りだ。内部からはそれと気付かなかったが、今や城全体が崩壊の途にある。打ち寄せる波に洗われる砂の城のように、無残にひしゃげ、ねじ曲がり、ドルーア王城は粉々に崩れていく。それは平穏な雪原が一転し、雪崩に転じる様に似ていた。
「マルス王子は、まだ中か？　いったいこんな状況の中で、どうやってメディウスを倒そうというんだ。無茶だ。無茶苦茶だ！」
アベルが叫んだ途端、大地を揺さぶる激しい震動が彼らを襲った。続いて、鼓膜を破らんばかり

の大音響が周囲に轟く。
「とにかく、この場を離れよう。大丈夫だ。マルスは必ず帰って来る。信じよう。皇帝メディウスを倒し、僕らのもとに帰って来る！」
叫んだマリクにしても自信はなかった。が、このままでは、全員が瓦礫に飲み込まれて命を落としてしまう。今は信じるしかない。神剣ファルシオンとファイアーエムブレムに守られた、マルス王子の帰還を。マリクはエリスを抱えたまま馬に跨り、握りしめた手綱を振るった。
「行きましょう。マリクの言うとおりだわ！」
いつになく毅然とした口調で、カチュアが皆に促した。
パオラとエストもそれに続き、それぞれのペガサスに跨る。
「王子……」後ろ髪を引かれながら、カインとアベルも馬に飛び乗った。そしてその脇腹を踵で一蹴し、全速で城から遠ざかる。
懸命に走る彼らの背後で、ドルーア城が徐々にその原型を失いつつあった。塔が、城壁が、城門が、粉微塵に砕け、四方に津波となって押し寄せる。砕けた破片はさらに粉砕され、土煙となって空に舞い上がった。まるで火山の噴火のような光景だった。溶岩が瓦礫の流れ、噴煙は天に昇る土煙だ。壮大な王城が崩れ行く情景は、ひどく緩慢で、そこだけ時間がのろのろと進んでいるように見えた。

崩れていく大聖堂の内部で、マルスは巨大な龍と対峙していた。
岩山のような黄土色の巨体。その重量ゆえか、脚部は床を貫き、さらに下の大地にめり込んでいる。背中に生えたコウモリのような翼。太い両腕の先には鋭い三本の爪。背後に伸びた強靭な尾は、大蛇のようにのたうち回っている。全長九十二尺。体高三十五尺。体重六万五千貫。これこそが、ドルーア帝国皇帝メディウスの実体だった。数え切れぬアカネイアの民を屍に変えた、暗黒龍の異形だった。龍と化したメディウスは、血走った真紅の目をらんらんと輝かせ、口元から、それこそマルスの身長ほどもある牙をのぞかせた。
「暗黒龍、メディウス……」
ファルシオンを手にしたマルスは、しばしその異形に茫然となった。まさか、これほどまでに巨大だとは。最大でも全高十五尺。どの書物にもそう記されていたし、現にここに来るまでに目の当たりにした骨を見ても、その程度の大きさしかなかった。
だが目の前の暗黒龍は、その二倍以上の巨体を有していた。まさしく龍人族の王。ドルーア帝国を打ち立て、あの大司祭ガーネフをも配下に置いていただけのことはある。恐怖や憎しみも忘れ、思わず感嘆の吐息をついた。その間にも、天井からは瓦礫が降り注ぎ、壁は脆いガラス細工であるかのように、粉々になって崩れていく。間もなく王城全体が崩壊し、この場は残骸の山に押し潰されてしまうだろう。だがマルスは、先のことなど微塵も考えていなかった。今はただ、目の前の暗黒龍を打ち倒すのみ。大陸全土を戦災に巻き込み、多くの城や街、村を燃やし尽くしたドルーア帝

国の皇帝。その憎き敵を、我が剣で斬り裂くだけだ。

と、メディウスが巨大なその口を開いた。反射的に横に飛ぶ。研ぎすまされた鋭敏な直感が、彼自身を救った。メディウスの口から炎の渦が吐き出された。炎はすさまじい奔流となり、大聖堂の祭壇を瞬時に灰燼に変える。

「炎まで操るのか⁉」

猫のような俊敏な動作で着地。胸に輝くファイアーエムブレムに手をあてると、マルスは決意の表情でメディウスを凝視した。

「しかし、我が先祖アンリがやってのけたこと。出来ないはずはない！」

そしてファルシオンを掲げ、メディウスの真紅の瞳を睨み据えた。

「行くぞ！」鷹が飛び立つように、マルスは両手を大きく広げて跳躍した。

人間離れした脚力で、遥か大聖堂の天井近くにまで舞い上がる。そして大上段の構えで、メディウスの頭部に斬りかかった。が。

「何だと⁉」

見えない壁に突き当たったような感覚だった。マルスは剣先を弾かれ、そのまま体勢を崩す。そして翼をもがれた鳥のように、瓦礫と白骨の散らばる床に落下した。ぎりぎりで着地の姿勢を取ったため、致命傷だけは避けられた。しかし背骨が奇妙な音できしんだ。続いて、全身を痛みが駆け抜ける。

「見えない壁!?」
憶測の余地もない。メディウスは下方のマルスに向けて炎を吐く。充分避けられるはずの間合いがあった。が、不運にも天井から落ちてきた破片に行く手を阻まれた。
「うああッ!?」
炎の波がマルスを洗う。素早く身を転がして火炎の中心から逃れたものの、左腕は醜く焼けただれ、皮がだらりと剝げ落ちた。並の人間なら、焼け付く痛みの余り失神するか、そのまま悶死しているような傷だ。しかしマルスはファイアーエムブレムを託された真の勇者だ。神剣ファルシオンを手にしたアリティアの王子だ。その程度で倒れはしない。
「壁だ。目に見えない壁が、メディウスの周囲に張り巡らされている」
立ち上がりつつ呟いた。その時マルスの心の中に、声とも音とも付かない響きが届いた。
『地龍石の力が、この私を守っている。貴様は、この私に決して勝てない。我を恐れよ。そして、我を崇めよ』
「メディウス！　貴様、念話すら操るというのか!?」
『私は絶対の存在。かつての勇者アンリとの戦いは、ささやかな隙を突かれただけのこと。百年の眠りを経て力を増したこの私が、たかが人間に敗れるはずはない！』
再びメディウスが炎を吐いた。だがマルスは躱そうとせず、代わりに手にしたファルシオンを前方にかざした。

「ぬあッ！」
渾身の力を込めて振り抜かれたファルシオンが、光芒を放ちながら円弧の太刀筋を描いた。一刀両断。驚くべきことに、迫り来る炎は、マルスの眼前で真っ二つに斬り分けられた。
「この程度の炎で、この僕を燃やせると思うな！」
『少しは、やるようだな……』
「メディウス！」マルスが飛んだ。ファルシオンを構え、一気にメディウスの頭部に迫る。
しかし無駄な努力だった。またしても見えない壁に弾かれ、そのまま不様に後方に吹っ飛んだ。
『馬鹿が！』
メディウスが大きく口を開いた。喉の奥で真紅の炎がちらつく。その刹那、マルスは中空を落下しつつあった巨大な瓦礫を一蹴した。反動を利し、再びメディウスに迫る。同時に炎が放たれた。
空中のマルスは、不敵な笑みを口元に浮かべ、その炎の流れに頭から突っ込んでいく。
『愚かな？　自殺か!?』
そうではない。マルスは自らの推測にすべてを賭けたのだ。全身が焼かれるのも気にせず、炎の渦を逆流する。滝を昇る魚のように。
「メディウス！」
『ぬッ!?』
マルスの読みは当たった。炎がこちらに届く。ということは、その瞬間、その場所には、見えな

い壁が存在しないに違いない。

まさしくその通りだった。マルスは壁を越え、ついにメディウスの頭部に取り付いた。

全身を貫く火傷の痛みも気にとめず、マルスはファルシオンをメディウスの脳天に突き立てる。

「くたばれ!」

確かに手ごたえはあった。しかしメディウスは、マルスを振り解こうと激しくもがく。

『その程度で、勝ったつもりか!』

巨大な頭部を振り回し、頭突きの要領で壁に突っこむ。その頭部にはマルスがいるのだ。

「ごぶッ!」

メディウスに比して、マルスはわずか数百分の一の大きさしかない。それは巨人の一蹴にも等しい衝撃だった。胸が押し潰され肋骨が砕ける。左足は奇妙な形に曲がり、右足は筋肉が引きちぎられた。力尽きたマルスは、メディウスの頭部からゆっくりと落ちて行く。一瞬を千分の一に刻んだ無限の回廊の中で、マルスは自分の完全なる敗北を認めざるを得なかった。迂闊だった。迂闊すぎた。暗黒龍メディウスの力を、余りに見くびりすぎていた。苦しみまぎれの一太刀で、倒せるような相手ではなかったのだ。

ふと、目を開き周囲を見る。ひどく緩慢な速度で、瓦礫にまみれた床がせり上がってくる。今自分は、地に落ちようとしているんだな。このまま頭を打ちつけ、即死するんだろうか。それとも何とか命を繋ぎ止め、いやと言うほど苦しみ抜いてから死ぬんだろうか。おぼろに、そんなことを考



えた。

時間の流れが、不意に元に戻った。

マルスは瓦礫と白骨の折り重なる床に、背中から突っこんだ。激痛が全身を貫く。口から奔流のように血があふれた。臓物が破裂したのかもしれない。しかし、かろうじて意識だけはある。

「う、あ、あ……」

呼吸も満足に出来なかった。血にまみれたマルスの周囲に、破片と瓦礫が雨あられと降り注ぐ。間もなく、確実にその一つに押し潰され命運は尽きるだろう。僅かに瞼だけが動かせた。かすかに目を開く。見ると、頭上にメディウスの巨大な首があった。覗き込むように、倒れ込んだマルスを凝視している。

『終わったな、これで、何もかも』

――まだだ、まだ！

言葉を放つことも出来ない。マルスは心中で叫んだ。しかし念話を操るメディウスは、その思考の声を聞き取った。

『無駄だ。今のお前に、何が出来る。所詮、貴様は人間なのだ。我々、龍人族の前には、蟻にも等しい存在だ』

『龍人族か。たった一人だけ生き残って、それで、何が出来る』

メディウスはさすがに驚愕した。ひた隠しにしていた事実を、見事に言い当てられたからだ。

『貴様、よくそれを……』
『考えればすぐに判る。ここに来るまでに見た無数の骨。恐らく、部族間の諍いか、流行病かだろう。遥かな昔、すでに龍人族の血は絶えていた。メディウス、貴様だけを残して』
　メディウスは沈黙を守り続けた。ただ血走った目でマルスを凝視し、その心の声を聞いている。頭上で轟音が響いた。ついに王城全体が崩れ落ちようとしているのだ。残された時間は僅かもないだろう。
　すさまじい量の瓦礫が、いつ頭上にのしかかって来てもおかしくない。現にドルーア城の大部分は、すでに崩壊しきっている。太い柱に支えられたドーム状の大聖堂だからこそ、かろうじて生き延びているに過ぎない。しかしそれも時間の問題だ。間もなくここは、瓦礫と残骸、土砂の山の底になる。巨体を誇るメディウスなら脱出も可能だろう。だが、マルスは……。
　しかしマルスは周囲の状況を意に止めず、心の中で言葉を紡ぎ続ける。思考の声とはいえ、それはすでに途切れがちで、マルスの命が徐々に失われていくのを如実に物語っていた。
『……だからこそ貴様は、軍事力を求めて、マケドニア、グルニアを、真っ先に攻め滅ぼした。大司祭ガーネフと、手を、結んだのも、自分の力、だけでは、不足と考えてだ……。そ、そして、龍人族消滅の事実を知られたくなかった貴様は、帝国の兵士をこの地に入れなかった……。違うか』
『なるほど、さすが勇者アンリの血を引く者。剣の腕だけでなく、頭も切れる。お前の言う通りだ。確かに、我ら龍人族は数百年の昔に滅んだ。だが、この儂と、もう一人、世継ぎを生む王妃だけが

いればいい！』

『そ、そうだ。そして、お前は、姉上の持つ蘇生の法力、〝オーム〟の力を、求めた。王妃となる龍人を、生き返らせる、ために……』

『見事な答えだ。まったくその通りだ。儂は龍人族の王女、チキを蘇生させようとした。それも果たせなかったがな。しかし、マルスよ。さぞ気分がいいだろう。憎き敵の、隠された事実を暴いて……』

マルスはそれ以上、何も言わなかった。何も念じなかった。すでに意識が混濁しつつある。明確な意志、鋭い闘気、明晰な思考。それらのすべてが、体の至るところから流れ出る血と共に、徐々に失われていくのを朦朧と感じていた。四肢は萎え、目が霞み、喉が焼け付く。龍人族の真実を言い当てた時に、残された力のすべてを使い切ったのだ。

『死ぬのは早いぞ、アリティアの王子。このまま放っておいても、お前は瓦礫の下敷きになって死ぬだろう。だが、人間ごときが龍人族の秘密を知ったことは許されん。この儂の牙にかかって、無様な肉片となって果てるがいい』

マルスは今にも失われそうな視力で、眼前を見つめた。獰猛な龍の顔がゆっくりと近付いて来る。

あの口が大きく開け放たれ、そして再び閉ざされた時、僕の命は尽きる。ごめん、シーダ。それにジェイガン、ナバール、散っていった多くの仲間たち。あの世に行ったら、素直に詫びよう。皆で僕の非力さを罵ってくれ。勇者アンリの名を貶めた、このアリティアの王子を。ぼんやりと、マ

ルスはそんなことを考えた。そんな彼の心の中に、メディウスの嘲笑に満ちた念話が届く。
『所詮、人間などは愚かな虫けらに過ぎんのだ。意味もなく死んでいく、惨めな生き物でしかない。死ぬがいい。自らの汚らしい血と体液にまみれて！』
虫けら。その言葉がマルスの脳裏で幾重にも重なり、残響を伴って無限に木霊した。アカネイアのために、永遠の平和を求めて死んでいった多くの仲間たち。勇気を武器に立ち上がり、怒りを刃に変えた残党軍の戦士たち。意味もなく死んでいく、虫けら。平和に暮らしながら、突然の戦災に焼かれていった多くの人々。徴兵され、同胞と戦うことになった多くの名もない兵士。家を守り、家族を守り、恋人を守り、果敢に抵抗を続けた村人たち。
それらを虫けら呼ばわりする、貴様は何者だ！　亡き父コーネリアス王の笑顔が。颯爽たるジェイガンの勇姿が。冴え渡るナバールの剣の技が。そしてシーダの百合のような微笑みが。マルスの心に浮かんでは消えていった。
「瓦礫の国の王が、龍の力を借りねば何も出来ない男が、言う台詞か！」
怒りに満ちた声で叫びながら、マルスはメディウスの眼前にすっくと立った。立てるはずはない。左足は完全に骨が砕け、右足は肉がちぎれている。それで、どうして立てよう。
しかしマルスは確かに立ち上がった。瀕死の重傷を負いながら、ガーネフを倒した時と同じく、不屈の闘志とすさまじい怒りを体にみなぎらせて、メディウスの目前で仁王立ちとなった。
「これが貴様の言う、虫けらの力だ！」神剣ファルシオンを右手でかざした。

光輝く剣から、溢れんばかりの力が流れ込む。それは無念の死を遂げていった、アカネイアの民の意志の力だった。マルスの血にまみれた手の中で、ファルシオンは一筋の光と化す。もはや剣の姿はとどめていない。目映く輝き続ける閃光の刃。戦いの中で散った多くの人々の命を受けて、輝く奇跡の光芒と化している。不屈の意志、強靭な精神によって輝きを増す。神剣ファルシオンの、込められた力が解放されたのだ。

『アリティアの王子、貴様！』

マルスは光と化したファルシオンを、メディウスの眉間に突き立てた。

炎を吐こうとしたが間に合わない。眉間から青い血を噴出させ、メディウスは周囲を揺るがす咆哮を上げた。崩壊の中、割れずに残っていたステンドグラスが一斉に砕ける。断末魔の叫びだ。その衝撃で、マルスは後方に吹っ飛ばされた。

痛みは感じなかった。それ以外の感覚もない。まるで肉体が消え失せ、心だけの存在になった、そんな感覚だ。マルスは瓦礫と白骨の散らばる床に倒れ伏し、白濁した目で身悶えするメディウスの最期を見守った。周囲の壁にさんざん体を打ち付けた後、メディウスはその体を僅かに傾けた。ずるずると、巨大な山が崩れるように力を失っていき、やがて黄土色の巨体を瓦礫の上に横たえた。

倒れ込んだマルスのすぐ脇に、メディウスの血塗れの首がある。閉ざされた瞼が、かすかに動いた。ややあって、マルスの心に弱々しい念話が届いた。

『まさか、再び、人間ごとき非力な生き物に、敗れるとは……』

マルスは答えない。意識は残っていたが、相手の念話を聞き取るだけで精一杯だった。

『だが、心せよ。幾多（いくた）の光によって守られし、アリティアの王子よ……。いつの日か、いつの日か……。人の心に迷いが、ささやかなる悪の火がある限り、我が分身は、この地に現れるだろう……。心せよ。闇は、光の輝きによって作られる……。永遠に、消えはしないのだと……。心せよ……』

念話は途切れた。そして次の瞬間、大聖堂の天井（てんじょう）に大きな亀裂（きれつ）が走った。亀裂は瞬（またた）く間に周囲に広がり、やがて壁が、天井が、床が、一斉に崩れだす。

ついにドルーア城の崩壊の瞬間が訪れたのだ。マルスとメディウスの戦いの煽（あお）りを受け、決定的な大崩壊が始まったのだ。倒れ伏したマルスとメディウスは、共に降り注ぐ瓦礫の渦（うず）に飲み込まれていった。まるで、それが運命であるかのように。

残骸（ざんがい）と瓦礫と土砂の流れが、大聖堂を完全に埋め尽くした。

「見ろ……」

アベルは力なく前方を指さした。マリクの、カインの、アベルの、パオラの、カチュアの、エストの見守る中、今まさにドルーア城が跡形（あとかた）もなく崩壊していく。音をたてて本陣が崩れ、瓦礫はさらに細かな破片となって周囲に飛び散った。すでに城壁は原型をとどめておらず、紙か布のようにへし曲がって崩壊する。雪崩（なだれ）のような瓦礫の波が合わさり、砕（くだ）け、周囲に広がっていく。破壊はさらなる破壊を呼び、土埃（つちぼこり）が陽（ひ）の光を覆（おお）い隠さんばかりに天高く舞い上がった。火山の噴火、大津波、

雪崩、そんな天変地異を想起させる、すさまじい破壊の奔流だった。
誰もが茫然とその光景を見守った。どうすることも出来なかった。噴煙のごとき土煙の中に、マルスがいる。暗黒龍メディウスと共に。それは動かしようのない事実だ。だが、今の彼らに何が出来る。見守るしかないではないか。少しずつ、崩壊の波は収まっていった。王城があった場所は、おびただしい土煙で覆い隠されている。茫然とした口調でカインが呟いた。
「暗黒龍メディウスは、死んだのだろうか。マルス王子と、共に」
「判らない。ここからでは何も見えないし、土煙が収まっても、確かめる術があるかどうか」
マリクは低い声で答えた。そして、腕の中で眠り続けるエリスを見つめた。その瞳は閉ざされたまま、ぴくりとも動かない。
――老師ウェンデルがガーネフに殺され、マルスはメディウスと運命を共にし、エリス様は永遠の眠りから目覚めない。結局、僕は何のために魔道の修行を成したというんだ。大事な人を、一人として守りきれないで……。
マリクは、あふれでる涙をこらえることが出来なかった。
「パオラ姉さん。これで、戦いは終わるのかなあ」
エストは恐る恐る尋ねた。だがパオラにしても答えようがない。皇帝メディウス、いや、暗黒龍メディウスが死んだかどうかすら、今は定かではないのだ。
「判らないわ。どうなるか」

「そっか……」
エストは僅かにペガサスを上昇させた。このまま、どこかに飛んで行きたい気分だった。いつになったら戦いは終わるのか。すでに敵の本拠も崩壊したというのに、それでもなお、戦いは続くのだろうか。
「あ？」不意に、エストがかすかな驚きの声を上げた。
「どうしたの？」
「あ、れ……」口を半開きにし、エストが前方を指さす。
誰もがある種の期待にかられ、崩れたドルーア城の方角を見やった。
土煙を背に、小さな人影が近付いて来る。歩き方がぎこちない。どうやら杖をついているらしい。ぎくしゃくした、奇妙な歩き方だ。どこかの老人だろうか。誰もが一瞬そう思った。だが人影が近付くにつれ、その輪郭が徐々に明確になっていった。
ついているのは杖ではない。剣だ。かすかな光を放つ、細い剣だ。
きらりと、人影の胸元辺りで何かが光った。赤い、小さな煌めきだった。
「ファイアー、エムブレム……」恐る恐るアベルが口にした。
「……マルス様？」
「そうだわ。マルス様よ。マルス様に違いないわ！」
「生きて、帰ってきた。王子が、生きて帰ってきたんだ！」

「王子！」
誰もが一斉(いっせい)に歓喜の声を上げた。そして手綱(たづな)を振るうのももどかしく、馬を人影の方へ走らせた。
満面に笑みを浮かべ、明るく瞳を輝かせ、喜びの嗚咽(おえつ)にむせびながら馬を走らせる。
ただ一人、エリスを抱いていたマリクだけが出遅れた。
「待ってくれよ、みんな！」エリスの身を案じながら手綱を握る。と、その時。
「え？」
最初は見間違いかと思った。確かめようと、エリスの美しい白い顔をのぞき込む。
ぴくり。確かに動いた。エリスの瞼(まぶた)が、かすかに動いたのだ。
「エリス、様？」
マリクは、エリスの眠りを醒(さ)ます符号(ふごう)が何だったのか、この時やっと理解した。我が弟が皇帝メディウスを打ち倒す。それこそが、エリスの暗示を解く唯一の符号だったのだ。メディウスがいかなる手を尽くしても、眠りを醒ますことが出来なかった訳(わけ)である。
アリティアの王女エリスは、自分の弟の勝利を心から信じていたのだ。勇者アンリの血に連なる、マルス・ノア・アリティアの勝利を。歓喜の余り、マリクは声も出なかった。こぼれそうになる涙をこらえつつ、皆が駆けて行った方に目を向ける。
暗黒龍メディウスを打ち破り、奇跡の生還を果たしたアリティアの王子は、ぎこちなく、しかし力強い足取りで、その歩をアカネイアの大地に刻み続けていた。

# 終章

かくして、暗黒龍メディウスの消滅と共に、ドルーア帝国は再び闇の中に消え去った。三年の長きに渡ったアカネイアの戦乱、すなわち、第二次ドルーア戦役も、ようやくここに終焉の時を迎え、暗黒に覆われていたアカネイアの大地に、再び光が取り戻されたのである。

そして。祖国のため、人々のため戦った自由アカネイア軍の戦士たちは、それぞれの帰路に立った。誰もが戦乱の日々を苦渋と共に思い返しながら、それぞれの道を進みはじめる。

蛇足かも知れないが、ここに判明している限り、彼らの足跡を記したい。

アリティア宮廷騎士団の生き残り、アベルとカインの二人は、それぞれ祖国に戻った。

アベルはいつの間にか婚礼を挙げ、近々、父親になる予定だという。

カインはジェイガンの後を継ぎ、後進の育成に汗を流している。黒豹と猛牛。二人の騎士は、時おり戯れに剣を打ち合わすこともあるが、その技の冴えは、いささかも衰えていないという。

オレルアン王国騎馬隊隊長、草原の狼ハーディンは、ニーナ王女を助けて、アカネイア王国の再建に力を尽くす。後にニーナに迎えられ、第二十四代アカネイア王となるが、それはまだ先の話

である。
ハーディンの部下、騎馬弓兵のウルフは、ニーナの親衛隊に加わり、その名を近隣諸国に轟かせた。やがて彼は、アカネイア騎士団を代表する騎士となる。
同じくハーディンの部下だった、ザガロ、ロシェ、ビラクは、それぞれオレルアンに戻り、国家再建に全力を尽くしている。
僧侶のレナは生まれ故郷に戻り、ただ一人生き残った肉親である祖父と共に、戦争で家を焼かれた戦災孤児たちの面倒を見ている。かつて暗く沈んでいたその顔も、今では明るく輝いているとも聞く。
盗賊のジュリアン。彼は盗賊稼業から足を洗い、かつての仲間リカードと小さな店を開いた。何と鍵屋らしい。芸は身を助く、ね。店を訪れたレナは、そう言って明るく笑ったという。
パオラ、カチュア、エストの三姉妹は、祖国マケドニアに帰還した。彼女たちはミネルバ王女を助け、王国再建に忙しい日々を送っている。パオラは、戦いの中で出会った一人の騎士と恋に落ちたと噂されるが、その相手が誰かは、判らないままだ。カチュアとエストは、相変わらず喧嘩ばかりしている。しかし陽気なエストも、最近はめっきり女らしくなった。と、本人は言っている。彼女たちは近々、遥か西の大陸へ修行の旅に出るともいう。
魔導士マリク。彼はエリスへの想いを胸にしまい込み、再びカダインへと戻った。自分の魔法の技はまだまだ未熟と、日夜厳しい修行を続けているようだ。

メディウスの元から助け出されたエリス王女は、マルスの唯一の肉親として、彼を優しく見守っている。結婚の噂がないのは、マリクの秘めた想いに気付いているからだろうか。もっとも、それは本人にしか判らない。

そして、シーダとマルスは……。

白い、柔らかい光の中だった。

少女は自分の体の温もりを感じ、かすかにその瞼を開いた。

不思議な気分だった。まるで母の胸に抱かれているような、いや、胎児になって、羊水の中で長い眠りに微睡んでいたような、そんな気分だった。微睡んでいた間、長い夢を見ていたような気がする。が、それがどんな内容だったかは思い出せない。

少女はふと、白く、細い手足を伸ばした。懐かしい感触だった。自分の手足を、意のままに動かす。それは言い様のない、愉悦の感覚だ。どこからか、女性の澄んだ声が聞こえる。少女はふと耳を澄ませた。

「あなたは勇者なのですよ。逃げては駄目。さあ、早くシーダに言ってあげなさい」

シーダ……。聞き覚えがある。そうだ、かつての自分の名前だったではないか。そして別の方向で、懐かしさに満ちあふれた声が響いた。忘れたくても忘れられない、懐古の情に満ちた声だ。

「そんな、ニーナ様。でも、シーダはまだ目覚めたばかりで、その……」

「だからこそ、今言うの。完全に目覚めたら、あなたはきっと恥ずかしくて、何も言えなくなるでしょう?」

「うーん、困ったな。ええと、その、シーダ。僕と一緒に、その、アリティアに来て、ほしいんだ。何て言ったらいいのかな、つまり、アリティアの再建に、手を貸してほしいんだ。だから、ええと……」

シーダの心に、今までの記憶のすべてが甦った。思わず立ち上がり、目の前の若者に飛びつく。

何も考えていない。そうしたいから、そうしただけだ。そして眠りから醒めきらない唇を僅かに震わして、ゆっくりと言葉を紡いだ。

「行きましょう、アリティアに。あなたの故郷に」

周りで歓喜の声が沸き起こった。皆が拍手を送り、中には冷やかしの声を投げる者もいる。その喜びに満ちた歓声の中、シーダはマルスにしっかりと抱きついた。

時にマルス・ノア・アリティア、十七歳と一カ月。タリスを旅立って、すでに丸一年の歳月が流れ去っていた。

## あとがき

言い訳です。しかし、最後に書かせて下さい。

御存知のように『ファイアーエムブレム』というゲーム作品は、壮大な世界観に基づき製作されています。多彩な登場人物、世界背景、各種設定、道具立て。どれを取っても実に巧みに、そして細やかに決め込まれているのです。

僕自身、そんな『ファイアーエムブレム』の熱烈なファンなのですが、だからこそ逆に、小説化の話が来た時、様々な思いで悩みました。

まず最初に悩んだのが、分量的な問題です。限られた枚数で、あの壮大な物語のすべてを描ききれるはずはない。まともに小説に起こせば、軽く千枚を越してしまう——全三巻の、超大作になる!——だろう。しかし、それはもともと無理な相談です。そこで結果的に、数多くの魅力的なエピソードを削除せざるをえなくなりました。

女魔導士リンダの身の上話。マルスの祖国、アリティア王国の解放劇。龍人族(マムクート)の生き残り、バヌ

トゥと王女チキの物語……。などなど、数え上げればきりがありません。しかし御理解下さい。僕としても、泣く泣く削ったエピソード群なのですから。

次の問題点が、いちばん重要かも知れません。それはファンの皆さんが抱いている『ファイアーエムブレム』のイメージを、打ち壊してしまわないかという懸念です。

完成されたゲームであればあるほど、小説という別の媒体に置き換えられた時のイメージギャップは大きくなります。しかもその小説が駄作だとしたら、ギャップは失望や憤りへと変わってしまうでしょう。

この問題は、最後の最後まで付きまといました。実際、こうして後書きを書いている現在も〝これで良かったのか⁉〟という思いが脳裏をかすめます。

が、その判断は、読者の皆さんに一任するしかありません。御意見、御叱責、何でも結構です。感想のお手紙をお待ちしています。本作品自体に関しては取り返しが付きませんが、もしかしたら『外伝』の小説化という話もあるかもしれません。その時の参考にさせて頂きたいと思います。

何しろ『ファイアーエムブレム』は、熱烈なファンの多いことで知られる作品です。そのような方々に、この小説がどのように受け取られたか。不安に恐れおののく毎日を送っているというのが正直なところです。

さて、書きたいことはまだまだあるのですが、後書きが、だらだら長くなっても仕方ありませ

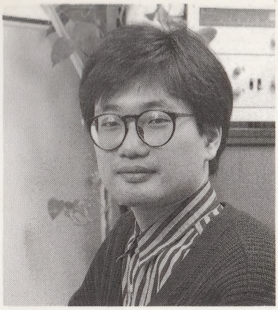
ん。ここいらで終わりにしようと思います。
それではまた、何かの機会があったらお目にかかりましょう。その時まで。

残暑の金曜日　　　　山口宏

小説 ファイアーエムブレム
暗黒龍と光の剣
双葉社ファンタジーノベルシリーズ

著者……………山口　宏
発行者………井上功夫
発行所………株式会社双葉社
〒162 東京都新宿区東五軒町３番28号
TEL 東京(5261)4818(営業)
東京(5261)4837(編集)
振替　東京８－117299
印刷……………慶昌堂印刷株式会社
製本所………株式会社若林製本工場
落丁・乱丁は本社にてお取り替えいたします
定価・発行日はカバーに表示してあります
ISBN4-575-23131-2　C0093

PROFILE



## 山口 宏

HIROSHI YAMAGUCHI

1964年、鳥取県米子市に生まれる。雑誌編集、ゲームデザイン、アニメーション作品のシナリオなど経て、小説家デビューを果たす。最近作として、「機動戦士ガンダム0083」(ノベライズ)、「バスタード!!」(シナリオ)などがある。血液型O、獅子座。


[小説]

# ファイアーエムブレム

【暗黒龍と光の剣】

定価1,000円(本体971円)
1992年10月26日第1刷発行

著　者　山口 宏
発行者　井上功夫
発行所　株式会社双葉社
〒162 東京都新宿区東五軒町3番28号

【双葉社】

ISBN4-575-23131-2 C0093 P1000E


【双葉社】 定価1,000円(本体971円)

FUTABASHA FANTASY NOVEL SERIES

# FIRE EMBLEM

Previously, cruel invaders took over his mother country and the Prince fled across the sea.
He bided his time in exile, but was always anxious to liberate his mother-land.
Time went by and the boy grew stronger mentally as well as physically.
Thus, the spreading war draws him into the battlefield again and
the high spirited youth cannot help but throw himself into the war.
He recruits those who share the same aspiration as his own and
embarks upon a trip to his homeland, driving off his enemies on the way.
As he battles on, he gradually gets to know his enemies and realizes what the war means to him.
He awakens to his position as heir to the throne.
When the "FIRE EMBLEM" is bestowed upon him, which constitutes recognition of valor and
gallantry on the part of the bestowed, he becomes a full-fledged adult and warrior.

[小説]
ファイアーエムブレム
【暗黒龍と光の剣】